つた。

　ロセスの方では、待てど暮せど死骸を屆けて遣さぬから、頻りに役所の方へ、催促をして居るが、役所の方では、未だ死骸の全部が、引揚げ終らぬので、確な返事が出來ない。從つて曖昧な事ばかり、いふて居るのだ。漸次、嚴しい懸合になつて來た。

『死體引渡と、時間の約束を、違約するやうな役人とは、如何なる談判をしても、滿足な結果は得られないから、我我は、直ちに京都へ乘込んで、太政官へ、直接に談判をする』

と、いつて來た。暢氣な役人等も、之れには驚いて、五代へ、此旨を通じた。同時に、中井の行方を搜す事になつた。

やうやく、搜し當たが、酒を飮んで居て、動きさうにも仕ない。

『五代が、引受けて居るから、左樣騷がんでも可い』

『併し、異人の方から、やかましくいつて來ますから、困ります』

『そんな掛合に、困る奴があるか。よい加減に、扱らつて置け』

中井が、この調子では、とても駄目だから、五代へ、此事を告げた。五代は、中井の居る所へ、やつて來た。

『オイ、面倒になりさうだ』

『毛唐人め、到頭、怒つたか』

『左樣だ、甚く怒つたやうぢや、京都へ、直接に掛合ふ、と、いつて居るさうぢやよ』

『どうした、死骸は、未だ見付からぬか』。

『もう一人、見付ければよいのぢや』

『約束は、今夜の十二時ぢやが、今、何時だらう』

『最早、二時近くなつて居る』

『二時といへば、最早夜半だ。併し、京都へ出かけるといふのぢやから、それは、抑へて置かねばなるまい』

『毛唐人は、時間が、やかましいから、抑へやうがないのぢや』

『見つからぬものは、致方があるまい』

『それは、此方の都合で、先方では、承知しまい』

と、二人は、押問答を、仕て居る所へ、死骸が、全部、揃つたといふ知らせがあつた。其處で、二人は、現場へ、馳けつけた。

一四

　ロセスは、約束の時間が、二時間も、後れて居るのに、中井も來なければ、五代も來ないから、役所の方へ、頻りに催促するが、それでも、曖昧な返事ばかりであつた。果は、二人の行方が判らぬから、搜して居る、といふ、無責任な、返事であるから、最初は、威嚇の氣味で、怒つて居たのだが、終には眞正に、怒つて了つた。夜の明けるを待つて、愈々、京都へ乘込まう、といふ覺悟になつた。

『只今、日本の役人が、參りました』

『誰が、來ましたか』

『五代と、中井の二人であります』

『ハ、ア、來ましたか』

『箱を澤山、持つて來ました』

『宜しい、之へ通しなさい』

熟柿のやうな息を吐き乍ら、中井は、醉歩蹣跚として、入つて來た。斯うした懸合に、醉つばらつて來るなどは、

實に怪しからぬ事だ。

『ヤア、約束の死骸を、引渡します。一々檢めて、お受取り下さい』

といふ、中井の顔を、眤と、ロセスは、見て居たが、何の答へもない。

『エーイ、甚く醉ひましてな。スツカリ快い心持になつちまつた。ハツハ、、、』

ロセスは、益々呆れ返つた。

『死骸を、持つて來ましたか、約束の時間、大變に違ひます』

『死骸は、持つて來ました』

『持つて來た事、判つて居ます。今、何時だと思ひます』・

『左樣、何時でせうかな』

『約束しました時間、今晩十二時あります』

『成程』

『今、何時と思ひますか』

五代は、ニヤ〳〵笑ひながら、

『まア、ロセスさん、然う怒らずと、折角持つて來たのですから、快よく受取つて下さい』

『それは受取ります。受取りますが、時間の約束を、輕んずる事、私怒ります。十二時の約束どうしました』

『然う、嚴しく言はんでも、よからう。早く持つて來なければ、生命が助らぬ、といふやうな譯でもない。早くても遲くても、どうせ死んでるものぢやから、同じ事ではないか』

『貴下、何を言ひますか。然ういふ理由を以て、私の方、早く持つて來い、と言つたのではありません。今晩の十二時に、死骸渡せ、渡します。約束ありましたから、私、待受けて居りました。約束の時間、後れて來て、理窟言ふのは、どういふ譯ですか、日本の役人、時間の約束、守る事、出來ませんか』

五代を相手に、ロセスが、辰巳上りになつて、眉毛を逆立て、眼を瞋らして、談判をして居る。其隙を見て、中井は、ズツと立つて、便所へ行つたかと思ふと、直ぐ歸つて來た。まだ五代と、ロセスは、怒つて居るが、五代は、ニヤ〳〵笑つて、却々恐縮して居ない。

『死骸は、慥かに受取りました。時間の約束、之から出來ない、といふのですか』

中井は、五代が答へやう、とするのを遮ぎつて、

『まア、五代待て、俺が答へる……エ、、何ういふ話ですか』

今まで、懸合つて居るのを、改めて、どういふ話ですか、と聞くのだから、隨分、無禮な事だ。馬鹿に、されて居るか、と思ふと、ロセスは、倍々、癪に障つて來た。

『時間の事、言ふて居るです』

『ハ、ア、時間が、どう仕た、といふのですか』

『十二時の約束しました。今、何時と思つて居ますか』

『フ、ム、十二時の約束だから、十二時に來たら、敢て差支へないでせう』

『えツ、十二時……』

『十二時に、持つて來ました』

『今、十二時ありますか』

『十二時です。立派に、十二時です』

『貴下、噓ばかり言ふ。最早、二時あります』

『ナーニ、そんな事はない。慥に十二時ぢや。京都の役所から、返事の來るのを、待つ爲めに、一杯飲みながら、時

を計つて來たのです。十二時といふから、十二時に來たら、それで、よいと思つて、時間を計つて、やつこ來たのだから、そんなに、ブウ〳〵言ふには及ぶまい』

ロセスは、チョツキの包囊から、時計を出して、

『御覽なさい、二時過ぎて居ります』

中井は、醉眼を開いて、時計の針を見ながら、

『フヽン、成程、二時過ぎた。併し、貴下の時計は、違つて居る』

『ナニ、私の時計、違つて居ますか』

『大變、違つて居ます。直して置きなさい』

『何う違つて居りますか』

中井は、帶の間から、時計を出して、

『此通りです。貴下のは、餘程、進んで居る』

ロセスが、首を伸して、中井の時計を見ると、十二時十分前に、なつて居た。

『オヽ、貴方の時計、十二時前ですか』

『左樣、チヤンと、時間を計つて、以つて來たのだから、間違ひはない』

便所へ、行つた時に、中井は、時計の針を、後へ廻して置いたのだ。それで澄まして、時計を示して、威張つて居るなどは、一寸面白いぢやないか。ロセスは、呆れ返つて、最早、後の言葉が、出ない位だ。

『どうです。我々の時計は、此通りです。貴下の時計が、進んで居るのぢやらう。いや、事に依つたら、此方の時計が、後れて居るのかな。明日になつたら、判るぢやらう。兎に角、死骸だけは、受取つてお置きなさい』

ロセスは、二人の圖太しいには、呆れ返つて、時間の爭ひは、之で消えて了つた。

昔の外交官には、斯うした、放れ業をした者がある。今の時代に、之が行はれるとは、思はぬが、少くも是丈けの糞度胸を、有つて居らぬと、毎も、戰爭に勝つては、外交で負ける、といふやうな事になるのだ。

一五

この事件は、前の兵庫事件と異つて、懸合が面倒であつたのは、言ふまでもない。岡山から出て、兵庫の町を、通り掛り、不圖した事から衝突して、たつた一人の、異人を斬つただけの事件でさへ、日置の家來が、犧牲的に切腹して、漸く事濟みになつたといふやうな譯だ。況して、今度の事件は、新政府の命令に依て、堺浦を、警戒して居る兵士が發砲して、十名に近い、異人を殺した、といふのだから、餘程、念入りの亂暴であつた丈けに、佛蘭西公使の、懸合が嚴重かつたのは、いふまでもなく、外國事務係り丈けの相談で、手輕に片付く、といふやうな事にもならず、太政官の會議へ、持出すまでになつたのは、是非もない事だ。

それに就ても、硬軟二つの議論はあつたが、總裁顧問の木戸は、最も強い意味の、嚴罰論を、唱へて居た。

『斯樣な事が、屢々、行はれる中には、遂に異國と、戰端を開くやうにもならう。今度の責任者は嚴罰に處して、將來を、深く戒飭する必要がある、と思ふ。若し、寛大な、處置を與へて、それが爲に、各國公使の感情も、惡くするやうな事があると、今後の外國事務にも、少からぬ障碍が起つて、何事にも、不都合を、感じる事が、多くなるに違ひない。されば、其責任者の如きも、一人に止めず、手を下した者は、すべて嚴罰に處して、我政府の眞意は、各國に對して、偏狹な考へを、有つて居るものではないといふ事を、明かにして置く必要がある。さなきだに、從來、取り來つた、攘夷論の爲に、各公使の間には、猶ほ我政府の精神を、疑ぐつて居るものもあるのだから、此際特に、其邊の考慮も、必要であらう。兎に角、關係者の、重立ちたる者は、切腹をさせて、其場所に、公使の立會を、求める位の事は、仕なければならぬ』

といふ意見を述べたのであるが、論戰には、頗る花が咲いた。

『今日になつて、木戸顧問が、斯ういふ弱い音を吐く、といふのは、甚だ怪しからぬ。六七年前まで、唱へて來た、攘夷の精神は、全體、何うなつたのであるか。其時と、今日とでは、國の事情も、異つて來たには違ひないが、今俄かに、異人の前に、脆くも膝を屈するといふのは、木戸顧問としては、不似合な事である』

といふて、頻りに激しい議論を、爲るものがあるから、木戸は、それを押へて、

『然らば、何ういふ風に、此治まりをつける、といふのか。先方では、下手人に對して、嚴罰の請求をして居るのだ。足下方のやうな事をいふて、恰も下手人を、庇ふやうな事を仕たならば、懸合の納まりは、つけやうがなからう。亦、此場合に、政府が、下手人に對して、寛大な處置でも、執つたならば、それこそ、我政府は、未だに攘夷の意見を、有つて居るものと誤解されて、或は、德川の爲に、各公使が、力を添へて、どういふ事を、仕ないとも限らぬ。然ういふ點を考へたならば、箕浦以下、重立ちたる者に、切腹させる位の事は、已む事を得まい。それともに、足下方は、彼等を殺さずしてロセスに手を引かせる、工風でもあるのか。只だ徒らに、強い議論ばかり唱へても、事の納まりを、どうつけるか。といふ事を考へなければ、何の甲斐もないのであるから、拙者が、述べた意見に對して、若し反對である、といふならば、此事の納まりを、どうつけるか。その方法を、先づ聞かせて貰ひ度い。其方法にして、尤も千萬である、と思へば、彼等を、嚴罰に處するにも及ばぬが、どうしやう、といふのか』

斯ういはれて見ると、反對したものも、一言半句の答へが出ない。兎に角、差當つての問題が、佛蘭西公使をして、穩やかに手を退かせるといふより、他には、ないのであるから、二日餘りに亘つての相談も、遂に決して、木戸が、いふ通りにするといふ事になつた。

彌、箕浦以下の者を取調べて、主唱したり、鐵砲を撃つたりしたもの丈けを、引揚げて見ると、二十人になつたから、それ等の人に對しては、切腹の申渡しをして、直ぐ其旨を、ロセスに通じて、圓滿の解決を求めた。ロセスの方

でも、之までに、政府が、誠意を盡して吳れるならば、是以上に、追窮する考へはないのであるから、其他の條件に就ては、多少の折合をつけて、圓滿な解決を、見る事になつた。切腹の場所に、立會ふ事も、無論承知して、其當日には、ロセスの代理として、書記生が、立會ふ事になつた。堺の妙國寺を以て、切腹の場所と決めた。處分を受ける、人達は、立派な、武士の心を、有つた人のみであるから、少しも怯れた樣子もなく、當日には、何れも勇んで、切腹の覺悟をした。

準備も出來て、政府から、出張した役人と、公使の代理が、立會つて居る。其前に、二十人が、ズラリと並んで、片端から、切腹して行く、といふ事になつた。二十人が、一人づつ切腹するのを端から、介錯して行くのだ。之を眼の邊りに、見て居るのだから、餘程、氣丈なものでなければ、堪へられるものではない。

愈々、時刻が來て、第一番の者が切腹した。それから二人三人と、漸次、進んで切腹するのを、介錯して行く。第十一番目に、箕浦が、控へて居たのだ。流石に、土州藩でも、膽力のある人として、聞えて居た丈に、短刀を、逆手に執つて、左の脇腹へ、突立てると、手をあげて、

『介錯の方、暫くお待ち下さい。拙者が宜しいといふまでは、介錯なさらぬやうに』

と注文した。太刀取は、後へ廻つて居たが、ジツと、其樣子を見て居ると、軈て、左の脇腹へ突刺した短刀に、手をかけて、ぐツと、一と息に、右の脇腹まで、引いて來たから、さツと、血がほとばしると共に、臟腑が、出て來る。短刀を下に置いて、その臟腑を引摑み、力に任せて、引出したので、臟腑の一部が、千切れた。それを摑んだ儘、立會人方に向つて、

『日本武士の、最期の狀態、能く〳〵御檢分下され』

と、いひながら、パツと、公使代理を目掛けて、臟腑を投付けた。イヤ、驚くまい事か、異人は、眼の色を變へた。尤も眼の色は、初めから變つて居るが、眞蒼な顔になつて、其場を駈出すと、立合の役人を、呼んだ。

『最早宜しい。殘餘の人、助けて下さい』

といひながら、慄へて居る。

『ハ、ア、切腹は、最早、宜しいのですか』

『最早、宜しい。私から、公使に、話いたします』

於是、切腹は中止となつた。公使代理は、歸ると直にロセスに、會つて、此模樣を物語つた。

『將來の事もあるから、懲戒の爲に、腹を切らせるのであるが、今日の有樣から考へると、日本の武士は、腹を切る事を、一つの外見にして居るのであるから、肝腎の懲す、といふ目的は、遂する事は、出來ない。殊に、十一人も、切腹して見れば、政府の眞意も、判つて居るのであるから、此以上、人命を損ずるにも及ぶまいから、これで止めたら、如何ですか』

と、いふのを聞いて、ロセスも、其氣になつて、遂に政府へ、其他の者は、許して貰ひたい、といふ事を、今度は、反對に請求した來た。未だ切腹せずに、居た者丈けは、不思議に、命を助かる事になつた。

世間では、之れを、妙國寺の切腹事件ともいふて、居るが、兎に角、悲愴を極めた、切腹の狀態は、五代をして、終に官界を、去らしめるに至つた。

▲木戸は、慶應四年二月一日に、外國事務掛を、兼任せしめられたから、當時は、總裁局顧問と同時に外交方面にも、鞅掌して居たのだ。

五事の御誓文

一

一言に、新政府といへば、大層らしく聞えるが、其實は、少し大きな町役場でも、慶應當時の太政官位の組織には、なつて居るのだ。役人の員數ばかり、多く居て、誰が、どういふ事務を執つて、國の政治は、どういふ風に、やつて行く、といふやうな見込は、一向について、居なかつた。毎日、集まつて來ては、勝手な議論ばかり、仕て居たのだ。

九條關白の邸を借りて、假に太政官を設けたのであるが、邸の狹い割合に、役人の數が多いのだから、到底、座敷には、入り切れない。乃で、庭へ天幕を張り、蓆を敷いて、其上にズラリと、並んで居たのだから、面白い。机の數が足りぬ、といふので、頻りに其請求をするが、政府には、金がないので、机を買ふ事が出來なかつた。寺院に押掛けて、經机を、引揚げて來て、役人に渡して、事務を執らせた。宛然、葬式の帳場みたやうなものが、出來たのだ。之が、太政官の實況だから、可笑なものであつた。

乍併、役所の體裁は、此樣な風であつても、詰合ふて居る役人は、各藩から、選まれて來た、一粒選のやりでばかりで、長い間、浪人生活も、やつて來て、變亂の巷を、潜りぬけて來たのであるから、存外に見識は高く、相當の意見は、有つた居る。

其前から、問題になつて居たのが、新しい政府を、起した以上、人心を新たにして、德川政府に、從つて居た、一般の人心を、新しい政府に、引付ける途を、講じなければならぬ、といふ事であつた。それには、餘程、目先の變つた事を、仕て見せなければ、一般の人心が、新しい政府に、向いて來ぬから、兎に角、何か奇拔な事を、仕やうではないか、といふのが、いつも、問題になつて、居たのだ。

或日の事、福岡藤次と、三岡八郎が、机を並べて、頻りに話合ふて居たが、軈て、福岡は、筆を執つて、スラ〳〵と、何か書いて、三岡に示した。之を見ると、三岡も頷いて、亦、何か認めて、福岡に示した。再三、斯ういふ事が繰返されて、最後に、福岡は、筆を執つて、それを淸書し、又、協議に、時を費やした。二人は、宿所へ引上げても、祇園や島原の遊里へ行つても、その事ばかり相談して居た。やうやく、意見が一致して、それを淸書したが、制度事務總裁をした居た、萬里小路博房の前に、持つて來た。

『斯ういふのが、出來ました。一應、御覽を願ひたい』

『ハ、ア、何ぢやね』

『之を布告して、一般の人民に示したと思ふのですが、思召しは如何で、ございませうか』

博房が、書附を見ると、

一廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

一上下心ヲ一ニシス盛ンニ經綸ヲ行フベシ

一官武一途庶民ニ至ルマデ各々其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメム事ヲ要ス

一知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

と、書いてあつた。

博房は、不審の眉を寄せて、

『之を、何う仕やう、といふのですか』

と、質かれて、三岡は、

『天子の名を以て、四民に示すのです』

『フ、ム、それは、何ういふ主旨で、示さうといふのですか』

『これからの政府が、何ういふ方針を以て、天下に臨むか、といふ事が、未だ判つて居らぬから、之丈けの事を、維新の精神として、之からの政治を、執のである、といふ、事を、示したならば、四民は喜んで、之を迎へる、と思ふ。此四ケ條は、何れも、今までの德川政府が、執らなかつた方針であるから、之を示す事になれば、億兆の心を以て心とせられる。上御一人の大御心が、人民にも判り、喜び服して來るだらう、と思ふ。如何ですか』

『そりや、不可ぬ。御國體の上から考へて、天皇が、親から人民に向つて、政治の方針を誓ふ、などいふ事は、これまでに例のない事で、左樣な事は、同意する譯にはならぬ』

キツパリと答へたので、之から福岡は、膝を進めて、博房の意見を、辯駁する。三岡も、肱を張り、肩を聳やかして、盛んに氣焰を吐く、といふやうな譯であつたが、終に斥けられてしまつた。陪臣から成上つたものは、多く贊成したが、公卿の多數は、反對する、といふ傾向があつた。一切の事務は、そつち退けになつて、論戰が、盛んになつて來た。

何程、議論を仕たとて、之に對して、裁決を與へるものが、ないのだから、互ひに强情を張合ふて居るばかりで、議論は、漸次、難かしくなつて來た。

二

其頃の木戶は、却々、忙しい役廻りであつた。何しろ、總裁顧問といふのであるから、何の役所へ行つても、木戶

の裁決を、待つ事が、多く、而も、議論の多い連中が、集まつて居たのだから、小さな事にも、論戰が始まつて、容易く決しない。それを、木戸が、裁決を與へて、定めるのであつた。

木戸が、獨斷を以て、決められない問題も、一日に、何件ともなく、起きて來るので、そのたびに、內閣の會議がある。木戸は、常に問題の說明をして、閣議を定めるのが、その役目であつた。それが爲に、木戸は、何所の役所へ行つても、引張り凧で、非常に忙しかつた。

木戸が、自身に、何ういふ事務を執る、といふ事は、ないのだが、人の議論を聞いて、善惡を定め、又、良い議論でも、直ぐに行ふ譯に、行かぬ事と、詰らない議論でも、行つて見たら、存外に面白くなるだらう、といふやうな、見込のあるものがある。それを鑑別て、處分するのであろから、木戸のやうな、才智のすぐれた人には、適當な役であるが、隨分、氣骨は、折れる役であつた。

今、太政官へ、歸つて來て、制度事務局へ、やつて來ると、福岡と三岡の二人が、書いた物が問題となつて、大議論を、闘はして居る所であつた。木戸は、何の事やら、顚末が判らないので、博房の傍に坐つて、しばらく默つて居た。不圖、眼に注いたのは、博房の机の上に、載つて居る書付である。それへ、眼を注けると、何か知らぬが、四ケ條を、認めたものがあるので、原來、之が、議論の種子だな、と思つた。時に、博房が、

『木戸さん、能うお出でぢやつた。今、此書付に就て、難かしい議論が、初まつて居る所ぢやから、貴下の考へを、先づ聞いて見たい』

と言ひながら、例の書付を、突付けた。木戸は、第一條から、讀んで行く。双方は、鳴を鎭めて、木戸を見詰て居る。

木戸は讀み了つて、

『ウム、こりや面白い。誰の書いたものか知らぬが、良い思ひ付きぢや。之を何うしやう、といふのか』

三岡は、進んで發言した。

『天子の名を以て、四民に示さう、といふのです』

『フヽム、而て見ると、天子が、人民に對して、之丈けの考へを以て、之からの政治を執る、といふ事を、誓ふのぢやね』

『左樣』

木戸は、思はず手を拍つて、

『こりや、新案ぢや。此位の決心を以て進まなければ、長い間武家に依つて、抑へられて居た、天下の人心を、動かす事は出來ぬ。民の心は、天子の心、天子の心は、卽ち民の心なのぢやから、所謂、天下は、天下の天下にして、一人の天下ならず、此心を以て、民は、天子を戴き、天子は、民に接する、といふ、其處に、御國體の基礎と、いふものがあるのぢやから、無論、之で進まなければならぬ。こりや、良い事を考へた』

案に相違した、木戸の答へに、流石の公卿連中は、開いた口が塞がらなかつたが、發案者の福岡、三岡は、非常に喜んだ。

『何うだ、恐れ入つたか』

と、いつたやうな、顏付で、博房卿を初め、多くの公卿を、ズツと見渡した、公卿の方では、頰を膨らして、怨めしさうに、木戸を、睨んで居る。博房の語氣が、荒くなつた。

『木戸さん、貴下は、左樣な考へを、有つて居られるが、開闢以來、天子が、人民に向つて、誓ひを立てる、といふ事は、未だ曾て聞かぬが、左樣な事をいたせば、自然、天子の尊嚴にも關はる、といふやうな譯で、甚だ面白くない、と思ふが、貴下は、何ういふ譯で、之を可い、といはしやるのか』

『然れば、今までは、然ういふ固陋な、意見を以て、天下の人を、治める事も、出來たか知れぬが、今や、海外諸國と、交際を結んで、日本の四方からは、ドシ〳〵異人が、入つて來るのぢや。從つて、此國の基礎は、天子と人民

が、一致になつて固めなければならぬ。それを爲るには、斯ういふ事をして、人民の心の底から、眞に天子の有難い、といふ事を、思はせなければならぬのぢや。假令、天子が、人民に誓ひを立てる、といふ事が、先例にないにもせよ、斯樣な、良い事を誓ふのに、何の不思議があらうか、又、人民の方では、天子の御心が、玆にある以上はといふので、眞に忠節の心を以て、天子の爲に、努める事になるから、軈て、此の國の力になるのぢや。拙者は、之を布告として、天下の事を、治めて行くのが可い、と心得る』

斯ういはれて見ると、博房は、一言もなく、其場の議論は、濟んで了つたが、此事が問題になつて、漸次、制度事務係の間に、討議を、重ねて遂に、一二の字句を訂正し、更に一ケ條を加へて、其文書は、太政官へ、廻る事になつた、說明の役は、木戸が勤めた。評議を盡した結果、御前へ捧げて、正式は、決定したのであるが、

「舊來の陋習を破り、天地の公道に基く可し

といふ一ケ條は、木戸の加筆であつた。

三

世に有名な、五事の御誓文が、經机に倚掛つて、樂書同樣に書いたものが、原因になつて、天下に公表された、といふやうな事は、甚だ興味のある事柄だ、と思ふ。

今日までは、總て人民をして、政治の內容に、關係させぬやうにして居たのが、俄に斯うした、御誓文が出て、而も、それが天子の名に依つて、發表されたといふ事は、隨分、其當時としては、內外の人が、驚いたに違ひないが、併し、那のやうな時代に、此の英斷を行つた事は、慥に六百年來、武門の政治に、飽いて居た、一般の人心を、新にしたに違ひないのである。

乍併、福岡と三岡が、假令、偶然にもせよ、此名案を提出して、太政官の議に上り、更に御前會議に依つて、決

定する事を得たのは、木戸のやうな、人物が居つたからである。たとへ、此名案を、起草する人があつても、之れを實行し得なければ、何の甲斐もないのである。幸ひにして、木戸の如き、人物が居たのは、國家の爲にも、頗る好都合であつた。

征討軍を、繰出す時に、軍用金のない爲に、大まごつきであつた。それから、太政官に、備へ付ける、器具を買ふのにさへも、金が無くて困つた、といふやうな時代に、陪臣から一躍して、朝廷の重臣となり、天下の樞機に參與すると、いふのだから、其連中の元氣も、溢れて居るし、智惠も、盛んに働いたのであらう、從つて、殆んど火事場にひとしい、騷ぎの中に在つて、咄嗟の間に、考へ出した事にも、却々、良案があつた。御誓文の如きは、其一例に過ぎないが、兎に角、今から思へば、感心するの外はない。

天下の大勢は、既に定まつた。世は王政復古となつて、武門政治は、倒れてしまつたのではあるが、乍併、未だ諸侯の向背迄が、全然定まつた、とはいへぬ。現に、征討軍は、有栖川宮を戴いて、關東へ下つたが、德川慶喜は、江戸城を出て、上野の寺中に、謹愼を表して居る、といふ丈けの事で、幕臣は、未だ各所に、氣を吐いて居るのみならず、新たに訓練された、歩兵隊の如きも、隨所に屯集して、對抗の意氣を、示して居る。奧羽諸州の大名は、會津藩を、中心として、堅く連盟を結び、官軍に當る可く、その準備を、進めて居るから、却々、安心して居る事は、出來ぬのであつた。然れば、征討軍を、率ゐて行つた人達も、隨分、苦心は仕たであらうが、却て、留守番として、政府に居殘つた者には、一層の苦心があつた。

木戸は、留守番の頭として、可成りの苦勞であつたが、薩藩の大久保と、能く相和して、何事も、相談の上で、進んで行つたから、大概な事は、思つた通りに、運びはついた。けれども、新たに、天下を引受けた政府が、一文無しでは、動く事が出來ぬ。三岡の働きで、豪商を脅迫して、御用金を召上げたり、或は、金札を發行して、辛うじて一

時の凌ぎはつけたが、其位の事では、充分に安心といふまでにはならなかつた。

於茲、大久保は、朝廷へ建白して『一日も速かに、新帝陛下が、大阪城へ、お遷り遊ばして、親しく政治を臠せられる、といふ實を、一般の人民に示すのが、大切である。場合に依つては、新たに帝都を、大阪に遷して、大に人心を收攬する事を努めるのは、方今の急務である』といふ意味の事を、申上げた。

此意見は御採用になつて、三月になると、愈、龍駕は、京都を發して、大阪城へ、お遷りになる事が決した。尤も、此事に就ては、各方面に、反對の意見が唱へられ、頑迷不靈な、公卿は、殊に反對したのであつた。けれども、大久保の唱へた議論が、如何にも立派で、表面から、反對する事は出來ぬので、大久保が、一と押、押てゆくと、公卿も、遂に尻尾を卷いて了つた。建白書の全文を、掲げる事にしやう。

今日ノ如キ、大變革ハ、開闢以來、未ダ嘗テ有ラザル所ナリ。然ルニ、尋常定格ヲ以テ、豈之レニ應ズベケンヤ。今一戰、官軍勝利トナリ、巨賊、東走スト雖モ、巢穴、鎭定ニ至ラズ、各國交際、永續ノ法、未ダ立タズ、列藩離叛シ、方向定マラズ、人心恟々、百時紛紜トシテ、復古ノ鴻業、未ダ其中ニ至ラズ、纔ニ其端ヲ開キタリ、ト云フベシ、然レバ、朝廷ニ於テ、一時ノ利得ヲ計リ、永久治安ノ策ヲ、爲サヾル時ハ、則チ北條ノ後ニ、足利ヲ生ジ、前姦去リテ、後姦來ルノ覆轍ヲ、踏セラレ候モ、必然ナルベシ。依之、深ク皇國ヲ注目シ、觸視スル所ノ形跡ニ拘ラズ、廣ク宇內ノ大勢ヲ、洞察シ玉ヒ、數百年來、一塊シタル、因循ノ弊ヲ一新シ、國內、同心合體、一天ノ主ト申スモノハ、斯クマデ賴母シキ物ト、上下一貫、天下萬民、感動泣涕致シ候程ノ御實ヲ、擧行セラレン事、今日急務ノ最急ナルベシ。是マデ、主上ト申奉ルモノハ、玉簾ノ內ニ在シ、人間ニ替ラセ玉フ樣ニ、僅カニ限リアル公卿方ノ外、拜シ奉ル事モ、出來ザル樣ナル、御有樣ニテハ、民ノ父母タル、天賦ノ御職掌ニ、乖戾シタル譯ナレバ、此御根本道理適當シ、御職掌定マリテ、初メテ、內國事務ノ一法起ルベシ。右ノ根本ヲ推究シテ、大變革セラルルベキハ、遷都ノ典ヲ、擧ゲラル、ニ在ルベシ。何トナレバ、弊習ト云ヘルハ、理ニ非ズ、勢ニ在リ、勢ハ、

觸視スル所ノ形跡ニ歸スベシ。今、其形跡上ノ一二ヲ論ゼンニ、主上ノ在ス所ヲ、雲上ト云ヒ、公卿方ヲ、雲上人ト唱ヘ、龍顏ヲ、拜シ難キ物ニ譬ヘ、玉體ハ、寸地モ踏ミ玉ハザルモノト、餘リニ推尊シ奉リテ、自ラ分外ニ、尊大高貴ナル者ノ樣ニ思召サレ、終ニ上下隔絕シテ、其形跡、今日ノ弊習トナリシ者ナリ。敬上愛下ハ、人倫ノ大綱ニシテ、無論ナル事ナガラ、過マレバ、君道ヲ失ハシムルノ害アルベシ、仁德帝ノ時ヲ、天下萬世、稱讚シ奉ルハ外ナラズ、即今、國々ニ於テモ、帝王、從者一二ヲ率ヰテ、國中ヲ步行キ、萬民ヲ撫育スルハ、實ニ君道ヲ、行フ者ト言フベシ。然レバ、更始一新、王政復古ノ今日ニ當リ、本朝ノ聖時ニ則ラセ、外國美政ヲ壓スルノ大英斷ヲ以テ、斷行シ玉フベキハ、遷都ニ在ルベシ、是ヲ一新ノ機會トシ、簡易輕便ヲ本トシテ、數種ノ大弊ヲ拔キ、民ノ父母タル、天職ノ君道ヲ履行セラレ、命令、一タビ下リテ、天下慄動スル所ノ大基礎ヲ立テ、推及シ玉フニ非ザレバ、皇威ヲ、海外ニ輝カシ、萬國ニ、御對立アラセ候事、叶フ可カラズ。遷都ノ地ハ、浪華ニ如クハナシ、暫ク行在ヲ定メラフ、治安ノ體ヲ、一途ニ据ヱ、大ニ成ス事アルベシ、外國交際ノ道、富國强兵ノ術、攻守ノ大權ヲ取ル事、海陸軍ヲ起ス事ニ於テ、地形適當ナルベシ。尙ホ、其局々ノ論アルベケレバ贅セズ、右國內事務ノ大根本ニシテ、今日、寸刻モ怠ルベカラザルノ急務ト、奉存候、此儀行ハレテ、內政ノ軸立基本始メテ擧行スベシ。若シ眼前、些少ノ故障ヲ懸念シ、他處ニ移リ候ハヾ、行フベキ機ヲ失シ、皇國ノ大事、終ニ去ルベシ、仰ギ願クバ、大活眼ヲ以テ、一新シテ、急率施行アラン事ヲ、千祈萬禱シ奉リ候。死罪

江戸が、東京と改まつて、日本の帝都になつたのを、大久保の建白が、原因であるが如く言はれて、奠都三十年祭の時にも、東京の人は、大久保の德を頌して、盛んに祭典をしたが、其實を謂へば、大久保の遷都論は、大阪を指して、いふたのであつた。江戸へ、帝都を遷す可し、といふたのは誰の主唱で、あつたかといへば、江藤新平である。世間には、斯うした間違は、屢くあるもので、肝腎の本人が、江湖から忘れられて了つて、飛んでもない、方面の人

が、其巧勞者として、後世になつてから、稱贊されるといふやうな、事は、往々にして、ある事だから、歷史を讀むものは、餘程、注意しなければならぬ。

それに酷く肖た話は、國會開設の主唱者に就てもある。その主唱者としては、神田孝平が、一番に夙かつたのである。けれども、全く江湖には知られず、明治六年になつてから、板垣、副島、江藤、後藤の四參議の建白が、最初の如くいはれて、神田の名は、殆んど世間の人に知られなかつた事もある。奠都三十年祭の時、著者は、江藤が、遷都論の主唱者であるから、若し此際に於て、東京の恩人として祭るなれば、江藤でなければならぬ、といふ演說をして大に注意を與へたけれども、遂に其議論は看みられないで、却て一笑の中に、葬られて了つたが、その後、證據となるべき書類が、多く出て來て、議會では、的野代議士が、頻に之を論じて、江藤の、德を頌する事になつた。

江藤は、佐賀の鍋島の家來で、其身分をいへば、極めて低いものであつたが、勤王の大志を懷いて、夙くから、京都へ出て來て、勤王倒幕の爲には、非常な、盡力を仕た。當時の佐賀藩は、首鼠兩端を持して、甚だ曖昧なものであつたのみならず。動もすれば、佐幕の臭氣が、芬々として居たが、伏見鳥羽の戰ひが片附いて、天下の大勢が定まると、忽ち勤王の旗を揭げて、薩長の下に就いて來たのだ。其點からいへば、實に狡猾なやりかたであつて、甚だ感服は出來ぬが、僅に江藤一人が、中央に出て、働いて居たので、幾分の申譯は、つくであらう。兎に角、江藤は、立派な人物であつた。見る影もない、輕輩から出て、遂に參議兼司法卿とまでなつて、一時の盛名は、隆々として、旭日の如きものがあつた。けれども、薩長二藩の政治家と、意見が合はないで、始終、衝突した結果、征韓論が破れて、佐賀へ歸つてから、同志に押上げられて、無謀な旗揚に與し、到頭、無慘な最期を、遂げる事になつた。

▲江藤の前に、前島密と、神田孝平が、江戶遷都の說を、唱へて居るが、これは物にならなかつた。併し、順序からいへば、江藤の前に、斯うした人物が、唱へて居た、といふ事も、知つて置く必要がある。猶、遷都の事は、後回に、詳しく述へる。

耶蘇退治の紛紜

一

木戶は、陛下の御供をして、大阪へ來て居たのであるが、此際に起つたのが、有名な耶蘇教退治の事件である。抑も、我國に於て、外國の宗教を、取締る事に、嚴重を極めたのは、昔からであるが、耶蘇教に對しては、殊に峻酷であつた。之が爲には、いくたびか、騷動を、くり返して居る。

今では、信教の自由が行はれて、何等の束縛も、受けるやうな事はないが、昔は、隨分、酷かつたものだ。

天正年間に、織田信長が、南蠻寺を建て、宣教師のバテレンに、布教を許した事はあつたが、後になつてから、豐臣秀吉が、南蠻寺を燒拂ひ、宣教師を、逐拂つて了つたのみならず、其信者は、嚴罰に處せられたので、一時、耶蘇教は、屛息して了つたやうに見えたが、決して左樣でなかつた。人が、宗教を信ずる、といふ力ほど、強いものはない。譬へば、水が土に泌み込むのと同じやうに、人の心に、入つて來る。其力は、實に強いものであるから、表面に於てこそ、耶蘇教を信ずるものは、殆んどないやうになつて居たが、其實は存外に、勢力を有つて居て、小西、細川大友を始め、諸侯の中にも、却々、之を信ずる者が、あつた位だ。

然れば、德川の治世になつても、嚴重に耶蘇教を、禁ずる事は禁じたが、長崎の浦上村と、いふ所に限つて、之を許した、といふやうな、苦しい取締であつた。それが何時か、限られた土地から、段々、出て來て、維新の當時には、

耶蘇教の勢力は、日を逐ふて、加はつて來たのである。

澤主水正が、九州鎭撫總督になつて、其下には、井上聞多、楠本正隆、などいふ、連中が從いて、九州へ、下つて來た。長崎に、總督府が置かれて、大隈八太郎も、此時に採用されて、役人になつたのだ。

攘夷論に、熱狂して居た連中が、時勢の變遷につれて、政府の大官に、なつた譯であるから、未だ頭腦の底には、西洋嫌ひといふ、一種の排外思想があつて、耶蘇教に對しては、餘り好意を以て居なかつた。浦上村に限つて、耶蘇教は、許されて居る事は、固より承知であつたが、長崎へ、來て見れば、存外に、耶蘇教が、弘まつて居て、その範圍も廣く、信者の數も、頗る多いのに、驚いた。之では、何うもならぬ、といふ考へから、朝廷へ、耶蘇教取締に就いて、伺書を出すと、

『耶蘇宗門の儀は、是迄通り、堅く御禁制の事』

といふ、御沙汰が下つたから、その趣意に基いて、更に取締を、嚴重にする事になつた。所が、玆に一つ、面白い話があつた。此布告が出る時、小河彌右衞門といふ人が、耶蘇宗門の四字を改めて、耶蘇邪宗門と書いた事が、端なくも問題になつて、英吉利公使のパークスから懸合込まれて、到頭、邪の一字を削つて、更に布告を改めた、といふやうな、珍談もあつた。

耶蘇教を弘めるのは、異人が、日本を、奪ひ取る爲の手段であつて、頗る怖るべきものである、といふのが、其頃の人の考へであつたから、耶蘇信者に對しては、國賊の如く思つて、排斥して居たのである。愈々、嚴重に取締る、となれば、前後の考へもなく、酷い目に遭はせた、といふのも、無理のない事であつた。

二

日本の國教の如く、なつて居る佛教にしても、種々の宗派があつて、互に睨み合つて居る許りでなく、それが爲に

は、隨分、激しい喧嘩もする位で、迷信的に、凝固まつて居る人などは、殆んど理非の考へもなく、自分が、信じて居る、以外の宗旨は、一切、邪宗と見て居る位であるから、況して、西洋の宗旨に對しては、憎惡の念を以て、取締を嚴重にする、といふのも、今から思へば、馬鹿らしい事だが、其時代としては、無理のない事である。

澤主水正に、從いて居る役人が、いづれも攘夷派として、永く騷いで來た、連中であるから、朝廷の御趣意に基いて、耶蘇教の取締を爲する、となつたら思ひ切つた事を爲るのは、當然である。

澤總督に、從いて來た、楠本は、晩年には、マヌ男といふ、綽名をつけられて、毎も要領を得ない事をいふて、薄ぼんやりして居た人であるが、若い時分には、相當に活躍して、多少の手腕を、示して居る。大隈は、八太郎といふて居て、今でいへば、裁判所の判事といふやうな格で、總督の下に、新役として、採用されたのである。詰り、耶蘇教の處分を爲ると、なれば、專ら大隈が、取仕切つて、捌きをつける事に、なつて居たのだ。

御布告の趣意に、依つて見れば、『耶蘇宗門は、御禁制の事』とあるのだから、無論、之を弘める事は、出來ない譯だ。いふまでもなく、日本人として、信仰する事も、差止めに相成つて居るのだから．改めて浦上方面の、村民を呼出して、其旨を、言ひ渡す事となつた。

大隈は、耶蘇信徒を、役所へ引出して、高い所から、朝廷の御趣意が、斯ういふ次第であるから、耶蘇宗門を、信ずる事はならぬぞ、といふ事を、言渡したのだが、宗旨に、凝固まつて居る人は、却々、意志の強いもので、殊に、御禁制となつて居る宗門を信ずる、といふまでには、容易ならぬ決心で、然うなつたのだから、役所へ引出されて、其理由も示さず、單に耶蘇宗門を、信ずる事はならぬぞと、言渡した所で、ハイ左樣でございますか、といふて、お受けをするやうなものはなく、理窟の一つ位ゐは捏ねる、といふやうな譯で、大隈も、殆んど之には持餘した。

乃で、大隈が、澤總督に、今後の取締に就て相談すると、井上や、楠本も、口を出して、

『其樣な事は、何も躊躇するには及ばぬ、片ツ端から、ピシ〳〵打縛つて、牢へ打込んで、窮命させたらば宜からう。

それでも、肯かぬ者があつたら、國の禁制を犯して、異國の宗門を信ずる、といふやうな、國賊に等しい奴だから、首を馘つて了つたら、外の奴は畏縮して、自然と、信者は失くなるだらう。又、異人に對しても、其旨を傳へて、それに服從せぬものは、片ッ端から引捕へて、公使に、引渡して了へば、何でもない事である。苟も、朝廷の御沙汰に依つて、一度、手を下す以上は、宗門の奴等に負けて、其儘に、禁ずる事も出來ぬ、とあつては、大政府の御威光にも、關はるのであるから、嚴重に處分する事として、手段を選ばず、やツつけてしまへ』と、恐ろしい見幕であつた。大隈も、終に其氣になり、耶蘇信者を、片端から引ッ捕へて、牢へ打込む、といふ事になつた。

十數年前まで、浦上に、片岡市藏といふ、役者に似た名の老人が、生き殘つて居た。當時、牢へ打込まれた時の事を、人に語つては、其時分の役人が、無智にして亂暴な事を、嘲つて居たが、全く片岡のいふ通りで、今から考へれば、愚の至りだが、其時代には、猶且、攘夷論が、正しい議論として、一般に信じられたやうに、耶蘇教に對しても、亦、お國の爲めにならぬ、といふやうな、考を有つものが多く、大隈の如き人物でさへ、それになつたのだから、その他の役人が、頑冥であつたのは怪むに足らぬ。

宗旨を、信ずる人の力は、實に強いものであるから、押へられた男は、いふまでもなく、女の強かつた事も、一通りでなかつた。大隈や、其他の役人から、宗門を變へろ、といふ事を說諭されても、却々、恐れ入らず、基督の有難い事を說いて、反對に、役人へ、耶蘇宗門へ入れ、といふて、勸告する位であつた。果は、牢の中で、讃美歌を唄ふて、其信仰は、實に強いものであつた。

斯ういふ有樣であるから、一旦、手はつけて見たが、殆んど弱つてしまつた。二日間に、縛り揚げた、信者が、五百人以上もあつて、狹い牢の中に、押し合ひへシ合ひして居る。それを片ッ端から、引出して來ては、拷問同樣な、苛責を加へて、苦しめたのみならず、食事も與へないで置く、といふやうな、酷い取扱ひをしたので、僅か十日ばかりの間に四五十人の者が、病氣に罹つたり、或は飢たりして、牢死してしまつた。然うした慘狀を、眼の當り、見て居ながら、信仰を變へる、といふたのは、只の一人もなかつた。却て、斯ういふ役人の手に、罹つて死ねば、一刻も早く、婆婆の苦患を脫れて、天國へ行かれるのである。といふので、盛んにアーメンを、やらかすから、之には、係の役人も、殆んど閉口して了つた。

牢に入れられるものは、日に倍す殖えるが、出て行く者は、一人もない。適々あれば、死んだ者が、擔ぎ出される位で、此儘にして置いては、どうにも、處分がつかない、といふので、事情を具して、太政官の方へ、其處分方に就て、伺ひを出した。

太政官は、その時の內閣であるから、此伺ひに對して、俄に會議を開いたが、何ういふ刑罰に行ふか、といふに就て、投票で決める、といふ事になつた。各自、其意見を認めて投票したのを、開いて見れば、悉く死罪と書いてあつた、といふやうな、面白い事もあつた。後年になつて、當時・關係した人等が、いろ〳〵言譯をして、此事實を、多くは抹殺しやう、としと事もあるが、全く斯ういふ事情であつたのだから、當時の事は、迚も歷史の上に、明かに書く事も、出來ないほどに、非常識なものであつた。

三

恰度、其頃には、西鄕が、有栖川征討總督宮に從いて・關東へ、下つて居たのであるから、今の語でいふ、內閣には、木戶準一郎、大久保市藏、廣澤兵介、小松帶刀、後藤象二郎、大木民平、横井平四郎・岩下佐治右衞門等の人々が居て、公卿の方からは、三條實美、岩倉具視、中御門經之などが、加はつて居た。一人づつ、放して見れば、何れも、一見識を有つた、立派な人ばかりであるが、政治といふやうな、一つの纏まつた仕事を爲るといふ事になれば、意見が區々になつて、容易に統一されて居らず、矛盾撞着は、常例の如くなつて居た。

併し、其内に於ては、木戸と大久保が、慥に優つて居たが、一同の頭を押へて、自分の思ふやうに使ひこなすと、いふほどに、未だ貫目は、付いて居なかつたから、どうしても、各自が、勝手な熱を吹いて、纏まりがつかなくなるのは、無理のない事であつた。

木戸の事は、改めて信ふまでもないが、大久保の事に就ては、少しく述べて置きたい、と思ふ。

三傑の中に於て、最も政治家らしい人であつた、といふて、大久保の事は、今でも推賞する人が、多く居る。維新當時の大久保は、どんな風の人であつたか、といふ事は、此際、考へて見る必要がある。多くの事は言はずとも、大阪還都の意見書に、就て見ても、一時の風雲に際會して、僥倖に、朝廷の要職に就いた、普通の陪臣とばかりはいへぬ。殊に、朝臣となつてから、初めて陛下に、拜謁した場合にも、面白い逸話がある。

薩藩の代表者として、重く見られて居たにもせよ、高が、陪臣から、成上つたに過ぎないのであるから、公卿の方からは、然までに、重くは見て居なかつた。御所に入れば、舊慣古例に依つて、御前勤めをして居る公卿が、思ふ通りに、切つて廻すのであるから、成上りの陪臣などには、何事につけても、自分の思ふ通りには、ならなかつたのである。殊更に、陛下に拜謁する場合、其足分に依つて、取扱の違ふは、勿論である。大久保は、庭前へ案内されて、廊下に、上る事は、許されなかつた。案内者が、指揮する通りになつて、居なければならぬ。

『それに、お控へなさい』

と、言はれた。その通りに、すれば砂の上に、坐る外はないのだが、大久保は、澄して立つて居た。

『それに、お控へなさい』

と、再度いはれて、大久保は、

『何れに、控へるのですか』

と、反問した。

『それに、お控へなされば、宜しいのです』

『仰せではござるが、之に控へる事は、出來ませぬ』

『何故でござるか』

『薩摩の武士は、罪を得た時の他、砂や石の上には、坐らぬ事に、なつて居ります。罪人同樣の取扱では、御免蒙る外はありませぬ』

流石に、大久保は、一見識あつた。此答へを聞いて、案内者は、ぐツと息詰つたが、何ともする事は、出來なかつた。それから騷ぎになつて、漸々、評議の末、藁で造つた、圓座を敷かせて、大久保を、坐らせる事にしたので、初めて大久保は、席に着いた、といふ事がある。

全體、大久保は、寡默謹嚴の人であつたから、此人と、對座になる者は、非常に窮屈を感じて、思ふやうに話も出來ぬ、といふ風があつて、併し、最初から、其樣な風の人ではなかつたらしい。嘉永安政の頃、まだ年齒の壯い時分に、藤田東湖の爲人を慕ふて、態々、水戸へ出駈けて、東湖を、訪ねた事がある。其時分に、大久保は、東湖に向つて、

『不肖の行爲に付いて、惡い事がありましたならば、御遠慮なく、お叱りを願ひたい』

と、聞いた。東湖は笑ひながら、

『それほどのお頼みなら、注意するが、、、わしに言はれたら、改める意か』

『そりや、無論の事でございます』

『然らば、いふて見やう』

『ハイ』

『汝は、全體、多辯で不可ぬから、少し愼んだら、可からう。武士といふものは、一度、口に出した事は、必ず實行

するの覺悟がなければ、不可ぬ。從つて、餘り多辯なるは、宜しくない」
大久保は、顏を赧くして、深く耻た、といふ體であつたが、それから後の、大久保は、極めて寡默な人になつて、容易に、口を開かなかつた、といふ事である。而て見ると、其以前には、隨分、多辯な方であつたに、違ひない。然るに、維新の風雲に乘じて、天下の舞臺へ、乘出して來た時の、大久保は、全く藤田が、戒めた通りに、寡默謹嚴な人に、なつてしまつたのである。

四

木戸も偉かつたが、併し、大久保の方が、何となく人物の大きい所があつたのは、誰も認めるであらう。西鄉は別として、木戸、大久保が、薩長を代表する政治家として見れば、各自、一長一短はあつたが、先づ同等と、考へて可からう。長州人の間で言へば、木戸の外に、猶一人、偉い人物があつた。それは誰であるか、といふに、即ち廣澤兵介である。
此人は、後に參議にまで上つたが、終に暗殺されて了つた。廣澤を殺したものは、長州人の某者だとも、傳へられて居るが、下手人は、果して何者であるか、未だ判らない。
廣澤は、議論も强かつたし、見識もあつた。又、同じ長州人でも、木戸とは、行方が違ふて居た。井上や伊藤と、同じ頃からの人であるが、一際勝れて、偉い所があつたので、却々、木戸や、その一派の言ふ事は、用ひないかつた。思つた事は、づば〳〵やつてのける、といふ性質であつた爲に、それが災となつて、非業の最期を遂げたのであらう、といふ人もある。
尙ほ當時の內閣を、形作つて居た人々に就て、少しく述べて置かう。大久保の謹嚴寡默に引替へて、小松は、極めて磊落な、且、何事にも、面白く語る人で、存外、人に接して、城府を設けなかつた。といふ事だ。それが爲に、一

人の釣合が、巧くとれなかつた。とも、聞いて居る。後藤は、土州藩を代表して、出て居た。豪放な大才は、有ちながらも、思ふやうに、働きの出來なかつたのは、土州藩出身と、いふ爲であつた。佐賀藩から、副島の外に、大木が出て來たのが、頗る面白い。佐賀藩に於ては、極めて身分が輕く、大小を帶して居るといふのは、名ばかりで、江藤と同じやうに、家格も低ければ、食祿も薄かつた、けれども、身分の割合に、內福な所もあつて、江藤が、夙くから京都へ出て、働くのに就て、齋何の役は、大木が、勤めて居た、といふ事である。平生は、何となく陰氣な、物事を控へ目にする人であつたが、一度決心して、イザ是れからやる。となれば、隨分、思ひ切つて、押し通す所に、大木の長所はあつた。
或年の正月、藩の若武士が集まつて、宴會を開いた。其席に、大木も、出て居たが、平生から、身分が輕いのと何となく因循な所がある、といふので、自然、多くの人から疎まれて、斯る席に來ても、一向、對手になる者がなかつた。大木は、自ら求めて、大勢と、一つになる事を望まず、自分丈けは、離れた所に、只一人で、膳を控へて、手酌で呑むといふやうな、風であつた。漸次、酒が廻つて、席が賑やかに、なつて來ると、其內の一人が、下へ降りて行つて、そツと、裏階子から、上つて來て、大木の背後へ廻つた。そんな事は、少しも知らずに、大木が、今、箸を執つて、膳の上の肴につけやう、とした途端に、身を寄せた、例の若侍が、左の手で、突然、大木の髻を摑んで、ぐツと引いたので、不意を打たれて、大木が、上を向いた所を、右の手の掌に、一ぱい着けて來た唊を、大木の口へ、擦込んだ。此有様を見ると、一同が、ヤンヤと、手を拍つて、噺し立てた。大木は、苦い顏をして、ペツ、ペツと、唾を吐きながら、手拭を出して、口の周圍を、拭いて居る。けれども、然まで怒つた、態度もなく、膳の肴を、食ひ初めた。
暫くすると、大木は、ずツと立上つて、下へ降りて行つた。一同は、歸つたものとのみ思つて居たら、稍暫く經つて、元の席へ、歸つて來た。多くの人は氣が注かず。最前、唊を甞めさせた、若侍は大醉して、盛んに氣焰を、吐

いて居る。その背後へ、そつと廻つたか、と思ふと、力任せに、横つ面を撲付けたので、不意を打たれて、アツと叫びながら、倒れた。其上へ、乗掛つた、大木は、右の足を上げて、其面を踏躙つた。足の裏には、犬の糞が、コテコテ塗りつけてあつた。踏まれた奴は、堪つたものではない。サア之から、大騒ぎになつて、何でも、大木を斬つて了ふ、といつて、暴れ廻るのを、大勢が、寄つて集つて、漸く宥めて、若侍を、歸して了つた。大木は、座敷の隅に立つた儘、ニヤ〳〵笑つた。一同が騒ぐのを、見て居た。懇意なものが、遣つて來て、

『えらい事を、やつたな』

『ウム、啖の代りに、犬の糞ぢや。手の代りに足ぢやから、此勝負は、拙者の勝利ぢや、ハツハ、、、、』

落付拂つて、斯ういはれたので、

『併し、彼が引拔いて、若し斬りかけたら、どうする意であつたか』

『莫迦な事をいふな、之丈けの人が居て、俺を斬らせるものではない。又、愈よとなつたら、逃げれば濟むのぢやからな、フフン』

と、鼻の先で笑つて、歸つて行つた。之までは、大木に對して、非常に輕侮の念を、有つて見て居たものも、彼奴は猫を被つて居るのだから油斷がならぬぞ、といつて、それからは侮り輕んずる者が、なくなつた、といふ事である。鳥渡した逸話であるが、大木の性格の一班が、現はれて居て、頗る面白い、と思ふ。

五

此連中に較べれば、横井平四郎は、遙かに先輩であつた。肥後熊本の藩士で、非常に學問の深かつた上に、經綸の策もあつて、夙くから、諸侯の間に知られ、曾ては、越前の松平春嶽に招聘されて、藩政改革の顧問を、引受けた事がある。號を小楠といふて、水戸の藤田東湖、松代の佐久間象山と、並び稱せられ、當時の三儒傑といはれた位で

あるが、世間並の、學者と異つて、天下の事情にも通じて居り、政治向の事などにも、新しい考へを、有つて居た人だ。少くも一般の人よりは、十年位先を、見透して居た爲に、其議論は、動ともすれば、急進突飛なるが如く思はれて、頑固黨には、甚く睨まれたものだ。

斯ういふ、人達が集まつて、當時の内閣は、組織されて居たのである。各自、特色を有つて居る、優れた人物ばかりであつた。

互ひに意見を、鬪はす事になれば、どうしても、議論に陷る傾きがあつた。それを見事に、統一して行く、といふ程に、大きな人物がなかつたので、小さい問題でも、議論に時を移して、容易に、決しなかつた事がある。然うかと思ふと、非常に大きな問題でも、只一言で決して、直に、それが政治の方針となつて、世に現はれて來る、といふやうな事もあつた。位置の上からいへば、木戸が、統一を計る事になつて、居たのだが、浪人として、又は、一藩の智慧者として、働いた居たのとは、全く勝手が異つて、苟も、朝廷の家臣となつて、六十餘州の政治を見る、といふ事になれば、すべての趣きが、異つて來るから、却々、木戸の考へ通には、ならなかつた。殊に、各局に亘つて、配置されて居る、人物が、前にいふやうな、やかましい者ばかりだから、其統一にも、骨が折れた。

耶蘇教に對する、取締の如きも、即ち其一つであつた。朝廷の思召が、耶蘇教を以て、邪宗門と見做して、永い間の習慣通り、之を嚴重に監視せよ、といふ、御沙汰に對して、別に意見がある、といふでもなく、又實をいへば、自分等も、耶蘇を、邪宗門として、心得て居たのであるから、其御沙汰を、不思議とも思はなかつた。邪宗門を信ずる者は、國賊である、といふ見地からいへば、どんな嚴罰に處しても、敢て苦しくない、といふ考へを有つて、居たのだ。牢へ打込んで、虐待する位の事は、河童の屁ほどにも、感じて居なかつた。けれども、愈々、裁判の上に於て、何とか處決をしなければならぬ、といふ事になれば、却々、難かしい事に、なつて來て、容易に、決する事が出來なかつた。

朝廷に於ても。攘夷論を捨て、開國主義を、執つた以上、外國公使の意嚮も、考へなければならぬのであるから、然う、一も二もなく慘刑に處する、といふ事も、能ないのであつた。問題が、其處まで、行詰まつて來る、と初めて氣が注いて、抑ゝ、耶蘇教を、斯ういふ風に、嚴重に取締るのが、良いか惡いか、といふ事も、考へなければならぬ事に、なつて來たのだ。

御禁制の邪宗門を、信じた爲に、牢へ入れた者を、何と處分するか、といふ事に就て、投票して、刑罰を決めるなどは、却々、今時の人には見る事の出來ぬ、面白い方法であつた。併し、そんな事で、人の首が飛ぶやうでは、天下は、治まつて行く譯もなく、殺さうか助けるかを、投票で決めるなどは、人間の生命も、此頃流行る無盡と、同じやうなもので、其人の幸不幸で、當り外れがあるなどは、寧ろ喜劇に近く、司法事務の一つとして、そんな事が行はれて堪るものではない。流石の木戶も、之に就ては、非常に躊躇した。折柄、外國公使の方へも、之が聞えて、漸次、嚴ましい懸合に、なつて來た。

處へ、九州から音信があつて、邪宗門の信者は、日に益々、殖えて來て、何程、牢へ入れても、其種は盡きず、今は滿員になつて、牢の增建をする外なく、又、信者の邪宗門に對する、信仰の熱も、昂まるばかりである、といふ報告があつたから。於是、木戶も、愈々、何とかして、此問題の處置を、つけなければならぬ事になつた。主任の大隈に對して、至急、京都へ、出て來い、といふ事を命じたが、何と考へてか、大隈は、更に出て來ないで、勝手な報告ばかりして來る、といふやうな有樣で、日一日と、事件は、永引くばかりであつた。

六

外國の宣教師と、日本の僧侶とを、比較すれば、熱心努力の點に於て、到底、比べものにはならない。又、信徒が其信仰して居る、宗旨に對して、金を出す點に於ては、日本人の、金の出し振と、西洋人の、金の出し振とは、全然異つて居る。日本の信徒は、布教の必要に應じて、金を出す、といふやうな事は、甚だ喜ばないが、坊主の遊蕩費や本堂建立の金は、惜氣もなく出すから、坊主の方でも、一身の榮耀榮華に、信徒の巾着錢を、絞る事ばかり、考へて居る。本願寺が、やれ借金の處分だとか、或は財政整理に、要する金だ、とかいふて、集めた莫大なものを、若し擧げて、布教費に使つたならば、どれほど、宗門の利益に、なつて居るか、判らないのだが、併し、彼等は、然ういふ事は、決して仕ないのみならず、信徒の方でも、布教上に、必要だから出せ、といつても、那れだけの大金は、決して出さぬに、違ひない。要之、日本の信徒は、坊さん其者にこそ、一種の迷信から起きた信用は、繫いで居るが、宗旨其物に向つては、甚だ冷淡な傾きがある。著者は、アーメンの仲間ではないが、然ういふ點から、見て行くと、耶蘇教信者の、金の出し振は、頗る宜い、と思つて居る、其集めた淨財を、布教の費用に、惜氣もなく蒔散らす、那の遣方が、甚だ感服に堪へない。日本の坊主は、墮落を極めて居る、賣僧のみとはいはぬが、耶蘇坊主が、何事につけても、熱心に、根氣好く、人道とか、博愛とか、いふやうな、趣意に基づいて、働いて行く活動振りには、迚て及ばない。今の中に、何とかして、坊主の魂を、入れ替へなかつたら、漸次、お布施を貰ふ、繩張が、狹くなつて行くだらう、と、餘計な事だが、心配に堪へぬ。

長崎の浦上に、耶蘇禁制の、御沙汰が下つて、信徒が、片端から牢へ、打込まれて居るといふ、事を聞くと、耶蘇坊主は、非常な苦心を以て、信徒を、救濟に掛つた。併し、日本人にして、之を信仰して居る者のみに、嚴しくいふのではなく、布教の爲に、來て居る、耶蘇坊主に對する、取締も嚴重であるから、碧眼玉の坊主が、浦上へ、ノソ〳〵入つて行く事は、勿論、出來なかつたのだ。それでも、信徒の爲に盡したい、といふ一心から、丁髷の鬘を被つて日本の服裝をつけた宣教師が、屢々、浦上に出入して、信徒にして、既に入牢して居る者の、家族を慰め、まだ縛に就かぬ、信徒に對しては、頻に慰籍して居た。今から調べて見ても、實に感心すべき事柄が、多く在つた。

却說、政府の方では、信徒を抑へて、牢へ打込んだが、信徒は、其迫害に怖れずして、酷い目に、遭へば遭ふほど

信仰の念が、強くなつて來て、却々、牢へ打込んだ位では、改宗しそうもないから、今は却て、政府が、其處分に困るやうな事に、なつて來た。殊に、之が日本丈けで、濟む事なれば格別、漸次、其問題が、嚴ましくなつて來て、各國公使の間にも、宣教師の方から、訴へて來たので、我政府に對して、嚴ましい懸合が初まつた。然うなつて見ると捕へた者の處分を、一日も早くして了はないと、仕樣がないし、又、耶蘇教に對する、取扱ひ方についても、大體の方針を、定めなければならぬ、といふ事になつたので、兎に角、其事件の主任である、大隈を招いて、更に事情を、聞き取らう、といふ事になつたが、大隈は、政府の命に應じて、出て來ない。大隈の方にして見れば、此場合に、迂濶、出て來る事は、出來ないのであつた。といふものは、澤鎭撫總督の命に依つて、爲した事には違ひないが、今になつて考へれば、聊かやりすぎの氣味もあつて、持て餘しの體であつたのだから、呼出されたから、といふて、直に出て來る筈はないのだ。然うなつて見ると、政府の威嚴も、甚だ輕くなるやうな譯で、出て來ないから、といふて、捨て置く事もならず。又各國公使からは、嚴しい懸合が、起つて居るのだから、其處分をするに就ても、大隈を、呼び上げなければならぬ、必要がある。段々、相談の末、遂に大隈を、政府に呼び上げる、といふ事に内定して、參與の職に引上げて、外交主任といふ事にしたならば、此事件に就て、最初からの責任を、有つて居る、大隈ではあるし、旁、各國公使との懸合上にも、都合が好からう、といふ事になつて、其旨を、早飛脚を以て、達する事になつた。

伏見鳥羽の戰ひ以前には、薩長土肥の稱はなかつたのである。薩長聯合が成つて、土州藩が、後れ走せに、之に加はり、伏見鳥羽の戰ひが濟んでから、薩見土三藩の聯合は、成立したのであるが、鍋島は極めて曖昧な、態度を執つて居て、何方かといへば、佐幕の臭氣が、多くあつたのだ。其戰爭が濟んで、天下の大勢が決まる、と、何日か、鍋島が、入つて來て、玆に初めて、薩長土肥の稱が、起きたのである。然れば、佐賀藩に比べれば、藝州藩の方が、一足先に、聯合の仲間入をして居たのであるから、最初は、薩長土藝と、稱して居て、それから藝州藩に、人材が、乏

しかつた爲に、何日消えるともなく、藝州藩は、聯合の仲間から消えて、佐賀藩が、之に、入つて、薩長土肥と、いふ事になつた。

大隈は、晩年になつてから、種々、熱を吹いて、一人で、維新の鴻業を、爲したやうにいつて居たが、却々、そんな譯のものではなかつた。大隈が、參與の職に就いたのは、斯うした事情からであつて、決して維新の鴻業に依て得た、參與の職ではなかつたのである。

七

大隈の先祖は、菅原道眞だ、とかいふて、それを、唯一の誇りにして居るが、其穿鑿は、必要がない。兎に角、天神樣の子孫であると、いふ事が、本當だとすれば、文字の書けないのが、甚だ不思議の事に思はれる。天神樣を、信心してさへ、字が巧くなる、といふのに、其子孫である、大隈が、字の書けないなどは、隨分、不思議な譯だ。之は矢張り、御先祖が、餘り字が巧手であつたから、子孫は、却て拙いのかも、知れない。三河から、德川家康が、出た爲に、餘は萬歲ばかりだ、といふ諺の通りかも知れない。

大隈は、子供の時分から、字を書くのが嫌ひで、或時、母親から申付かつて、親類の人を、集める事があつた。本來なれば、手紙で、其旨を知らせるのであるが、尻ツ端折りて、親類中を、觸れて歩いた。一巡りして、歸つて來ると、俄に延期する事になつて、更に復た、知らせなければならぬのであるが、手紙の書けぬ、大隈は、汗を流しながら、駆け歩いて、俄に其寄合が延された事を、知らせて歩いたが、最早、其事には、時間が迫つて居て、全部は、巡り切れなかつた、先に知らせを受けたものは、旣に數人、集まつて來た爲に、母親から、ひどく叱られた、といふやうな珍談もある。

藩主が、首鼠兩端を持して、勤王佐幕、何れともつかず、極めて曖昧な、行動を執つて居た、時代にも、藩の輕輩

中には、却々、勤王の義を持して、天下の志士と、往來して居た者は、少くなかつた。大隈の如きも、卽ち其一人で、早くから國を出て、長崎邊りを、ブラ付いて居た事もあつた。其時分に、大隈は、非常にお洒落で髪の結振りや、衣服などにも、甚く注意して、碌に小使錢も、持つて居らぬ、浪人としては、稀らしいほどに、派手な扮裝をして、長崎の市中を、肩で風を切つて、歩いて居た。敢て美男といふほどではないが、何所となく、きりゝとした、立派な容貌であつたし、未だ年齢も若く、元氣も旺盛であつたから、大隈が、市中を歩くと、人が足を停めて、振返つて見る位に、立派な風采であつた、といふ事だ。

『那れは、何方の御家臣でせうか』

『左樣さね。普通の御浪人とは異つて、何でも餘程、御大身の若旦那でせう』

などゝいふて居る。多くの中には、大隈を、知つて居る者もあつて、

『那のお方を、汝さん達は知らないのか、那れが鍋島樣の御家來で、大隈八太郎樣と、仰しやるお方です』

『へゝー、鍋島樣の御家來ですか。こりや、評判の鍋島樣だから、良い御家來を、もつて在つしやる。那の樣子では、猫退治位ゐは、朝飯前でせうな』

と、いつたやうな風評は、到る處に、されたものだ。見得坊の大隈は、時としては、其風評を、耳にする事もあつて、衷心、甚だ得意氣に、大道狹しと、押歩いたものであつた。

其頃の浪人や有志は、天下國家の事を、口にして居るが、盛んに遊里へ、出入して居たものだ。長崎に、集まつて居る、連中は、圓山へ出入して、頻に遊女買を、やつて居た。大隈も、御多分には洩れず、遊びの方にかけては、人一倍、道樂を仕盡したものであつた。參議となつてからは、八太郎時代のやうに、女の事に就て、惡い風評は起らなかつたが、昔の浪人時代には、盛んに遊女買をやつた、といふ事である。親の家を相續して、眞面目に、藩に勤めて居ても、どうかすれば、生活に差支へる程の、小身者が、遠く國を離れて、他鄕に浪人となつて、放蕩の限りを盡す

のだから、其金に苦しまぬ筈はない。然れば、遊びの金に、行詰つた結局は、何日も、斬取强盜、武士の習慣と、いふやうな事もやつて、運の好い者は、巧みに切拔けて、出世の梯子を駈上つて、明治の世に、時めいて居る者もあつたが、運の惡い奴は、その梯子を踏外して、つまらない終りを遂げたものは、少なからず在つた。

八

如何に物堅い、といはれても、月に三度や四度は、丸山通ひはする、少し烈しいものになれば、月の半は、遊女屋の二階で暮す、といふやうな有樣であつた。其内に於ても、大隈は、殆んど遊女屋に、夜を明す事が、多かつた位で、而も、其遊び振りは、如何にも、豪奢を極めて、時折は、普通の浪人や、有志に、出來ない遊び方をして、人の眼を、驚かした事もある。それが漸々、評判になつて、同志の間にも、問題になつたのは、

『如何に、大隈が、金の融通に、巧手な男である、としても、然う永く續くものではない。諺にも能くある、廓の金には、盡るが慣ひ、といふ通り、果は、飛んでもない事を、仕出來して、可惜、那れ丈けの才物が、惡い名を殘して、一生を過るやうな事が、出來はすまいか。苟も友人である以上、何とか意見をして、何程か愼むやうに、させなければならぬ』

といふやうな話が、チョイ〳〵出て來るが、併し、誰が意見の役に當るか、といふ事になると、誰一人として、其役に當るべき、資格はない。といふものは、大隈も遊ぶが、自分達も遊ぶので、只だ多く遊ぶか、少し遊ぶかの違ひである。

『俺の遊ぶのは、少いから宜いが、貴樣は、多く遊ぶから惡い』

といふ事は、人に意見をする、理窟にはならぬ。而て見ると、大隈を戒しめる役に當るものは、殆んど無い譯だ。恰度、其時分に、長崎へ來て居たものに、副嶋二郎といふ、同藩士があつた。後の種臣だが、實に堅い人として、

評判された位だから、遊女買などは、夢にもした事はなく、元來が、漢學仕込みで、何所となく、儒者の風があつた。同志の間でも、重きを成して、殊に、大隈に對しては、家格もよし、年齢も上であつたから、大隈の方でも、副嶋を、兄のやうにして、交はつて居た。同志の相談が、段々、進んで來る、と、副嶋が可からうといふ、事になつて、或日、四五人の有志が、副嶋を招んで、此事を相談した。

『そんな、莫迦な事はあるまい』

『イヤ、全くさうなのだから、足下から、意見をして貰ひたい、と思ふ』

『フーム、大隈の奴が、遊女買を仕居るといふのか』

『さうぢや』

『そりや、怪しからぬ事ぢや。よし、其内に面會したら、拙者から、充分に戒めて置く。それにしても、何故、足下方は、意見をしなかつたのか』

斯う正面から、一本打込まれては、何とも答へが出來ないで、ヘドモドして居る。之を見て、副嶋が、

『足下方も、やつて居るんぢやな』

『イヤ、どうも、恐縮した』

『大隈は、拙者から、確と意見はするが、足下方も、止めなければ不可ぞ』

飛んだ所で、序に意見されて、一同は恐縮して、引退つた。

副嶋は、極めて眞面目な、箱の中に、物を詰めたやうに、何事も、キチンと、きまりがつかなければ、承知しない人であるから、大隈のやうに、疎放な所は、少しもなかつた。其性格からいへば、全然、正反對の人であつた。殊に、聖賢の道を傳へる事を以て、一生の仕事と、決めて居た位に、氣品の高い人であつた。若い時分から、品行は、極めて良かつた。其代り、世間の俗事には、通じて居ないから、大隈のやうな、ぱツと、冴えた仕事は、出來なかつたの

で、那れ丈け、偉い位置に昇つて死んだが、更に俗受けのするやうな事は、一度も爲ずに、終つた位だ。然うした氣風の副嶋と、俗受け專門の大隈とは、全然、相許さぬのが當然である、にも不拘、其時代には、極めて交情が好かつたのだから、面白い。

『オイ、大隈』

『ヤア、何かね』

『斯ういふ事は、近親の間柄でも、容易に、口外すべき事ではないが、併し、耳に入つた以上、言はずに居る、といふのも、友誼に悖る次第であるから、一應は訊ねるが、包み隱しをせずに、答へて貰ひたい』

『ウム、どういふ事か』

『外でもないが、貴様は、丸山の遊里へ、足を入れる、といふ事ぢやが、然ういふ事は、萬々あるまい、と思ふが、併し、人が頻りに其噂を、爲る所を見ると、滿更、根のない事でもなからう。どうぢや、少しは覺えがあるか』

『そりや、話が異ふ』

『然うぢやらう。然うなくては、叶はぬ事ぢや。豈夫に、佐賀の大隈ともあるものが、今の身を以て、遊女通ひをする、といふやうな、不都合な事は、あるまい。併し、それにしても、何ういふ次第で、斯ういふ噂が、立つたものぢやらう』

副嶋は、何所までも眞面目で、大隈の答へに、幾分は安心した、といふやうな、顔色であるから、大隈は、腹の中で可笑しかつた。

『拙者が、丸山へ、通ふて居る、といふのは、傳聞の誤りぢやらう。最初は、然ういふ風にやつて居たのだが、何うせ、毎夜行くものであるから、此方から、通ふのも面倒であるゆゑ、樓主に談じて、此頃では、丸山に、入り込みきりで、用事の都度、那方から、出て來るやうにして居るのぢやよ』

『えツ、何ぢや。丸山の方へ、入り切りにして居る、と』
『左樣、其方が、面倒が、少くて宜いからな。ハツハ、、、』
之には、副嶋も呆れるばかりに、驚いた。
『こりや、怪しからぬ。貴樣の腸は、腐つて居るのか、全體、武士たるべきものが……』
と、膝を詰寄せ、肩をいからして、談じかけるのを、大隈は、徐に制して、
『マア、待たつしやい。それほど、嚴しく言ふ、貴樣は、全體、遊女買を仕た事が、あるのか、ないのか』
『莫迦な事を申せ。左樣な、猥らな事を爲すやうな、拙者ではない』
『ハ、ア、それが、間違つて居る』
『何で、間違つて居るか』
『一度でも、二度でも、遊女買の味を、知つて居つて、惡い事であるから止めろ、といふのなれば、意見にもなるが、自分は、更に然ういふ事をせずに、謂ば喰はず嫌ひの、貴樣が、拙者に對して、彼是跑爪らしい事を、いふた所で納まらぬぢやないか、兎に角、一晩、拙者と、行つて見ろ』
『莫迦なツ、貴樣、何をいふか』
『然う、怒るものぢやない。斯ういふ話は、笑ひながら爲すべき事で、怒りながら話すべき事ではない。欺された、と思つて、今夜は、行つて見ろ。其上で惡い、といふなら、貴樣の意見を待つまでもなく、俺も、止めて了ふが、兎に角、行つて見ろ』
之から、大隈が、辯舌を巧みにして、副嶋を、頻に鋭き立てる。大隈の放蕩を、止める爲に、意見はして居たが、まだ年齒も若く、世事にも疎い、副嶋は、大隈が、言葉巧に、說付けるのに恐れ入つて、到頭、一緒に行つて見やう、といふ事になつた。

九

遊里へ行くのは惡い、といふて、意見するものが、却て反對に、意見をされて、一晩、行つて見やう、といふ氣になつたのだから、面白い。大隈と副嶋の違ひは、其所にあるので、副嶋が、大隈に意見するのも、詰りをいへば、遊女買のために、一生を過つてはならぬ、と思つて、意見をしたのだが、大隈の方から、巧に說き付けられて見る、と、副嶋も、惡いとは思ひながら、どんなものか、味はうて見たいやうな氣もして、何日か、大隈のいふ通り、丸山へ行く氣になつた。年齡の若い時分に、堅い人といふのは、餘り的にはならぬ。大概、斯うした徑路から、却て初めから、柔かゝつた人よりも、柔らかくなるのが、落だ。大隈の方にして見ると、石部金吉鐵甲の副嶋を、蒟蒻のやうにしたら、嘸、面白からう、と考へて、無理にも、伴れて行かう、とする。副嶋が引掛つて、思つたよりは容易く、行く氣になつて、吳れたのだから、調子に乘つて、大隈が、副嶋を、丸山へ引出した。
丸山といへば、京都の嶋原に、對照られたほど、有名なものであるが、太夫の中でも、最も容色のすぐれて、手練手管のある女を選んで、大隈から、そツと、其女に吹込んだ。
『今、伴れて來た武士は、俺の藩でも、重役の若旦那で、却々、金放れのよい、立派な身分の者だが、まだ女の味を、知らないほどの堅造であるから、汝が、那れを手管にかけて、柔かい者にして吳れたら、相當の褒美をやるから、、、、シツカリ賴むぞ』
といはれて、遊女は、賴まれないでも、然うするのが、自分の商賣であるのに、客を欺した上に、褒美を吳れる、といふのは、餘り話が甘過ぎて、夢ではないか、と、思ふ位であつた。
丸山の娼樓の中でも、第一番に、評判の高い、花月樓を選んで、其晚の豪遊は、藝妓幇間に、思ふさま騷がせて、副嶋を煙にまいて了はう。とするのであるから、二階が、落るかと思ふばかりに、ドンチヤン騷ぎをやつた。大隈が

幅を利して、多くの男女を、思ふやうに動かして居るのを見て、物堅い副嶋は、實に感心したが、併し、苦々しいといふやうな顏付で、恐ろしい眼をして、ジロ〳〵と、睨んで居た。

夜も、更けて來たので、最早、宜い時分と、大隈が指圖して、副嶋を、太夫の座敷へ、移させる事にした。初めて、斯ういふ所へ、やつて來た、副島は、何が何だか、少しも判らず、只、大隈の指圖に任せて、いふ通りに、なつて居た。翌朝になつてから、副嶋が、どんな風に、柔かくなつて居るか、と、大隈は、それを想像して、可笑しくて堪らなかつた。其晩は、自分も、花月へ泊つたが、遊び馴れて居る事とて、朝旭の上るまで、寢て居るやうな、ブマな事は仕ない。東が白むと、直に花月を飛出して、附近の料理屋へ來て、副嶋が、來るのを待受けた。

どうして、金の都合をしたか知れないが、其頃、大隈が、丸山邊りで、持て方は、尋常ではなかつた。大隈が、それまでに、遊ぶ金の續いたのは、どんな金穴を、捕へて居たのか、それまでは判らない。廓の中にある、料理屋であるから、無論、朝歸りの客を、宛て込んで居るのだから、大隈が、前の晩に、知らして置いたので、待受けて居る、處へ、一人で、ブラリと、やつて來た。姿を見るより、仲居が、バラ〳〵と、駈出して來て、下へも置かぬ取扱ひに、大隈は、お世辭の中に、丸められて了つた。

『お伴さまは、跡からお入來になるので、ございますか』

『伴れは、猶少し經たなければ、來まいよ』

『其お方が、お入來になるまで、控へて置きませうか』

『イヤ、差支へない。俺の分丈け、先に出してくれ、汝等を對手に、呑んで居る中には、やつて來るだらう』

『それでは、御一緒に、おいで遊はして、貴方が、お先へお歸りになすつたので、ございますか』

『さうだ』

『何故、お伴れにならなかつたのですか』

『嬉しがつて、寢て居るものを、起して來るのも殺生だから、殊に、俺は、相變らず振られる方で、毎も岡燒きの起番は感心せぬから、そツと逃げて來たのぢや、ハツハ、、、、』

『お巧手の事ばかり仰しやつて、貴方の、お口に掛つては、どんなものでも、コロリと、參つて了ふのでございますよ、ホ、、、、、』

互に出任せのお世辭やら、しやくりやらで、時を移して居る。大隈は、最早、酒の醉が、大分廻つた、所へ、跫音荒く、入つて來る、副嶋の姿を見て、先づ聲をかけた。

『オ、、大層、早かつたのう』

『ウム』

副嶋は、苦蟲を嚙潰した、閻魔のやうな顏をして、ドシンと音をさせながら、席に着いた。其態度が、何となく可怪いので、大隈は、ニヤ〳〵笑ひ乍ら、

『昨夜の首尾は、何うぢやつた』

といはれて、副嶋は、ぐツと向直つた。

『何だ、那れは、それぞやから、拙者が、言はぬ事ではない。全體、貴樣は、那のやうな所へ、拙者を、伴れ込んで恥辱を與へる意であつたか、其考へをいへ、返答に依つては、友人とて、用捨はならぬぞ』

宛然、嚙みつくやうにして、怒鳴りつけたので、大隈も、聊か面喰つて、暫くは、答へも出ず、副嶋の顏を、見詰めて居た。

一〇

副嶋の敵娼に出した、太夫は、廓の中でも、評判の女で、容貌といひ、手管といひ、先づ此上の女はない、といふ

位に、噂されて居るのであるから、那れほどに〃頼み込んで置いたから、副嶋を振りつけて、怒らせるやうな、拙いやりかたをする筈はない。どんな堅い男でも、那の遊女の手に掛れば、キツと奈落の底に引込まれるのは、今までの例に、照して見ても明らかなのであるから、今朝になつて、副嶋が、恐ろしい顔をして、怒鳴るのが、どういふ譯か判らない。

『全體、何うした、といふのか、先づ話して見たら、宜からう』

『話せといへば、語りもするが、自分の友人を、那いふ場所へ、伴れて行つて、耻辱を與へるのが、どれほど樂しみなのか、實に怪しからぬ事ぢや』

『昨夜の遊女が、何か無禮な事でも働いた、といふのか』

『何とも、彼とも、言語道斷の至りぢや』

『そりや、不思議ぢやな。どういふ仕向けをしたのか。マア怒らずと、聞かして呉れ』

副嶋は、膝を進めて、

『斯ういふ譯ぢや』

『フム』

『昨夜、酒宴を終つて、別室へ移されると、下品な女共が、代る〲出て來居つて、聞きたくもない空世辭で、拙者は、逆上る位ぢやつた。併し、貴樣の交際で、來て居るのであるから、忍ぶ丈けは忍ばう、と思ふて、五月蠅のをジツと堪へて、默つて睨み付けて居ると、拙者の威光に怖れたものか、一人減り、二人減りして、到頭、皆な居なくなつて了つた。餘りの退屈さに、座敷の中を見廻すと。眼に注いたのが、床の間に掛けた、山水の幅物ぢや。筆者は、確と判らぬが、然るべき者の書いた、唐畫であるから、近付いて、ジツと見て居た。見れば見るほど、見事の出來で、今までに見た、唐畫の山水としては、此位のものは、多くない。今までの取扱ひが、惡かつた爲か、落

欵は、汚れて居つて、能く解らぬが、それに見惚れて居たのぢや。しばらくすると、背後の方に、跫音が聞えて、誰か、座敷へ入つて來る樣子であつたが、其儘にして居ると、軈て、拙者の背後から、倚掛るものがある。怪しからぬ事ぢや、と思ふて、振り返る途端に、何か一言申したが、能く聞き取れなかつた。が、拙者の羽織の紐に手をかけて、解かう、とするから、グツと身體を反らして、振返つて見ると、梅花の芳香、馥郁と、鼻を打つて、何ともいへぬ、不快の心持になつた。よく〱見れば、紅粉の裝ひを凝らした、賣女が一人、拙者の羽織を脱がせやうとして居るから、如何に、吳越の客を迎へて、耻とも心得て居らぬ、遊女にもせよ。餘りの無禮と心得て、何をいたすか、と、一喝を加へながら、賣女の利手を逆にとつて、前に引いた……』

大隈は、笑ひを堪へて、

『ウン〱、そりや、えらい事を、やつたな。何で、そんな馬鹿な事をいたしたのか』

『無禮極まるではないか。武士たるべき者に對して、賣女の風情で、一應の挨拶もせず、名も名乘らず、着衣に手をかけるなどとは無禮千萬な奴ちや、と思ふて、其手を、逆に前へ引きながら、拙者は立上つた。然るに、人を人臭し、とも思はざる、賣女は、猶も拙者に、組み付いて來やう、といたすから、突放して置いて、弱腰の邊りを、一つ蹴飛ばしたら、アツと叫んで、倒れた。起き上らう、とするのを、又、横ツ面を、撲付けて呉れた。其内に、泣聲を立てゝ、廊下へ飛出した。彼是七八人、彼の家の雇人であらうか、力のありそうな若者が、出て來居つて、拙者を取卷かう、といたすから、一大事と心得て、柱を小楯に、身構へをいたしたら、叶はじと諦めたか、頻りに腰を屈め、語を低くして詫るから、勘辨して遣はしたが。併し、復讐を受けてはならぬから、昨夜は、マンジリともせず、夜の明けるのを待受けて、今、之へ引揚げて來た所ぢや』

副嶋の物語りを、聞いて居た、大隈は、呆れ返つて、暫くは口も開けず、心の中には、熟々、感心した。今時の浪人や、有志の中に、此んなに、物堅い男が、幾人あらうか。惡くいへば、男の生れ損ひ、賞めていへば、聖人のやう

なものだ、と思ひながらも、
『そりや、貴樣が惡い』
『何で、拙者が惡いか』
『何で惡いか、といふて、話にならぬさ。そんな事で、天下の大事に與る事が出來るか、書物に書いてある、古人の說を、取次いで居る丈けでは、如何に、儒門の大家でも、腐れ儒者と同じぢや。天下國家の事を、口にはしても、眞に天下の俗情に、通じて居らぬものは、矢張り時勢を知らざる、迂濶の輩である。貴樣などは、立派な志を、有つて居ても、そんな事では、迚も話にならぬ。猶少し廓の學問をも、仕なければいかぬよ』
『ハ、ア、左樣いたす、と、拙者が、間違つて居るのか』
『無論の事だ』
『そりや、どういふ次第か』
『其次第を話すから、能く聞いて居れ』
之から大隈が、膝を進めて、遊女買の祕訣を、語り出した。

一一

昔の通人が作つた、落語には、物堅い大家の若旦那が、女郎買に行つて、野暮な失策を、仕た話しがある。けれども、副嶋の、野暮さ加減には、遠く及ばぬ。大隈は、根氣よく說付けやう、として、副嶋に、女郎買の呼吸を、話すのだから面白い。
『太夫が、貴樣の背後から、身體を寄せかけて、羽織を脫がせやう、とした。其所に、遊びの價値があるのぢや』
『無禮の仕打ちが、價値といふのは、どういふのか』

『太夫は、貴樣に、無禮を働いたのではない。那の廓の事にして見れば、大した事なのぢや。全體、丸山の太夫が、金づくや、腕づくで、そんな事を、爲るものではない。百萬石の諸侯が、黃金の山を積んでも、嫌だと思へば、一夜振りつけて、側へも寄らぬ、といふ丈けの見識は、有つて居る。然るに、初めて呼ばれた、貴樣の羽織を、手づから脫がせやう、としたのは、太夫が、貴樣を、大切な客である、と思ふたからぢや。貴樣が、無禮の所爲だ、といふて、太夫を打つたり、蹴つたり、しては、人に笑はれるばかりでなく、女の罰が當るぞ』
『成程、然ういふものかな』
『昨夜のやうな場合には、遊女の爲るに任せて置けば、宜いのぢや。太夫が、着せて呉れる着物に、着更へて居る中に、茶や菓子が、出て來る。それから、世間話になるのぢや。彼等は、遊女として、客に對する丈けの行儀作法や座敷の中で、慰める事柄だけは、總て心得て居るが、謂ば、籠の鳥で、浮世の事は知らぬゆゑ、樣々の事を質ねるから、貴樣が、彼等の喜びさうな事をいふて、聞かせる、其間に、遊女買の妙味が、現はれて來るのぢや。貴樣のやうに、身體へ觸れたから、無禮である、とか、羽織を脫がせやう、としたのが、失禮である、とかいふて、親の敵にでも會ふたやうに、打つたり叩いたりしたのでは、話にならぬぢやないか。如何に物堅くして、遊女買などをせぬから、といふても、餘りに馬鹿々々しいので、俺は、愛想が盡きて了つた。併し、此儘にするのは、如何にも殘念ぢやから、今宵、猶う一度行つて、他の太夫を呼んで、面白く騷がうぢやないか』
之から大隈が、諄々として、說いて聞かせる、聞いて居た、仲居や藝妓なども、面白半分に、副嶋の周圍を取卷いて、頻に遊女買の祕訣を話すので、副嶋は、體裁が惡くもなるし、又、聞けば聞くほど、底の判らぬ、面白味も感じて、其晚、行く事を、承知したのだから、可笑なものだ。
終日、飲み暮して、夜になつたから、花月へ、やつて來た。容貌は劣るが、凄い腕の太夫を招んで、昨夜の事を打明けて、、、、すッかり賴み込んだ。今夜こそは、失策る氣支はなからう。と、それを樂みに、一夜を明して、翌朝は、例

の料理屋へ引揚て、待受けて居る、と、軈て、副嶋は、歸つて來たが、昨日の朝より、猶恐ろしい顔をして、大隈を、見つめて居る。其態度が、如何にも變だ。

『どうぢや。昨夜は、どんな樣子であつたな』

『彌、貴樣は、勘辨ならぬ』

『ヘヘア、亦、失策つたかな』

『貴樣は、友人を、馬鹿扱ひにして、それが、何程、樂みなのか』

『そりや、可怪な話だが、昨夜の樣子を、物語つて聞かせろ』

『ウム、言ふな、といふても、語つて聞かせる。昨夜は、貴樣が、話した通りの、手續きを履んで……』

大隈は、腹を抱へて、笑ひ出した。

『ハツハ、、、、貴樣は、何といふ、面白い奴ぢや。手續は、可笑いぢやないか、ハツハ、、、』

『何が、可笑い。眞面目に聞け』

『眞面目に、聞いて居るが、餘りに貴樣のいふ事が妙ぢやから、可笑しくもなるさ。それから、どうしたのか』

『其處で、貴樣のいふ通り、別室へ移つて、遊女の爲すが儘に、任せて置く、と、貴樣が、言ふた通りに、茶や菓子が、出て來た。いろ／＼の話になつて、何か、稀らしい事を、聞かせて吳れろ、といふから、さては、此所だな、と思ふて、熱心に話して聞かせた』

『ウム、そりや、面白い。どんな事を、聞かせたか』

『別に、之といふて、遊女に話すべき事は、今までに讀んだ書物にも、ないのぢやから、時節柄の事とて、尊王攘夷の大義を、說いて聞かせた』

『えツ、何を、尊王攘夷の大義……遊女は、何といふたか』

『そんな事は知りんせん、と申した』

『ウム、それから……』

『俺も、熱心に話して居たが、そんな事は知りんせんの、一言には、呆れ返つて、突然、一拳を加へて、彼が立上らう、とする處を、蹴倒した』

『ハツハ、、、、又毆つたのか、何で、そんな亂暴をしたか』

『假令、遊女となつて、浮川竹に、身を沈めて居ても、普天の下、率土の濱、王土王濱ならざるはない。彼も又、我が天子の子である。尊王攘夷の大義などは、知りませんとは怪しからぬ事ではないか』

『マア、待ちなさい。最早、其先を聞かんでも、宜い。貴樣は、遊女買などを、爲る質の奴ではない。一生、那アいふ所へは、足踏を仕やうなどと決して思ふな。之は堅く、貴樣に、いふて置く』

『成程、俺は、然ういふ事は、出來ぬかな』

『ウム、マア、諦めた方が、宜しい』

最初は、大隈の遊女買を、差止める爲に、異見をした副嶋が、今度は、大隈の爲に異見をされて、遊女買をせぬ、といふ事に、なつたのが、面白い。昔の副嶋と、大隈の間には、斯うした、面白い事があつた。詰らぬ逸話のやうではあるが、能く考へて見ると、大隈と副嶋の、性格の相違が、歴々と現はれて居るではないか。浪人時代の大隈は、此んな人であつた。

一二

大隈は、政府から、參與の職に引上げて、上京を、促して來たので、早速に、京都へ、乘込んで來た。待構へて居た、木戸は、大隈を招んだ。

『さて、此度、上京を促がしたのは、餘の儀でもない。かねて足下が、取扱ふて居た、耶蘇教の禁制に就てぢやが、各國の公使から、嚴しい懸合があつて、兎に角、其處分をつけて、了はう、といふ事になつたのぢやが、就ては、最初からの關係者たる、肝腎の足下が居らぬと、どうする事も出來ぬから、上京を促した次第であるから、一應、其後の模樣を、聞いて見たい』

『彼の一條に就ては、俺も、閉口仕つた。といふ譯は、耶蘇信者の頑冥にして、如何に說諭しても、屈服せぬばかりでなく、政府の御威光を以て、押へつけやうとしても、更に恐れず、抑へれば抑へるほど、頑强に反抗して、いかんとも仕やうがなかつた。耶蘇坊主が、平生から、信者を、巧く說いて居た爲に、信仰の心がよほど、深くなつて居て、その熱心は、實に驚く外はない。兎に角、宗旨の凝り固まり、といふものは、恐ろしいものだ。といふ事を、熟々、知る事が出來た。其始末は、書類を、御披見下されば判るから、お調べ下さい』

『書類は、見る事にするが、先づ兩三日中に、大阪の本願寺別院に於て、各國公使と、立會の上で、懸合が初まるのぢや』

『ハ、ア、それほどまでに、せり詰つて居るのですか』

『どうして、此方の方では、却々、嚴ましい事になつて、公使は、顏の色を變へて、毎日のやうに、役所へ、吐鳴り込むといふ、始末で、持て餘して居るのぢや』

『最初から、拙者が、受持つて居る、事件であるから、此談判はお引受しても、宜しいが、併し、政府の意嚮を伺つて、答辯するといふのでは、甚だ迷惑いたすから、一切を、拙者の考へ通りに、返答して宜しい、となれば、お引受いたそう。若し、一々、政府の差圖を受けて答辯するといふのなれば、平に御免を被る』

流石に、大隈は、偉い所があつた。其時代に於て、此大問題を、自分から、全權委任で引受けやう、といふのだから、相當に自信がなければ、斯んな事は、いへぬ筈である。之には、流石の大才物たる木戸でさへ、頗る驚いたらしい。

『汝に、一切を任せるから、政府の意嚮に關せず、随意に、やつて見ろ』

とも言ひかねて、躊躇の態であつた。大隈は、横着な態度で、また突ツ込んだ。

『お答へのないうちは、お引受けする事はなりませぬが、如何ですか』

木戸は、やうやく、覺悟が定いた。

『宜しい、道理の要求ぢや。一任する事に仕やう』

『ハ、ア、御一存で、左樣な事を、お取定めになつても、後日に、故障は起りませぬか』

『そりや、差支へない。總裁顧問を、勤めて居る、拙者が一任する、といふたら、後日の故障はない』

木戸の答が、判然して居たので、大隈は、默つて了つた。

木戸の考へでは、大隈に、責任を有たせて、若し間違つて、事が面倒になつたら、大隈一人の首を、斬つて了へば濟む、といふ考へで、あつた。大隈が、全權委任の意味で、談判を引受けやう、といふたのを、一時は躊躇したが、萬一の失敗を思へば、却て、左樣した方が、都合は好い、と、考へたのである。此事は、木戸が、改めて朝議にかけて、彌、決して了つた。

此談判は、山階宮を、總裁に頂いて、掛りの者が、二十人も、出席する事になつた。大阪の本願寺、別院の廣間に於て、各國公使を引見して、談判を開くのであるから、可なり、大懸りのものであつた。

公使側では、英吉利公使のパークスが、首席になつて、專ら談判の衝に當る事に、なつて居た。

先づ木戸から、談判を開く旨を告げて、係役人の名前書を示す、と、パークスは、暫くの間、之を眺めて居たが、

『木戸さん』

『何ですか』

『此中に、大隈といふ、名前あります。此人、此席に居りますか』

木戸は振返つて、大隈を、指さし乍ら、答へた。

『那所に居るのが、大隈八太郎であります』

『ハ、ア、那の人、大隈さんありますか』

『左樣』

『長崎裁判所の判事ありますか』

『然うです』

『私、那の人と、話いたします事、好みません。此席から、退けて下さい』

之には一同が、意外の感に打たれた。パークスは、大隈を忌避する、といふのだから、先づ、其理由を、糺す必要がある。それは、木戸の役目だ。

『何故、大隈が、此席に居る事、不可ませぬか』

『彼の人が、致しました事に就て、懸念起しましたのです。其本人が、此席に居ります事、好みません』

『併し、大隈の居た方が、都合が好いではありませんか』

『イエ、宜しくありません。那の人、詰り被告人あります。暫く此席を退けて、更に入れます事は宜しいが、最初から、此席に置きます事、宜しくありません』

此んな事を、いはれるとは、少しも思つて居なかつた。この場合に、斯ういふ抗議が出たので、暫くは、木戸も、默つて居たが、此儘に、大隈を退けては、政府の威信にも關するから、何とかして言ひのがれる口實はあるまいか、と、頻に考へて居る、と、正席に、控へて居られた、山階宮が、席を進まれた。

一三

パークスの主張にも、一應の道理がある。けれども、之を說き破つて、大隈を、談判の正面に、立たせぬ必要もあるのだ。今は、パークスの主張を、斥ける口實を、考へる外はないのである。時に山階の宮が、何か發言なさらう、とされたから、一同は、宮の發言を、待つのであつた。

『大隈は、長崎の役所に、勤めて居る時は、此事件の係りであつたが、今日では、政府へ呼上げて、參與の職を與へ外國係りをしてある以上、大隈を斥けては、却て談判に、支障を來して、お互に、不便ではあるまいか。又、耶蘇信徒に對して、大隈の執つた、處置が惡ければ、猶更、此席に於て、貴方から、大隈の處罰を、迫るのが當然でせう。本人が、此席に居つては、談判が出來ぬ、といふ次第でも、なからうから、之は此儘にいたして、兔に角、貴方の御意見を、承はりたく思ふが、如何であらうか』

總裁宮の一言は、條理が、通つて居る。パークスも、返す言葉がなかつた。殊に、幾ら偉い、といふても、木戸に對しては、幾分の侮りも、あつたらしいが、總裁宮に對しては、公使等も、敬意を有つて居たから、パークスにしても、强て自說を押通さう、とは仕なかつた。

『宜しい。話は解りました。大隈さん、之に居りまして、懸合いたしませう』

大隈は、最前から、小癪に障つて居たので、パークスの顏を、ジロ〳〵と見て、若し、自分に、發言を許されたならば思ひの儘に、やりつけてやらう、と考へて居る中に、退席問題は、之で一段落ついたから、幾分か、胸の溜飮も下つて、ジット控へて居ると、パークスは、

『浦上に於きまして、耶蘇敎の禁止を致したのは、如何なる次第でありますか、又、信徒に對して、慘酷な取扱ひをいたしたのは、何ういふ規則に、因つたのでありますか、先づ夫を聞きませう』

と、質問の火蓋を切つた。

木戸は、大隈に、目配せをしたから、大隈は、ずツと、席を進めた。

『其儀に就ては、拙者から、お答へをいたす。耶蘇宗門の儀に就ては、之迄通り堅く御禁制の事といふ、御沙汰が、朝廷から、出て居るに依つて、我々は、朝廷の家來であるから、御沙汰の通りに取扱つた迄の事で、其以上、申開きをする、必要は認めないが、併し、一應は、誤解のないやうに、辯解して置くのも可からう、と存ずるゆゑ、之に於て、耶蘇教を禁止した、次第を述べる事にいたさう。

全體、我日本の國には、古來よりの宗旨があつて、其以上、他國の宗旨を入れる、必要は認めないのである。日本の國には、一定不變の國體と、いふものがあつて、其國體に適ふた、宗旨であれば差支へないが、全然、人間の種類も、異ふし、言葉も、異つて居る、西洋諸國に、流行つて居る、耶蘇教を、日本の國に弘める、といふのは、甚だ宜しくない事と考へる。

殊に、西洋諸國の政府は、どういふ考へであるか分らぬが、耶蘇宗を弘める、坊主共の所業からいへば、此宗門の力に依つて、我國民の魂まで、西洋臭くして了はう、といふのであるから、軈て、我國體の上には、容易ならぬ關係を、有つて來るに違ひないから、斯樣な、邪宗門に對しては、國の危險を防ぐ上からいふても、禁止する事は、固より當然であつて、又、之に對して、各國公使が、異議を、いふべき筋はないのぢや。條約は結んで、開國貿易を許す、といふ事にはなつて居るが、宗門まで弘める、といふ事は、許してないのぢやから、强て押弘めやうといふのは、却て穩かならぬ事と思ふ。飽までも宗門を弘めたい、と思ふなれば、政府に願つて、改めて許しを受けた後なれば、格別の事、今日の場合に於ては、如何なる方法を用ひても、禁止されるのが當然であるから、左樣、御承知を願ひたい。

從つて、信徒に對する取扱ひが、慘酷であるとか、嚴重であるとか、いふ事を、外國公使から、我政府に迫るのは、餘計な事であつて、日本の政府が、日本の國民を處分するのに、外國の公使が、嘴を入れる、といふのは、甚だ其意を得ぬ。

日本國を治めるものは、日本國の主權者であつて、主權者の命令を受けて、役人が、その命令通りに、動く事は、獨立して居る、日本國としては、當然の國務を、行つて居るのであるから、之に對しては、いづれの國の政府といへども、一言半句、干渉がましき事を、申入れる權利はないのである。

若し、長崎に於て、自分等の爲した事が、條約に背いて居る、といふのなら、自分等が、役目の上に於て、一々、政府の內意を、聞かずに行つたのであるから、自分等に、其責任はある、といふ事は、特に御承知を願ひたい』と、臆面もなく、大隈が、思つたまゝを言ひ切つたので、外國公使も、互に暫くは、顏を見合はせて、大隈の說を、反駁する者はなかつた。

大隈は、長崎に居る時は支那人の飜譯した、萬國公法を、讀んで居たのだ。國家と主權と、いつたやうな事を、其頃の政治家として、公使の前で、はツきりと、いひ得るものは、大隈の外には、恐らく無かつたらう。

一四

開國の實を擧げてから、まだ幾年も經たないのであるから、今日でいふ、外交上の駈引などいふ事は、少しも解らなかつた。從つて、外國との間に、大きな問題が、起つた場合にも、之を處理するに就て、巧妙な駈引が、出來べき譯はないのだ。大隈が、强硬の態度に出て、言ひたい丈けの事を、言ひ盡した、といふ、其やりかたには、深い思慮があつての事ではなかつた。

パークスを、對手に廻して、正々堂々と、論諍する者は、一人も無かつたのであるから、少しでも遠慮がちに、受身になつて居れば、どんな難題を、言ひ出されるか、判らないのであつた。然るに、大隈が、頭からのしかゝるやうにして、思つた儘を、言ひ切つた、といふのが、パークスの方にして見ると、意外の答辯を聞いて、狼狽の氣味になつたのである。之までに、腰を强く、出て來るとは、更に思つて居なかつたのであるから、流石のパークスも、此時

には、頗る困つたらしい。けれども、パークスは、却々の遣り手であるから、其儘に怯んで、口を噤むやうな人ではない。

『大隈さん、貴下の述べまする所は、日本政府の意見でありますか、それともに、貴下、一人の意見でありますか』

『答辯する迄もありません。苟も參與の職として、日本政府の、大きい役人が、揃つて居る前で、斯くいふ以上は、私の述る所は、總て日本政府の意見と見て、差支へありません』

『確と、左樣ありますか』

『無論の事です』

『それでは、貴下の言ひました事に就て、一應、私の意見を述べませう。條約を結びます時に、宗旨の事を、何も定めてない、と、貴下は、言ひましたが、斯樣な事は、條約の上で、定める事ではありません。宗旨を、信仰する事は、世界を通じて、認められて居る事であります。獨り、日本國に於てのみ、信仰の自由を抑へる、といふのは、甚だ宜しくありません。殊に、耶蘇教を、信ずる者を捕へて、慘酷な取扱ひをして、死に至らしめる、といふやうな事は、全く野蠻國の政府が、爲す事であつて、日本政府が、左樣な事を、繼續して行けば、世界各國の反對を受けて、日本國は、滅亡するの外はありませぬ。日本政府は、信仰の自由を、飽迄も抑へる、といひますか』

パークスも、癇癪に障つたから、思ひ切つて、斯ういふたのだらう。苟も、外交上の談判に、お前の國は滅亡するなどは、甚だ穩かならぬ事だ。腹の中には、何う思つても、そんな事は、口外すべきものではない。パークスは、今にも、日本が滅亡する、といふやうな事をいふて、一寸、脅して見たのだ。處が、大隈は、其時分から、斯うした談判には、極めて圖太しい所があつて、パークスの威嚇も、更に效がなかつた。

『耶蘇教を、信ずる者を抑へれば、日本國は滅亡する、と言はれるが、併し、私の考へる所では、耶蘇教を、弘める事を許せば、日本國が滅亡する、と思つて居ります。貴下と、私と、其點に就ての考へは、全く反對であります』

パークスは、眼を圓くした。

『耶蘇教を信じますと、其國が亡びる、といふ事はどういふ、譯ありますか』

『今日迄、耶蘇教が、行はれて居る國には、大きな戰爭が起つて、困つて居ります。卽ち其戰爭は、耶蘇教が、原因になつて居る。世界の耶蘇教國の戰爭は、大半が、宗門の事から、起つて來る、といふ事は、歷史が、之を證明して居る。また、未開の土地へは、先づ耶蘇教を弘めて、それから漸次、其土地を蠶食して、終には、兵力まで用ゐて、領土にしてしまふ、といふのが、耶蘇教國の慣用手段である。左樣な、危險な宗旨が、我が日本國に行はれる、といふのは、我々としては、甚だ喜ばないのであります。信仰の自由は、世界各國が、認めて居る、といひますが、左樣な宗旨を、弘める事は、御免を蒙る。どうしても、弘めなければならぬ、といふて、押込んで來る、といふのも、甚だ面白くない事では、ありませんか。依つて、我政府は、如何なる手段を以てするも、耶蘇教が、國內に弘まる事は、防ぐ意であるから、今日までの方針が、或は慘酷であつたかも知れない。併し、それ位にしても、御禁制の目的を、遂げる事が出來ねば、猶一層、酷い取扱ひを、爲るかも知れぬから、强て布教しやう、とするものは、豫め覺悟してかゝるがよい』

政府の方針が、果して其處まで、堅く決つて居るか、どうかは判らぬが、一向、そんな事には頓着なく、大隈が、思ひ切つて、之までに、やりつけたのは、流石である。理窟の善惡は、姑く措いて、少しも弱身を見せず、何處までも、喧嘩腰で、掛つた所が、面白い。パークスとても、それに怯んで、引込むやうな人ではないから、盛んな論戰が初まつて、容易に納まりさうもなかつた。

此時に、通辯の役を仕たのが、シーボルドであつた。父のシーボルドの時から、日本の爲には、能く努めて吳れた人であつたが、今日の談判の模樣から、此人が、甚く心配して、其晚、頻に大隈と、パークスの間を往來して、調停の勞を執つて吳れた。それが爲に、幾分か、パークスの考へも、穩やかになつたのは、偏にシーボルドの働きであつ

たが、併し、又一面から、考へて見れば、大隈が、向う見ずに、強く出た、といふ事が、パークスをして、少からず驚歎せしめ、それが因をなして、談判の結果は、頗る有利に、展開したのであつた。

それは、兎に角、長崎方面に、信徒を置くのは宜しくない、といふので、旣に捕へてある者は、夫々に處分して、各藩に分けて、三十人若くは四十人、預ける事にして、頗る曖昧の中に結了した、パークスの方でも、さまでに、儀式張つて、懸合ふ事もなく、政府の方でも、幾分か、手心を加へて、或點までは、布教の上に、寛大な扱ひをする、といふやうな事になり、一時は、世間を騷がした、耶蘇問題も、之で納まりがついて了つた。大隈が、朝野の間に知られたのは、全く此問題からであつた。

江戸遷都

一

慶應四年の九月に改元して、明治となつた。御即位の式は、八月廿七日を以て、其禮を行はせられたが、極めて質素に遊ばした。奥羽諸州の變亂も治まらず、猶ほ全國に、不穩の形勢が、漲つて居たから、態と、略式を以てせられたのである。

此當時に、二つの大問題が、涌いて來た。其一は、德川家を、如何に處分すべきか、といふ事であつた。猶ほ一つの問題は、遷都の事であつた。

德川家の處分に就ては、何處までも追窮して、根を斷ち、葉を枯すまで、やつて了へ、といふ者と、それまでに爲るにも及ぶまいから、切めて、家名だけは存してやらう、といふ者と、二派があつて其論諍が、却々甚かつた。

遷都の事に就ては、公卿の反對が、烈しく起つて、非常に喧ましかつた。それは其筈だ。一千年の帝都が、一夜にして、他へ遷る、といふのであるから、京都の人、殊に、公卿が反對する、といふのは、無理ならぬ事である。今日の事として、假に考へて視ても、府縣廳や、學校の移轉問題でさへ、飛んだ騷ぎが、出來る事もあるのだから、況んや、帝都を遷して、陛下の御座所が變るといふほどの、大きい事について、多少の動搖が起るのは、致方のない事である。

長州人が、德川に對する怨みは、隨分、長く續いて居たのであるから、自然、長州出身の役人が、朝廷の權威を笠に被つて、德川家へ、復讐的に、嚴罰を加へやう、とするのは、據所ない事だ。然れば、最初に於いては先づ慶喜を、死罪に處して了へ、といふ說が、大分勢力があつた。けれども、嚴罰論は、大西鄕が、出て來て、どうか斯うか押へつけて了つた。若し、大西鄕が、居なかつたならば、慶喜は、死罪になつて了つたかも、知れない。江戶城の明渡しに就て、大西鄕が、勝安房と、談判を開いた時に、勝から、慶喜公の御身の上は、何分お賴み申す、といふの一言を、聞かされて居るので、どうしても、西鄕は、勝の哀請を入れて、慶喜を、救はなければならなかつた。啻に夫ばかりでなく、西鄕としては、最も辛い事があつたのは、天璋院と、靜寛院宮の兩夫人が、江戶城內に、留まつて居られた、といふ事である。

天璋院夫人は、齊彬侯の養女として、政略的に、德川家定に嫁いだ、篤子姬が、將軍の亡き後は、未亡人になつて天章院と稱し、西丸に居られたのである。結婚の際には、齊彬侯の命を受けて、西鄕は、調度係を、勤めた位に、深い關係を有つて居たのであるから、謂はゞ主人にも等しき、天璋院夫人を、見殺しにする事は出來ぬ、といふ事情がある。

靜寛院夫人は、新帝陛下の、伯母樣に當るので、猶更に、大切な御方である。此兩夫人が、江戶城の西丸に、居られる以上、只だ無暗に、江戶城を、攻めつけて、さへ了へば可い、といふものではない。兩夫人の御身の上も、安全にしなければならぬ、といふ責任が、官軍の方にはあるのだから、夫に就ての苦心は、一方ではなかつた。勝安房がそれを見込んで、慶喜の身に就て、寛大の御處置を哀請するのだから、早くいへば交換問題で、西鄕は、退ッ引ならぬ羽目に陷つて、それと明かに、口に出さないで、只だ目顏で知らせて、不言不語の間に、互の心を察して、江戶城明渡しのやうな、大きな問題が、殆んど立話し同樣で決したといふのも、實は、兩夫人に對する、問題が殘されてあつたればこそである。

西鄕と勝の、二度目の會見は、高輪の薩摩邸であつたが、愈々、江戶城明渡の、相談が濟むと、西鄕は、すぐに早籠の用意をさせて、晝夜兼行で、京都へ、乘込んで來て、太政官會議を開き、之を問題にしたのだ。其時にも、長州人の鼻息が荒く、慶喜を死罪にしろといふ、說が、多かつた。けれども、西鄕は、何處までも、慶喜の助命說を唱へて、遂に衝突した結果、西鄕は、決然として、席を立ち乍ら、

『どうしても、慶喜を死罪にする、といふなれば、俺どんな今日限り、御免を蒙り、國許へ引取るから、跡の事は、宜しく賴む』

と言ふて、すぐにも、退京す可き、覺悟のある態度を見たので、長州人も、我を折つて、遂に慶喜の生命を、助ける事にしたのである。

然うなつて見る、と、今度は、德川家を、どうするか、といふ事が、第二の問題として、當然、起つて來べき筈である。散々、揉みぬいた末、駿遠參の三ケ國で、七十萬石を與へ、慶喜には、隱居を命じて、田安家から、龜之助が入つて、相續する事になつた。即ち今の家達が、即ち當時の龜之助であつて、德川家に對する處分は、一段落になつたのである。

二

京都は、山紫水明の地で、繪の上の都としては、此上もないのであるが、苟も鎖國の夢を破り、開國條約を結んで、世界の舞臺に乘出さう、とする、新興の日本帝國をしろしめす、天皇の都としては、甚だ不適當な所である。然れば世界の大勢に、通じて居た者は、夙くから遷都の意見は、有つて居たのだ。只だ急進と漸進との差ひはあつたが兎に角、都を遷さなければならぬ、といふ事とは大概な者は、思つて居たのである。

されば、大久保の建議が入れられて、新帝陛下は、大阪城へ、お移り遊ばす、といふやうな、大英斷を行はせられ

たのであるが、只だ之だけの事を以て、遷都の實を擧げたとは、言へぬけれど、兎に角、新帝が、大阪城へ入られたといふ事は、天下の耳目を、聳動したに違ひない。左樣な事が、容易く行はれた、といふのも、詰りを言へば、時勢の爲といふても、可からう。

然るに、佐賀藩の江藤新平が、征討軍の東下と共に、其後を追ふて、江戸へ、下つて居たが、江藤は、京都へ、引返して來ると、帝都は、江戸へ遷さなければならぬ、といふ事を、言ひ出して、愈々、遷都が、問題になつて來た。

江藤は實に偉い人であつた。固より此人を以て、蓋世の英雄である、とか、一代を驥しうする、偉人である、とかいふやうな事は、いかに贔屓目に見るも、言ひ得ないが、併し、時勢を達觀して、一國の改善を計る、といふに就ては、非常に進んだ、意見を持つて居た人であるから、只だ徒らに、刀の柄を叩き、慷慨悲憤して、天下の事を談ずるといふのとは、頗る違つて居た。蓋世の大才を懐いて、着々、其見込みを行つてゆく、といふやうな、人物であつた。惜しいかな、佐賀藩に生れて、薩長二藩と、緣故がなかつた爲に、毎も、意見の衝突を來して、到頭、來末路は、悲慘なものであつたが、兎に角、我國を導いて、文明國らしい施設を、政府に、なさしめた力は、慥に江藤が、其一半を負ふて居た、といふても、然るべきである。

江藤は、佐賀藩の輕輩であつたが、一躍して、司法卿兼參議といふ、顯職に上つたほどで、同じ輕輩でも、一人前の武士ではなく、足輕に、毛の生えた位の所で、あつたのだが、隨分、それ迄に昇るには、骨が折れた事であらうが、それは足輕であるから、一足飛びに、行つて了つたのだ、ともいふが、併し、參議から、又、一足飛に、飛下りて、獄門臺に、首を曝したのだから、面白いぢやないか。

斯うした悲慘な、運命の下に、此世を終つた、といふのは、詰り、薩長藩閥から、出身の政治家と、衝突した結果で、自分は、司法卿兼參議といふ、顯職に居つても、自然、頭を押へられて、計畫した事を、意の多く、爲し遂げる事が、出來ぬ爲に、功を急いで、無理をしたから、然うした運命に、落ちたのである。

自分に、何程の力量があつても、周圍に、味方が少なければ、對抗してゆく事は、出來ないのであるから、其處で、盛んに司法省へ、人材を網羅して、他日、反對の政治家と、衝突した時に、自分の一勢力を、作つて置く必要があるから、種々の事をして、味方の吸收に、掛かつたのである。當時の江藤を、能く知つて居る者から、聞いて見ても、常に食客が、四十人や五十人は居た、といふ事であるから、以て、當時の江藤が、いかに焦つて居たか、といふ事は、想像し得るのである。

大井憲太郎を、陸軍裁判所へ入れたのも、江藤の周旋である。副島安正を、窮苦の裡から、救ひ上げて、司法省の役人にしたのも、江藤である。河野敏鎌を、食客に置いて、司法者の一員に加へたのも、江藤の力であつた。

之は只だ、江藤が、有用の人材を、無名の書生から引上げて、他日、自分が、風雲の機會に、際會した時分には、大に是等の書生の力に依つて、活躍しやうとした、ホンの一例には過ぎないが、兎に角、當時の大きい官吏として、澄して居れば、相當に、資産も出來、子孫が、陋巷に窮死する、といふまでの零落には陷らなかつたであらうが、有つて生れた、覇氣と、精悍の氣が、遂に薩長藩閥の下に、頤使される事に、甘んじ得ず、遂に自分の首までも、梟木に曝すやうな事に、なつて了つたのである。

上野の山内に、彰義隊を初め、多數の幕臣が集まつて、官軍に、戰爭を挑んだ當時、江藤は、一個の文官として、江戸に、來て居たのだ。然るに、此形勢を以て、猶ほ幾日かを、過して居れば、必ず佐幕派が、各所から、一時に起つて、關東一圓は、戰亂の巷になるだらう。一刻も早く、上野に、集まつて居る、幕臣を掃蕩して了はなければ、天下は治まらぬ、と、見越して、人知れず、晝夜兼行で、京都へ引返して來て、太政官に、其議を、上つた結果、遂に大村益二郎が、江戸へ下る事になつたのである。

大村は、前名を、村田藏六といふて、元來が、毛利の世臣ではなく、周防國の一寒村に生れた、醫者の伜であつた

が、夙に志を立て、長崎に、蘭書を學び、歸つて來てから、醫者を止めて、兵學を研究して、あれまでの人物になつたのであるが、若し、大村が、江戸へ下らなかつたならば、縱令、官軍の勝利となるまでも、あの戰爭が、一日で片付く、といふやうな事は、なかつたに違ひない。乍併、若し此時、大西郷が、征討總督の大參謀でなくして、大村なんぞが、餘計な世話だ、といふやうな顏をして、大村を排斥したならば、猶ほ事が面倒になつたのであるが、其所は、流石に、西郷の大きい所で、大村が、やつてくれるならば、却て任せた方が宜い、といふて、西郷は、作戰上のことを、一切、大村に任せて、自分は、全然、局外の人の如くなつて、其戰況を、見て居た。大村は、自分の思ふがまゝに、作戰を立て、たつた一日の間に、上野山內に、籠つて居る、幕臣を、擊拂つて了つたのである。

當時、大村は、上野廣小路の、伊東松坂の二階に隱れて、一枚の地圖を眺めながら、諸藩の兵を配置して、上野を包圍したのであるが、この家が、即ち今日まで、盛んに商賣して居る、吳服店の伊東松坂である。

幕臣の方では、日の暮れるのを待つて、各所から、上野へ驅けつけ、猶ほ殘れるものは、江戸の四方から、火を放つて、內外相應じて、官軍を挾擊つ、計畫であつた。されば、此戰爭が、夜に入れば、それこそ、由々敷大事に、なつたであらうが、はやくも、大村が、之れを悟つて、日の暮れぬ中に、攻落す戰略から、充分の手配りをして、作戰を誤らなかつた。といふ、其處に、大村の俊れた點は、あつたのだ。併しながら、之とても、江藤が、太政官を動かして、大村を東下させた、働きの結果である。と思へば、江藤の勳功は、容易ならぬものであつた。

三

今の九段坂に、建つて居る、大村の銅像は、唯一のものであるが、東京市中に、建てられた銅像は、殆んど二十餘もあるが、何れも之れも、姿勢の拙い事は、お話しにならない。只本人の顏や、身體の恰好を擬せた、といふだけのもので、本人の風格が、現はれて居る、といふやうなものは、甚だ少ない乍併、大村の銅像に限つて、能く見れば見

るほど、其風格が、現はれて居る。初め銅像を建てる、といふのに就て、どういふ姿の所を、採つたらよからうか、と、いふのが陸軍部內でも、議論になつて、結局、午後四時頃に、大村が、各攻口を見廻つて、湯島天神の境內へ、やつて來た。其時に、吉祥閣が火になつて、燃え上つた所であつた。之を遥かに湯島臺から見た、大村が、膝を打つて、

『モウ、宜い』

と叫んだ。其時の姿勢が、如何にも宜かつた、といふので、當時、大村に從いて、之を見て居た者が、その形を寫して、工作家に、あの銅像を作らせたのである。之だけの事情を、呑込んで置いて、能く見れば、大村の銅像に、少からぬ興味を有つ事になる。

上野の幕軍を、擊攘つて了つたので、關東の大勢は、玆に決した。それが、全國へ響いて、まだ向背の決まらぬ、諸侯が、追々と、官軍に歸順するやうになつたのである。又、各所に、潛伏して居る、幕臣が、夜に入つたならば、上野へ驅込んで、大に奮戰しやう、と、氣構へて居たのだから、此時の戰が、大村の爲したやうに、功を收め得なかつたとしたら、その影響は、大きなものであつたらう。此點から考へても、大村が、江戸へ下つた、效能は著しいものだ。それを爲さしめた者は、誰である、といへば、即ち江藤新平の働きであつた。

江藤は、啻に机に向つて、政務を見る、といふ丈けの、才識を、有つて居たばかりではない。斯ういふ點に於ても却々、機敏な働きをした。愈々、江戸城が、明渡しになつて、官軍が入城した時、大西郷は、都下の者に命じて、農業に關係する、記錄一切を集めさせて、堅く其保存を命じた。然るに、江藤は、奉行所や、評定所に、積込んである、訴訟書類を、一切纏めて、保存せしめた二人の性格や、眼の注け所が、異つて居たのが、此逸事に依つて、明かに知れる。

海江田武次は、城受渡しに立會つた際、寶藏に秘してある、金の分銅の數が少いと、苦情をいふたので、案內者た

る、山岡鐵太郎の爲めに、一喝されて、顏を赧めた、といふ珍談がある。海江田は、後の信義の事であるが、金の分銅の爲に、山岡から、劍突を食つたなどは、甚だ外聞の惡い事だ。死んでから後も、腹違ひの子供が、互に喧嘩して、相續爭ひなどで、世間の嗤ひを買ひ、東洋のネルソンとして、尊敬をうけて居る、東郷大將までを、裁判所へ引出して、マゴマゴさせる、といふやうな、失態を釀した事は、甚だ殘念な次第で、海江田家の爲に、惜む可き事である。

人間は、何事もなく、落着いて居る時には、さまで異りはないが、少し身邊に異狀があつたり、ドサクサの起つた時分には、平生の性質が現はれるものだ。此三人が、江戸城明渡しの當時に、殘した逸話に就て見ても、直ぐ別るではないか。後に、江藤が、司法卿になつてから、裁判所の組織を整へたり、刑法の大本を定めたり、其他、樣々な法律の制定をして、司法制度の基礎を、造つて置いて吳れた、といふ事は、現代の國民は、感謝しなければならぬ。

是程の江藤が、何故、那アした、末路を見たか、といへば、畢竟、時勢に逆らつて、無理に、自分の意見を通さうとしたのが、累をなしたものと、いふの外はない。餘りに焦つた爲に、自分の力で、自分を倒した事に、なつたのだ。人間といふものは、何れ程、偉いといふた所で、矢張り人間なのであるから、鳥渡した、見込みの違ひで、昇るものと、降るものとの區別が、出來るのである。偉いと、偉くないとは、僅の紙一枚の差であるから、巧く時勢の潮流に、乘じて行けば、トン〳〵拍子に昇るが、一と足ふみ脫せば、奈落の底まで、落ちてゆく。其成敗に由つて、偉い人ともなれば、また、偉くない人ともなる。江藤の如きは、則ち足をふみ脫して、落ちて來た人である。只だ、其敗れた事の爲に、江藤は偉くない、とは、いへないのだ。假し偉くない、としても、彼れ丈けの仕事を、殘した人だから、日本の國家から見れば、大なる功勞者として、未來永劫に、傳ふべき人物である。

四

今の法律家が、仔細らしい顏をして、人權は貴むべきものだ、とか、頻に難かしい理窟を、いつて居るが、江藤は、

一般の人が、知らぬ中に、さうした問題に就て、法制の基礎を、決めて置いて吳れた。第一に、人身の賣買を禁じたのが、自由廢業の行はれる因に、なつて居るのだ。穢多非人の制度を打破つて、平民の戶籍に、編入した上、一般の人民と同じやうに、權利義務を、負擔させる事にしたのも、江藤の働きである。勿論、此事に就ては、大江卓が、土居卓造といふた時で、民部省の一小吏たる、土居が、建白した結果で、あるが、併し、江藤が、それはならぬ、と言へば、駄目になつて了つたのだ。其他、人權に關する、問題に就ては、武家時代から、行はれて居たものを打破つて、新生面を、開いて置いて、吳れたのである。

何う考へて見ても、江藤の如き人は、今日に於て、維新の勳功者として、其子孫は、厚く國家が、保護す可き筈である、と思ふが、江藤の遺族は、長く生活に苦むで居た。而て見ると、社會は、存外に冷酷なものである。幸ひにして、衆議院の問題になつて、皇太后陛下より、江藤の未亡人に對して、御下賜金があり、旁、世人の同情も、起きて來たが、そんな事では、遺族を、救濟する事は出來ぬ。今は、どうなつて居るか、よく知らぬが、玆に特記して置く。

江藤が、維新草創の際に於て、帝都を、江戸に遷す事が、最も必要である、といふ儀を唱へて、遂に實現せしめた一事は、非常な功勞である。

大久保は、大阪に遷都の必要を說いた。江藤は、江戸へ遷都の必要を、更に强調した。多くの反對者を屛息させて、之を實行なさしめた、といふのは、維新史に、特筆すべき事柄である。

當時、其事が行はれ、やうとして、一度、邪魔が入つて、難かしさうになつた時、江藤から出した、建白書がある。之を揭げて、參考の資料に、供する事にする。

謹而奉奏聞候。東京御幸之儀、尹宮御陰謀露顯の事出來、其上、開陽艦其外脫出の事相嚮、都下人心恟々、於雲上御疑被爲在候哉に付、御遲延可相成と傳承仕候、臣甚以相驚、大息無限の次第にて御座候。

先度東京御親臨被爲在候儀、海内海外へ御布告相成、東京府中の人民、初めて安堵の道に相赴き、關東八州の事情、漸く安業の場に相成り、熟ら其光景を相察し候處、鳳輦既に發都と申御事傳承仕候はゞ、駿東十三州府縣の人民、耳目立に一新、奥羽の民心立に定まり、乍恐聖上の叡斷、海外に相轟、國本固立、天下大定、寔に以て恐悅至極、至大至喜、何以是に加焉。夫欲大定天下者、先づ人の耳目を新にするに在り、夏殷、周革禮も、是所以新人耳目也。人の耳目を新たにするといふは、衆の方向を定むる所也。方向既に定まる、是國本怒て立也。苟國本不立、一時干戈は雖止紊亂は在其中也。今駿東十三州は、開闢以來、鳳輦不至、武將恩威を仰望するのみ、故に今御維新の時と雖も、只無主宰之思を爲し、外は承順すると雖も、内は實は疑惑を致す次第にて御座候。何分にも分向定まると不可謂也。(中略)且古人云、武王一怒天下大定、誠哉言也。今脫艦の事、輦下に傳聞仕候はゞ、必大に其不道を逆鱗ましまし、十日に被遊御出輦候事も、五日に御出輦被爲在候位の儀に相成候はゞ、德川代々の家來共、大に畏れ、諸藩の子弟も大に畏れ、海内懼然として、五威に恐順仕可候。(中略)左候て、御幸遲延候へば、乍恐御大信を御失被遊候御事に移行可申と奉存候、諸藩の兵士、唯々朝廷之御爲めと、其主其主の勇みに由り、親被討候共、子不顧、子被討候共、親不顧、兄の屍を越えて弟進み、弟の死を餘所にして兄進み、流血染野、終に賊窟を屠り盡して、已欲得賊首、本雖倚人望、豈非倚聖運哉。神武御身執戈、其上御中興之御大業を御定被遊、神功皇后は、海外に被爲渡、三韓を御定被遊。如此御武勇、御聖斷にて、被爲踏危難譯之所、瑣々たる弱賊孤艦脫出迚、御幸を御遲延にも相成候はゞ、前段戰士は、何歟思はんや。天下又、雲上は于今武勇無之と言はん哉。然らば乍恐御武德相缺可申と奉存候。夫御維新の時に當、乍恐、陛下萬一、前段仁信武の三德を御失ひ被遊候事にも移行候はゞ、人臣たるもの、堯舜其君と不可謂也。(中略)臣愚、謹而察するに、若し御幸永く御遲延被遊候事にも相成候はゞ、天下の事は去可申と奉存候。因て若し其通り、御幸御遲延被遊御事にも相成候はゞ、伏而願は、臣卽ち

御暇を賜り、歸藩被仰下度奉希望候(下略)

實に、思ひ切つて、能く是れまでに、書いたものだ。當時の事情を察すれば、遷都に反對する者も多くあつて、殊に、此際の御幸は、甚だ危險である、といふので、一時は、中止の御沙汰も、出さうになつたが、漸く此建白書で、喰止める事が、出來たのだ。それについて、木戸と江藤との間に、面白い話がある。

五

戰爭に勝つて、天下を統一してからは、却々、討幕派の鼻息は强かつたが、未だ江戸城が、漸く手に入つた許りで、幕臣の多くは、各所に潜伏して、恢復の策を、講じて居るとか、又は、奥羽の諸藩が聯盟して、官軍に當るとかいふ、風評も、起つて來るし、加ふるに、榎本釜次郎が、幕府の軍艦を率ゐて、脫走した時には、流石に、勢ひの好い新政府も、一時、弱り果てた。

といふものは、一時の勢ひで、幕府を押倒したやうなものゝ、何しろ、二百七十年の間、天下を壓へて居たから、恩威兩つながら行はれての、響きは、却々、根が深く入つて居た。倘し、佐幕派の方に、少しでも都合の好い事があれば、自然、其方へ引付けられるやうな、傾向があつたのであるから、それを甚く怖れて居たのだ。

從つて、關東行幸の一條も、口には强く唱へて居ても、心の底を洗へば、幾分の懸念はあつたのだ。江藤は、その形勢を視て、非常に憤慨したので、建白書の、筆鋒銳く、議論も激しかつたのである。

乍併、江藤が、此書面を捧呈する迄には、多少の曲折はあつた。自分が、深く信じて居る、木戸に見せて、豫め打合せをするつもりで、木戸を、訪ねる事になつた。

江藤と木戸を比べる、と、全然、性質も異つて居たし。出身も、佐賀と長州の異ひが、あつた上に、木戸は、漸進主義の人で、江藤は、急進的の人であつたから、何うしても、二人の議論が、一致すべき筈はない。けれども、德川

幕府を倒して、新しい政府が、出來たばかりであるから、何事も、新しく積上げて行く、必要は、二人共に、認めて居たのだ。其時分には、木戸も、焦慮り氣味があつて、随分、思ひ切つた事を、やつたものだ。後には、江藤と、意見の相違があつて、屢々、衝突して居るが、太政官が、京都にあつた時分には、木戸の方から、幾分か讓步して、江藤の意見を、採用するやうにして居た。又、江藤は、才幹のすぐれて、先の見える人であつたから、木戸も、其一事に於ては、互に容れる所もあつて、江藤の說は、よく參考として、耳を傾けたものである。軍務局の御用で、江藤が、暫く關東へ行つて、三四日前に、歸つて來たのは、聞いて居たが、未だ會はなかつたのだ。所へ、急に面會をしたいといふて來たので、木戸は、取敢ず、江藤を迎へた。

『ヤア、木戸さん、久しく會はなかつた。京都の方は、何ういふ模樣ですかな』

『別に之といふて、物語るほどに變つた事はないが、相變らず、金の無いのと、議論許り多くて、事の進渉がつかぬ、のと、此二つには、苦しめられて居るのぢや。ハツハツハツ』

『金の事は、三岡が、働いて居る、といふ事ぢやから、さまでの心配はあるまい』

『イヤ、然うでない。三岡が働いても、詰りは、燒石に水ぢやからな』

『それは然うぢやが、折角、此所まで漕付けたものを、此儘に投出す譯にもなるまい。今、一寸の辛抱ぢや』

と、語り乍ら、江藤は、ずツと、膝を進めた。

『時に、木戸さん、拙者は、お役御免を願ふて、故鄕許へ引籠らう、と思ふて、相談に來たのぢや』

意外の語に、流石の木戸も、驚きの眼を瞠つた。

『何と、御役御免を願ふ、と言はしやるのか』

『左樣』

『フ、ム、一體、そりや何ういふ次第か』

『お互が、之までに命懸けて、押詰めて來た事が、さアといふ、ドン詰の場合に、腰を突くやうな事では、到底、見込みはつかぬから、寧そ御免を願ふ方が可からう、と思ふたので、其覺悟に、なつたのぢや』

『フ、ム、何ういふ次第から、然ういふ考へになつたのか、知らぬが、兎に角、夫までに覺悟をする、といふのは、容易ならぬ儀と考へるが、全體、どういふ事に激して、それまでの覺悟をしたのか。一應、聞かせて貰ひたい』

『イヤ、言ふまい。言ふた所で、到底、難かしい事だらうと、思ふから、寧そ言はぬ方が、可からう』

『然うでない。それは一應、言ふた方が可い。迚も行はれぬ、と思ふて居る事でも、俺が、聞いて見て、存外に、易い事かも知れぬ。其處が、各自の觀察の異ふ所なのぢやから、兎に角、打明けて見たら、可からう』

江藤は、暫く考へて居たが、

『宜しい。それでは、話す事にしやう』

『ウム、何ういふ事か、承はらう』

其所で、江藤は、膝を正した。

『實は、關東行幸の一條に就てぢやが、此頃、承る所に依れば、今暫くは、御沙汰止み、といふ風評を聞込んだが、此場合に、左樣な優柔不斷な事では、到底、天下を統一する事は、難かしい。既に幕府をあれまでに、追詰めて、江戸城までも、受渡しが濟んだ、今の場合に、左樣な弱味を、見せるやうな事では、未だ向背が、判然して居らぬ、諸藩を押へて、王政一新の實を擧げる、といふ事は、なるまい。永い間、帝都とした土地を、御發輦遊ばして、關東へ、行幸遊ばすのは、最も大切な事で、一刻も急ぐ必要があるのに、之れに故障の起る、といふものは、畢竟、天下の大勢に通ぜざる、姑息の輩の言ひ分に、違ひない。それ等の者に働かされて、御沙汰が異變するやうな事では、之から先の事が思はれて、甚だ面白くない、と思ふから、其所で、拙者は、御役御免を願ふて、國許へ引籠らう、といふのぢや』

豫て、江藤が、帝都を、江戸へ遷す、といふ說を、唱へて居る事は、木戸も、能く心得て居るし、自分も、口にこそ出して言はぬが、心には、同意して居たのだ。只だ、それを實行するには、時機を見なければならぬから、徐に機會を、窺つて居たまでの事である。然るに、元來が、性急な江藤は、それをもどかしく思つたものか、關東行幸の事が、御延期になる、といふ說が漏れて、それを聞いて、憤慨したものに違ひないが、此場合、一人でも、江藤ほどの者を失ふのは、折角に築き上げた、政府の基礎に、龜裂が入るやうなものであるから、木戸としては、默つて聞流す事は能なかつた。

六

王政維新の實を擧げ、公議輿論に基いて、政治の實を擧げる、といふ爲には、諸藩の有志の中から、然るべき人物を、採用するのが良い、といふ事になつて、それ〴〵に名指で、引上げられた人物は、何れも其藩に於て、屈指の者ばかりであつた。先づ薩藩では、寺島宗則、町田久成、五代友厚、長州藩では、廣澤兵介、井上聞多、楫取素彥、土州藩では、後藤象二郎、神山佐多衞、佐賀藩では、副島次郎、大隈八太郎等の人々であつたが、其時分には、朝廷から、召されて出た、といふので、之を徵士といふて居た。夫に對して、貢士といふのがある。それは四十萬石以上の、藩から三名、十萬石以上から二名、一萬石以上から一名と、いふやうに、工合に割付けて、其藩を、代表し得る、實力あるものを、召上げたのであるが、諸藩へ下された、御沙汰書は、

「今般、王政御維新、仰せ出され、輿論公議を採り候、御趣意を以て、各藩より、貢士として、太政官へ、差出し候やう、仰せられ候條、其御趣意に相基き、國々の國論に、代るべき者、人選、差出し候樣、御沙汰候事、」

と、いふのであつたが、諸藩からは、それに對して、貢士を、人選して出した。併し、或は、藩主の御氣に、入らぬ者だ、とか、或は、重役の嫌ひな者だ、とか、いふものは、如何に才物でも、之を嫌つて出さない、といふやうな、

輩もあつたので、朝廷から名指で、呼上げる者も、出來た。それを徵士と、いふたのである。貢士として、出て來た人の中にも、却々、立派な人物があつて、後には、新政府の爲に、種々、貢献する所があつた。兎に角、藩より勸めて出したのと、朝廷から名指して、呼上げられたとの違ひがあるのだから、徵士として、朝廷へ出た者は、先づ當時に於ては、第一流の人物として、見なければならぬ。有體に言へば、多士濟々の新政府であつたが、早くから中央へ出て、討幕勤王の爲に、働いて居た者は、所謂、一日の先輩で、自然、天下の事情にも、通じて居る所から、然うした人物は、一人でも多く、圍ふて置くのが、新政府としては、必要なのだから、其所で、木戸は、江藤が、辭職の決心を以て、關東行幸の事を爭ふといふ、覺悟が、如何にも堅いのを見て、

『足下のやうに、然う一本氣に、言はれても困るが、兎に角、爭ふべきだけは、爭ふ事として、御役御免などいふ、事は、御互に控へやうではないか、足下の說には、吾等も同意であるから、共に力を盡して、朝廷へ、貫徹するやうに勸めやう』

『貴下に、それだけの覺悟があるなれば、拙者も、敢て御役御免と、いふやうな事は、申したくもないのだが、今日の朝廷の御有樣では、迚も肯かれまい、と考へて、此覺悟をいたしたのぢや』

『宜しい、能く解つた。詰り、關東へ行幸の事が、一度、御內定して居たにも不拘、僅かの事に、故障を申して、御中止の御沙汰が下る、といふ、此頃の風聞に就て、足下は、憤慨して居られるのぢやから、それに就ては、吾等も骨を折つて見やう』

『貴下が、それまでに言はれるなれば、之を一應、御覽下さい』

と言ふて、江藤が差出した、一通の書面を、木戸が、取る手遲しと、披いて見れば、之れぞ江藤が、心血を注いで、認めた建白書であるから、木戸も、熟々讀返して、

『イヤ、立派なものぢや。足下が、斯くまでの御覺悟を以て、朝廷へ迫られる。その赤心は、必ず朝廷に於ても、御

採用になるに、違ひない。吾等も、及ばずながら、力を盡す事に致さう』

『貴下に、其覺悟があると、聞いて、拙者も、安心致した。此上ともに、御骨折を、賴み入る』

『併し、江藤さん、愈々、建白書の通り、御採用に相成つて、關東行幸が決した曉に、路次の警護萬端、吾々の力に依つて、爲さなければならぬものぢやが、萬一にも、佐幕派の殘黨が、不穩の企てを、いたした時には、何とせられるか。其邊の考へもあれば、一應、聞いて置きたい』

木戸は、見事に一本、灸所を衝いた意で、江藤の顏を、ヂツと、見詰めながら斯ういふたのだが、江藤は、ニヤリと笑つて、

『道御理の御心配ではあるが、併し、夫等の事は、防ぐに道を以てしたら、さまでの事もなからう、と存ずる』

『して、如何いたせば宜しい、と言はれるか』

『諺に所謂、毒藥も盛りやうに依つて、藥に變ずる、といふが、其外に、策はあるまい』

木戸が、膝を打つて、

『其所ぢや。吾等の考へも、其通り』

二人は、軈て、硯を引寄せて、何か紙に書いて、互に示し合ふて居たが、

『オヽ、こりや、貴下の考へも、同じや』

木戸は、笑ひを洩して、

『之なら大丈夫、巧く行き居る意ぢやが、足下の考へと、符節を合はすやうに、少しも違つて居なかつた、といふのも不思議な譯ぢやのう』

斯くて、江藤は、木戸の同意を得たから、喜び勇んで、歸つて來た。

七

其翌日、江藤の建白書が、御前へ披露された、太政官の一室に、議論の花が咲いたのである。乍併、之には、木戸が同意して、飽までも、江藤に代つて、

『關東行幸の一條は、最初の企ての通り、一日も早く行はなければ、天下の人心を、收める事が出來ぬ』

といふ說を述べて、到頭、決してしまつたのである。が、此場合に、頗る難かしかつたのが、

『關東へ、行幸遊ばすに就ては、どうしても、東海道を通るのであるが、萬一にも、佐幕派に依つて、不穩の事が、起つた時には、どうするか』

といふのが、一問題であつた。

『愈々、御發輦の日取が決したら、それと同時に、德川慶喜、及び龜之助に對して、街道筋の警護の役を命ずる、といふ御沙汰を下せば、何事もなく、江戸へ、御安着遊ばすに、定つて居る』

と、木戸が言ひ出した。之れには、非常に驚いて、反對する者もあつた。殊に、公卿などは、眼を圓くして、

『此場合に、德川慶喜父子をして、御鳳輦の警護を命ずるとは、途方もない事だ』

といふて、頻に反對したが、木戸は、力強く、それを打消して、

『毒を制するに、毒を以てする、といふ諺がある通り、德川父子に、此役を命じたならば、却て朝廷の御爲に、身を以て、盡すに違ひない。又、其事が、奧羽諸州に聞えたならば、德川家の前途を思ふて、官軍に抵抗しやう、として居る者も、其志を飜して、却て、朝廷に親いて來るに、違ひない。若し、警護の役をさせて、此御役を勤める場合に、不都合の行ひがあつたならば、其時には遠慮なく、德川家を、取潰して了へば、差支へないのであるから、少しも憂ふる所はないのぢや。王政維新の御沙汰を下して、關東行幸の第一に、德川慶喜をして、鳳輦の御警

護を命ずる、といふやうな、大膽にして、而かも、仁慈の御沙汰が下つた、といふ事が、六十餘州に響いたらば、必ずや此一事だけでも、天下の人心は、歸服して來るに、違ひない、今更に道中筋で、不穩の風評が、ある位の事に懸念して、此行幸を延ばす、といふやうな事は、朝廷の御威光にも關するから、速に、行幸の御沙汰を、公表せられるのが可からう、と思ふ』

最初の中は、頻に反對して居た者も・諄々として、木戸が、說いて行く、其說には、遂に服して、關東行幸の事は、玆に確定したのである。

愈々、鳳輦が、關東へ向はれる、といふ事が決すると、果せる哉、道路の風評、紛々として、今にも、不逞の徒が街道筋に集まつて、意外の騷動が、起るやうな風說は、頻に夫から夫へと、傳へられた。けれども、木戸は、一旦、斯うと決した以上、飽までも遂行しやう、といふので、德川慶喜父子に對して、街道筋の警護を一任する・といふ御沙汰を、朝廷から下されたので、サア驚いたのは、佐幕派の連中であつた。火の無い所に、煙は立たぬ、といふ譬の通り若し鳳輦が、東海道筋を、下るやうな場合には之を擁して、薩長二藩の、鼻を明かして異れやう、といふ計畫はあつたのだが、意外にも、德川慶喜父子に、鳳輦の警衞を命じた、といふ事であるから、何時か、其計畫は休んで、同時に、風評が立消えと、なつてしまつた。又、慶喜父子は、此間まで、朝敵の取扱ひを受けて、謂はゞ謹愼中の身の上で、あるにも拘らず、此有難き御沙汰に接したのであるから、責任を以て、鳳輦を、無事に江戶へ、お送り申さなければならぬ。萬一、幕臣の中に、左樣な者が、あつてはならぬ、といふ所から、役目の者を奔走させて、鎭撫に着手したから、木戶が、見込みの通り、鳳輦は、少しの故障もなく、慶應四年九月に、東海道筋を、江戶表へ、御着になつたのである。

奧羽諸州の兵亂が、未だ全く鎭定しない、といふのに、鳳輦が、江戶へ御着になつた、といふ事は、德川贔屓の、江戶つ子を初め、關東人の膽に銘じて、形にそれとは、明かにはなかつたが、人心を、慰撫する上には、非常な效力

があつた。朝廷に於かせられても、極めて其點に、御注意なされたので、高輪の泉岳寺に、葬むつてある赤穗義士の墓前に、勅使を遣はされて、有難き御沙汰を傳へられた、といふやうな事は、片贔屓の江戶つ子を、著しく感激させた、といふ事だ。

併し、此時には、未だ江戶を、帝都にする、といふ事は、決して居なかつた。一旦、京都へ、還幸遊ばされて、更に翌年三月に・行幸遊ばされてから、初めて、玆に江戶を、東京と改めて、大日本國の帝都と、いふ事に決したのである。之までに、迅速な進捗の着いたのは、木戶、大久保の二人の盡力は・最も多かつたには違ひないが、遷都の事に就ては、前にも、言ふた通り、江藤の建白が、原因を爲したものである。

薩長藩情と大村の死

一

村田が、朝命を奉じて、關東へ、下つた時には、大村益二郎と、いふて居た。上野に立籠つた、彰義隊を、唯一日の中に時間を限つて、攻落した戰略は、大村が、立てたものであつて、表面の大參謀は、西鄕であつたが、實際は、大村が、之に當つて、彰義隊を、一掃してしまつたのだ。

是が爲に、江戸市中に、潜伏して居た、幕臣も、手の出しやうが無く、多くは奧羽方面へ、落込んで行つた。それが、軈て、奧羽諸藩が、聯盟して、薩長二藩を、憎むの餘りから、朝敵の名に甘んじて、大きい戰ひと、なつた時に、何れも一方を受持つて、官軍を惱ました。

奧羽の戰ひは、會津の落城と、長岡藩の一頓挫に依つて、やうやく終熄し、天下は、再び太平の昔に返つた。けれども、函館には、榎本釜次郎、大鳥圭介、松平太郎等の、幕臣が、立籠り、征討總督として、黑田淸隆が、其對手に、なつて居たのであるが、是は、何れ程、奮鬪した所で、大勢の上に、關係の無い戰さで、僅に北海の一部に於ける、小爭鬪に過ぎなかつた。

幾度か、危い橋を渡つて、無理にもせよ、押付けて來て、手品の種は、人に知られず、何うか、斯うか、天下は、薩長二藩のものに、なつてしまつた。伏見鳥羽の戰ひが濟んでから、薩長土肥と稱して、土州と佐賀の二藩が、加はつて來た。併し、それは、名義だけの事で、其實は、矢張り薩長二藩が、思ひ通りに、政府の組織から、政治の方針まで、立てゝ行くのであつた。

勢ひに任せて、薩長の二藩が、切つて廻はす、それに對しては、多くの人が、頗る不滿に感じたけれど、兎に角、維新の大業は、二藩の力に依つて、成し遂げられたのであるから、假令、二藩の遣口が、專橫に流れても、さうひどく、批難する事は出來ず、二藩の人達は、思ひの儘に、明治政府の、實權を握つて、勝手な振舞をして居た。一時は、各藩の不平から、何事か起りさうであつたが、兵馬の實權を握つて、天下の事を、行ふて居る、二藩の力で、壓へ付けてしまつたから、何れも物にならずして、立消えの如き姿になつて、日本の國を起さう、と、また、寢かさう、と、二藩の力に依つて、何うにでもなるやうな、形勢に、なつてしまつた。

一口に、薩長二藩といふて、維新の功勞を、同じやうに誇つては居るが、實際に於ての武功は、薩藩にあつて、長州藩は、薩藩の後から、附いて行つた、といふやうな傾きがあつた。

けれども、長州藩は、最初から、勤王討幕の一點張りで、進んで來たので、其間に、岐路へ外れた、といふやうな事は無かつた。是が爲には、幕府から、征長軍までも向けされて、一時は、非常に苦しんだが、それを忍んで、押通して來た、といふ所に、長州藩の誇りはあつた。薩藩に至つては、長州藩と、違つた所があつて、齊彬の死んだ後に、久光が、專ら藩政を、握つて居たので、動もすれば、藩論が、佐幕に傾きかけた、といふやうな事情があつて、思ふやうに、働きは出來なかつた。幸にして、大久保、西鄕といふが如き、偉い人物が、出て來た爲に、纔に藩の立場も、左まで見苦しい事にならず、維新の大勢を、定むる上に於ても、薩藩の力は、長州藩に、優るとも、劣らなかつた、といふまでに、漕ぎ付けたのは、偏に二傑の在つた爲であつて、薩藩の働きとは、いふやうなものゝ、實は、二傑の働きであつた。

斯ういふ事情で、ある所から、自然、二藩の間に於ても、多少の軋轢があつて、愈よ明治政府が、出來てから後は、

其暗闘は、始終、續けられて居たのだ。昭和の今日になつても、薩長の二派が、互に爭ふて居る。それは、此時代から、芽ぐんで居た事で、維新の殘物が、すべて死に絶えぬ限り、此暗闘は、容易に止むまい、と思ふ。

維新の際、武功に於て、長州藩が、薩州藩に、幾分か劣つた、といふばかりでなく、新政府が出來てからも、薩藩には、大久保と西郷が、並んで進んで來るのに、長州藩は木戸が、只一人であつたから、何うしても、其權衡が取れなかつた。

後には、山縣や、井上、又は伊藤と、指を折つて來れば、立派な人物も在つたが、其當時に於ては、第三流以下に、數へられて居た人々で、なかなか西郷や大久保と、太刀打の出來るやうな事は、なかつたのだ。啻に、西郷、大久保に對して、太刀打が出來ぬばかりでなく、木戸と、肩を列べて進む、といふ事さへ、出來なかつたのであるから、人物の權衡が取れなかつた、といふ事が、薩藩の勢力になつて、長州藩の勢力が、自然、それに壓へ付けられる、といふ傾きがあつた。僅に大村益二郎が、居た爲に、長州藩の軍人は、息を吐いたのだが、それとても、西郷に對抗して、大村が、陸軍の全體を、壓へて行く、といふ事は、出來なかつたのである。其智謀と、學識に於ては、縱令、西郷以上の大村である、としても、人物の大小を、比べて行けば、等級が違つたのであるから、迚も、對等の相撲を、取る事は出來なかつた。從つて、陸軍の勢力は、薩藩の爲に專有されて、長州藩の如きは、何事に付いても、薩藩の尻に、附いて行く、といふ外は、無かつたのである。

長州藩の如きですら、それであるから、他の藩に至つては、殆ど問題にならなかつた。佐賀藩から、出て來たのは大隈、大木、江藤、副島の四人であるが、大久保、木戸、西郷の三人と、太刀打は出來ない。土州藩からは、後藤、板垣の二人が、出て居たのだが、是とても、藩長の三傑を、向ふに廻して、大に爭ふ、といふだけに、實力を有つて居なかつた。況して、それだけの人物すら、有つて居なかつた。他の藩が、薩長二藩に對して、對等に進んで行く、といふやうな事は、夢にも見ることは、出來なたつたのである。

權力の相違から。偶頗な事が行はれるので、これに對して、不平を抱くものは、聯合して立向ふ、といふ傾きがあり、新政府になつてからの當座は、相應に、内部の紛紜は、あつたものと見て、差支へない。

二

新政府が出來て、それぞれに、賞典祿を賜つた。維新の功勞に對する、御褒美といふ意味もあるし、又、是から先の食祿を取極める、といふ意味もあつて、總花同樣に、振撒かれたのであつた。重立つた者が、賞典祿を、與へられたに付いて、其割振を、茲に揭げて見やう。

五千石　三條實美、岩倉具視
千八百石　木戸孝允、大久保利通、廣澤眞臣
千五百石　中山忠能
千石　正親町三條實愛、大原重德、東久世通禧、小松帶刀、後藤象二郎、岩下左治衞門
八百石　澤宣嘉
四百石　田宮如雲、福岡藤次、中根雪江、辻將曹
百石　江藤新平、土方楠左衞門、島義勇

其他、幾百人といふ、澤山の人に、それぞれ等級はあるが、御賞典があつた。併し、復古功臣と稱へて、早く言へば、文勳ある者としての、御沙汰であつた。

又、武功ある者に對しては、

二千石　西郷吉之助
千五百石　大村益二郎

千石　吉井友實、伊地知正治、板垣退助
八百石　大山綱良、由利公正
七百石　黒田清隆
六百石　山縣有朋、前原一誠、山田顯義

同じ賞典祿でも、永世と、終身の二つに、區別されて居たが、兎に角、此總花は、巧に振撒かれたので、左までに、不平は無かつた。祿高にこそ、多少の相違はあつたが、武勳の上に於て、西郷と大村が、互に相並んで、莫大な賞典祿を賜る事に、なつたのは、薩長の武功を、代表する意味からであらう。

大體の上から見れば、薩藩出身の者は、榮華に誇る傾きがあつて、長州人が、それに對する、不平は、一通りでなかつた。けれども、同じ長州人の間でさへ、不平は、絶えなかつたのであるから、薩藩に向つて、其不平を洩す、といふ事は、出來なかつたのである。

維新の際に、立後れとなつたり、或は、國詰の名の下に、取殘されて、討幕の大業に、與り得なかつた爲に、論功行賞に漏れた、連中は、長州藩の中にも、澤山あつたのだから、それ等の人は、非常に不平を抱いて居た。中央に出て居る、長州人が、國許に居る、長州人の不平を、鎭撫しやう、として、苦心した事に、非常であつた。所が、薩藩の方にも、それと同じ事情で、内部の不平に、苦しんで居る、先輩は、少なからず有つた。

藩と藩の爭ひばかりでなく、又、藩主と藩臣の間にも、感情の行違ひがあつて、紛紜ついて居たのだから、可笑なものであつた。

島津久光が、大久保に送つた、書面の中に、

『汝は、余の家來でありながら、朝廷から、從三位を戴いて、それに甘んじて居るのは、何事であるか』

といふ意味が、書いてあつた位だから、況して、西郷の正三位には、非常に立腹して居たのである。怒る久光に、無理があるのはいふ迄もないが、併し、久光は、家來が、自分より上の位置になる場合、主人に、一應の申出もなく、直に御受けしてしまつた、といふのを以て、甚だ不臣の至りである、として、怒つたのだ。是が爲に、海江田信義が、態々、久光の内命を含んで、東京まで、大久保と西郷へ、談判に來た。流石の西郷、大久保も、餘りの馬鹿々々しさに恐縮して、海江田の對手に、なる事も出來ず、勝安房に頼んで、海江田を、巧く說き付けて貰つて、國許へ追返した、といふ事があつた。

所が、西郷は、流石に偉かつた。一度は、此賞典に與つて、有難く御受けはしたが、直に辭表を出して、國許へ歸つた。『自分は、僅な功を樹てた爲に、空前の御沙汰まで蒙つて、最早、一身の上に於て、何の望みも無い。加之、是から先の事は、自分等の力を以て當る、といふよりは、後進の人の爲に、途を開いて、新しい考へを、有つた人達に、やつて貰ふのが、却て天下の爲になる』といふ意見から、其職を辭して、國へ歸つたのだが、それは、世間へ對して、いふた迄の事で、其實を言へば、國許に殘された、士族の不平を抑へる、といふのと、新政府になつてから、情實因緣に依つて、事が、公平に取れない、といふ、それを見て居るのが、厭になつた爲に、辭職してしまつたのである。

何れにしても、其中の理由の一つを、實として見て、考へた所で、此際に、西郷が、身を退いたのは、實に立派な事であつた。

西郷が辭職して、國へ歸つた切り、出て來ない、となれば、薩藩の勢力の上に、非常な影響を有つのであるから、そんな事を、薩人が默つて、見て居る譯はない。忽ちにして、西郷を、引出しては來たが、一時は、さういふ事も、あつたのである。

三

大村益二郎が、兵部大輔になつた。其頃の兵部大輔は、今で言ふと、參謀總長といふ格式で、實際に於ては、陸軍卿以上に、勢力を有つて居たのである。薩藩出身の豪傑連が、殆ど陸軍部内を、占領して居た時代に、大村が、長州藩から出て、此任に就いた、といふ事は、全く大村の手腕を、薩人の方でも、認めて居たから、之を拒み得なかつたばかりでなく、長州藩としては、大村を、此重要の位地に、留めて置かなければならぬ、必要があるので、斯ういふ事に、なつたのである。

學問は深く、智慧はあつたし、徒らに强きをのみ誇る、軍人の中に於ては、大村のやうな人物が、獨り毅然として、立つて居ると、殊の外に、目立つたものである。人は、目前の出來事に付てのみ、騷いで居る時に、大村は、もう十年後の事を、考へて居た。陸軍の軍制を定め、徵兵令を發して、四民皆兵の制度に、改めてしまはう、といふ考へを、既に有つて居た。

板垣退助が、士の常職を解いて、四民皆兵の制度に、改めなければ、德川幕府を倒して、王政復古にした、甲斐が無い、といふ意味の建白をした。其以前に、大村は、既に實行す可く、計畫して居たのだ。

板垣の建議と、大村の考案を、いづれが先であるか、といふ事は、敢て詮索する必要はない。兎に角、あの位の人になると、知識の上にも、大した違ひが無い。同じ時代に、同じ事を考へて、兵制上に、大變革を加へやう、としたのが、甚だ妙である。

大村の智は、既に時代を、超越して居たから、舊弊の頭を、有つて居る奴から、ひどく目差されて、啻に厭がられるのみならず、ひどく之を憎んで、極端の手段を以て、排斥を計る者が、出て來る、といふやうな事は、是までにも、多く例のあつた事で、大村が、四邊の事情や、頑固連の反對に頓着なく、陸軍部内を改革し、兵制の一新を、斷行しやうとした事は、一部の頑固連には、ひどく憎まれて、大村を斬れ、といふ聲さへ、聞くやうになつて來た。

木戸が、訪ねて來る、といふので、大村は、心待ちに待つて居た。燈の點く頃になつて、木戸は、やつて來た。

『木戸樣が、御出でになりました』

『ウム、さうか、是へ御通しをせい』

暫くすると、木戸は、案内されて、客間へ通つた。

『ヤア、もう少し、早く來る積りぢやつたが、長尻の來客で、存外に、遲れて相濟まぬ』

『是といふ用事も無いのぢやから、今宵は、長く待たせられても、差支は無かつたのぢや』

長州藩の人物も、多く居たが、大村を對手に、互角に話し合ふものは、木戸のみであつた。

『用事といふのは、何事か』

『イヤ、外の事でもないが、實は、頃日來から是非、一度會ふて、相談して見たい、と思ふて居た事は、澤山にあるのぢやが、マア、それは緩り話す事として、取敢ず、注意までに言ふて置きたいのは、貴下が、智慧に任せて、何事も、思ひの儘にやつて、退ける。其遣口が、少し走り過ぎて居るやうに思はれて、何分にも、危なくてならぬのぢや、周圍の事情を省みて、徐に進むやうにしたら、何うぢやらうか。左たきだに、猜疑嫉妬の甚しい輩は、貴下に對して、甚だ穩かならぬ事さへ、口走つて居る。俺の耳へも、その蔭口は、這入つて居るのであるが、兎に角さう急がずとも、緩り進んで行つても、間に合ふ事ぢやから、幾分の弛みを付けて、貴下の考へた事を行ふやうにせぬ、と、諺に所謂、禍は障墻の中にありぢやから、それを、第一に言ひたうて、今日は、會ひに來たのぢやよ』

木戸の注意を、大村は、頻に肯きながら、聽いて居たが、

『御配慮は辱ないが、併し、幕府を倒して、新政府の基礎が、まだ定まらぬ今日であれば、改革といふよりは、寧ろ是より始める、といふ方が、適切であらう。從つて、頑迷不靈の徒には、氣に入らぬ點もあらうが、そんな事には頓着なく、ドシ〳〵やつ付けてしまはぬ、と、迚も、政府の組織は、完全に出來るものでない、殊は、唯强い

事のみを、自慢として居る、陸軍の組織などは、一層、さういふ傾きがあるのぢやから、此際には、唯一と息にやつ付けてしまふのが、上策ぢや、と思ふ』

と、言ひ終つて、大村は、意氣昂然として、木戸の注意には、更に頓着せず、ニヤリと笑つて、木戸の顔を見た。

『流石に、貴下ぢや。それまでに、覺悟してやらつしやる、といふ事は、固より惡くはないのであるが、併し、詰らぬ妨げの爲に、大事を誤るのも、餘り褒めた事でなからう。其邊には、御如才もあるまいが、切に御注意して欲しいのぢや』

『折角の御配慮ぢやから、承つて置く。併し、大村には、大村式といふのがあるから、マア、見て居て下さい』

大村の決心が、玆まで進んで居て、多少の障礙に頓着なく、平生、唱へて居る、陸軍の組織を、純粹の西洋流にしてしまはう、と、堅く決めて居るが、よく判つたから、此以上は、木戸が進んで、何を言ふた所で、何の甲斐もあるまい、と、見て取つて、此話は、木戸の方から、控へてしまつた。

今日になつて考へれば、木戸が、是までに心配して、大村に注意したのは、無駄な事ではなかつた。大村の最期を視れば、木戸の懸命が、どこにあつたか、といふ事が、想像し得られる。

朝鮮に關する紛紜は、明治六年まで、引つゞいて解決しなかつたが、それ迄に、政府部內では、相當に研究をして交陟に、少しも手拔かりは、なかつたのであるが、何分にも、朝鮮政府が、頑强に突つ張つて居るので、いかんとも仕やうがなかつた。此事については、木戸が、一番に力を盡して居たのである。

各藩の勢力を、均等にする必要があるとか、或は、薩長の暗鬪を緩和しなければならぬ、とか、內面的には、種々の問題もあるが、それよりも大切な事は、朝鮮に對する、條約問題であつた。之れについては、各人が、感情を抑へ、すべての力を一つにして、その解決を、急ぐ可きである、と、木戸の考は、殆んど此一事に、傾注されて居た。

木戸が、大村を訪ねて來たのは、矢張り此問題が、主としてゞあつた。大村に對して、言ふだけの注意は、言ふてしまつたし、もう外に、言ふべきことは無いのだから、そこで、此問題に、移つて來た。

『時に、大村さん。例の朝鮮の一條ぢやが、何とか處置を付けてしまはぬと、後日に、煩ひを遺すと思ふから、それに、就ては、貴下の奮發を願ふ外はないのぢや。一と通りの書類は、廻して置いたが、見て吳れたかのう』

大村は、輕く肯いて、

『書類は、よく見たが、朝鮮政府の返答は甚だ以て怪しからぬ事ぢや』

『サアー、其怪しからん事を、仕向けて來たのも、詰りを言へば、此方の內兜を、見透して居るのでもあらうが斯かる事は、打棄てゝ置けまい、と思ふ』

『併し、木戸さん、打棄てゝ置けぬ、と言ふて、何うする積りか』

『何うする、といふて、外に方法も無いのぢやから、兎に角、正式の談判を、開いて見る外はあるまい』

『談判を開いて、當方の申條が、容れられぬ時は、何うする積りか』

『其處が、相談ぢや、無論さうなつた、曉は、國の面目としても、一戰を試みるの外は無いが、俺は、一個の文官として、立つて居るのであつて、兵馬の權に就ては、何等の關係も無いのぢやから、貴下の奮發を賴む、といふのも、其處にあるのぢや』

『フヽム、それぢや、朝鮮政府と、戰さを始めよ、と、いふのが』

『マアー、其處まで行かなければ、此事件は、落着を告げまい、と思ふ。又、一戰を試みても宜からう、と、思ふのぢや』

『それや、折角ぢやが、今、外に向つて、兵力を費す、といふ事は、面白くないやうに思ふ。國內が、漸く治まつたといふやうなものゝ、まだ到る所に、新政府へ對する、不平の徒が、潛伏して居て、何時、何ういふ騷ぎが、始ま

らぬといふ、限りも無い。敢て、それを恐れる、といふ譯ではないが、今俄に、外へ對して、兵力を分ける、といふのは、面白くない』

平生の大村にも似合はず、今日に限つて、頗る弱い言を吹くので、木戸は、甚だ不快に感じた。此事に就ては、一も二もなく、同意して呉れる、と思つて、やつて來て見れば、案外に、斯う言ふ答へであるから、頗る面白くなくは思つたが、尙ほ一押し、押して見よう、といふ氣になつて、膝を立て直した。

『實は、朝鮮政府が、無禮な返答を致した、といふだけに就て、此軍を起さう、といふのではない。某外にも、理窟が、あつての事ぢや。恐らく貴下も、俺と同じやうな考へであらう、と思ふから、一應、述べて見やう』

木戸が、斯う言ひ出したから、大村も、膝を進めた。

四

幕府を倒して、明治政府は立てたが、それは一時の勢ひに乘じて、巧に遣り遂げた。といふだけの事であつて、眞に天下の人心が、未だ新政府に、歸服して居る、といふ譯ではない。啻に、それのみならず、諸藩士の間にも、なかなか不平の徒があつて、動もすれば、不穩の形勢が、現れて來る、失意に、暮して居る藩の連中が、不平を懷くのは未だしもだが、現に、政權を握つて、全盛に誇つて居る、薩長二藩の者さへも、不平を懷いて、何うかすると、政府に反抗するやうな、氣勢を示して居るのだ。是は隨分、變な話ではあるが、段々打割つて、其事情を知れば、無理の無い事だ、といふ點もある。

といふものは、維新の際に、立遲れとなつて、兵亂の巷に、立會はなかつた連中は、國許に、留守番して居たのであるから、論功行賞の頭數には、入れられて居なかつたのだ。

縱令、其場に掛かり合はさないでも、國許に居て、後顧の憂ひを、無からしめた功は、相當にある。それ等の者は

更に顧みられず、僥倖にして、兵亂の巷に出入した、といふ者だけに、恩賞の御沙汰があつた、といふ事は、甚だ不公平である、といふ議論もあつた。又、一時の恩賞は受けた、が、直に暇を賜つて、國へ追返された、連中もある。それ等の人も、同じやうに不平を、言ふて居るのだ。詰り、褒美を貰つて居る者では、其高下の別をつけられたに就ては、銘々勝手な熱を吹いて、自分天狗の不平は、有つて居る。さうした連中が、動もすると、愚圖々々言ひ出すので、之を抑へるに就ては、政府に立つて居る、薩長の先輩も、苦心して居たのだ。木戸なども、獨り胸を痛めて、一夜寢ずに考へた事もあつた。

さればとて、今更に、不平を言ふて居る奴を、悉く引出して、役人にする事も出來ず、名義がないのに、追賞してやる、といふ事も出來ない。何とかして、逃途を造らなければ、內亂を釀す恐れがある。此事は、木戸ばかりでなく其外の者も、考へて居たのだ。木戸は、それに就ても、朝鮮征伐の必要はある、と、心ひそかに思つて居たが、今日は、大村を動かさう、として、やつて來たのである。

『朝鮮政府には、猶ほ一應の談判をして、不調になつた上は、征韓の軍を起し、不平の連中を引出して、相當の功名をさせ、後日の不平を抑へやう、と思ふのだが、是は世間へ、公に言へぬ事であるが、俺は、左樣いふ考もあるのぢや。貴下の意見は、どうかな』

聽いて見れば、一應の理窟はある。大村とても、絕對に惡い、とは思はなかつた。

『ウム、よく解つた。さういふ次第なら、篤と考へさせて、貰ひたい。やるにはやるやうに、遣方があるのぢやから朝鮮國の一つや二つ、取つてしまふ、に、手間暇は要らぬが、それから先の關係を、考へて見ると、迂濶に、手を出して、拔差のならぬやうな事が出來ては、一大事ぢや。詰り言へば、秀吉が、征韓の軍を、起した事情も、大方は、今日の事情と、相違は無からう。併し、秀吉の如き者ですら、あの通りの始末であつたから、我々は、其轍を踐まぬやうに、考へねばならぬ。甚だ姑息のやうではあるが、今暫く、熟考の餘地を、與へて貰ひたい』

『今、此處で、極めなければならぬ、といふ事ではないが、併し、兎に角、宗對馬守の手を經て、既に交渉は、いくたびも、開いて居るのぢやが、その答へは、御承知の通りで、殆んど我國を、無視して居るから、どうせ、圓滿の解決はむづかしいもの、と、思はねばなるまい。然る上に、一日も早く、落着を付けてしまはぬ、と、取返へしのつかぬ事にもならう、と思ふ』

『宜し、其積りて、考へて見やう』

其日は、それで別れたが、大村の考へは、木戸に別れてから後に、征韓を決して居たのだが、容易に、さう決した、といふ事を、言ふて來ないのは、其以前に於て、陸軍の制度に、一大改革を行はう、といふ考へが、あつたからである。

思へば、朝鮮國も、隨分、因果な次第で、昔は、秀吉が、應仁以來の亂を治めて、天下を統一した迄は、極めて順調に、進んで行つたが、愈々、太平の世に、なると、武功に誇る、連中が、不平を言ひ出すから、それを押へやうとして、遠く征韓の軍を起して、鷄林八道を、手に入れて、之を不平連に、分けてやらうの考へから、あんな事を始めたのだが、今度も亦、それと同じやうに、不平の徒を、抑へる爲の一策として、朝鮮征伐をやらう、といふ、是はホンの内情の一部ではあるが、縱令、内情にもせよ、斯うした考が、征韓論の理由の、一つであつたとすれば、朝鮮國こそ好い面の皮である。併し、此一事は、歴史的に、何等の根據もなく、傳説を基礎として、興味的に述べたのであるから、そのつもりで、讀んで欲しい。

木戸の考が、何れ程、征韓論に、進んで居ても、大村が、同意して吳れなければ、纒まりは付かないのだ。されば木戸から、話し込んだ事に就て、何とか、返辭の來るのを、待つて居た所へ大村の書面であるから、開いて見ると、斯ういふ意味が、書いてあつた。

『此頃、相談の一條に就ては、應に承知した。必ず貴意に基いて、例の事は、實行の運びをつけるが、併しそれに就ては、軍制の改革を、先にする必要があるから、外へ對する事も必要だが、内に對する事は、尙更必要であつて、此際、直に運びをつける事は、出來さうもない。尤も、さう長くは掛らずに、此方の仕事は、運ぶ積りであるから、其目鼻が付いたならば、直にも着手するから、決して心配をして吳れるな』

木戸は、此手紙を讀んで、漸く胸を撫で下した。大村が、是れ位に乘込めば、一と安心であるから、縱令、半年位は、不平の連中が、八釜しく言ふても、それを抑へる位の事は、何でもない。唯、木戸の心配は、兎に角、幕府を倒して、未だ幾年ならず、新政府の基礎も、固まらない上に、四方から、不平の連中が起つて、内訌に日を送る、といふやうになれば、御上へ對しても、洵に相濟まぬ次第である。と思ふ所から、色々に苦心して居るのであつた。

又、朝鮮政府が、我政府へ對して、甚だ無禮の態度を示すから、一氣に攻め付けてしまつて、我國の武威を、示して置く事は、今後、支那なり、露西亞なりに對する、對外策としても、必要である、と考へて、それで、大村を動かさう。としたのだ。所が、大村も、其決心になつて吳れた、といふから、木戸も安心して、其時期の來るのを、待つて居たが、不幸にして、此事は、大村の横死に依つて、中止するの、止むなきに至つた。

五

大村が、兵制改革の意見は、全然、從來の古い遣方を廢めて、式を、世界に則り、さうして、西洋風のものにしてしまはう、といふのであつたから、無論、其時代の事とて、反對する者は、多くあつたのだ。併しながら、大村は、そんな事に頓着なく、舊來の兵制は、無遠慮に打破つて、西洋式の陸軍を、組織してしまはう、と考へたのである。

何れの時代でも、同じ事だが、長い間、慣れて來た事を變へる、といふのは、容易ならぬ事で、必ず舊式を守る、といふ方には、存外に勢力があつて、容易に新しい事を、行ひ得ぬのが、先づ一般の傾向である。それを、無頓着に踏破つて行かう、といふのであるから、なか〳〵骨の折れたのも、無理は無い。

先づ、それをするのには、兵學寮を起して、新しい知識の、軍人を養ふ事が、第一である。といふ事になつて、兵學寮を、設ける場所を、何處にするか、といふのが、難しい問題であつた。

大村は、それに就て、京都を選んだのである。今や　陛下は、江戸へ、御遷り遊ばして、長い間、帝都に定められし、京都は、人の心までも淋しくなつて、元來が、靜な都として、聞えて居た所だけに、一層の淋しさを、感ずるほどであつた。之に對する。繁昌の策を、講じてやらなければならぬ、といふ考もあつて、兎に角、京都へ、兵學寮を、設けるのが至當である、と、大村は、殆んど獨斷的に、定めてしまつたのであるが、これに對する、不平の聲は、閣僚の中にはなかつた。

もう一つの理由は、全體、京都の人は、保守頑迷の氣風があつて、何事も、舊慣を墨守して、進取の氣象に乏かつた。從つて、攘夷論の如きは、非常に歡迎されて、明治の世に、なつたにも拘らず、尙ほ京都には、異人の足を、踏込ませないなどと言つて、頑張つて居た者も、あつた位だ。そんな事で、紛紜いて居る中に、陛下は、東京へ、御遷りになつてしまつた。詰り、鳶に油揚を攫はれたやうな形であつたが、それでも、未だ眼が醒めないで、昔の攘夷論時代を、夢みて居たのである。

其處へ・兵學寮を設けて、大に西洋流の、兵事思想を注込んで、段々と、京都人の氣風を、世界的にして行く、といふ事が、軈て、排外思想を、棄てさせる原因にもなるだらう、といふのが、大村の考であつた。

乍併、さうした理窟は、京都に、兵學寮を設ける、といふ、正面の理由には、ならないのであるから、陸軍部内に、起つて來る、新しい兵制に就ての反對には、大村も、非常に苦心して、不平を抑へ付ける事に、掛つて居たのだ。

偶々、木戸が訪ねて來たから、此事を話し出す、と、

『俺も、其事は聞いて居た。陸軍の中にも、故障を言ふ者があつて、大村は、怪しからんといふ聲は、屢々、耳にして居たが、段々、貴下の說を、聽いて見れば、大きに道理であるから、多少の反對があつても、押切つて、やり遂

げたならば、必ず貴下の見込通り、良果を收める事が、出來るだらう、と思ふ。俺も、及ばずながら、內閣の方は、纏まりを付ける事にしよう』

と言はれたので、大村も、頗る乘氣になつて、何うか、斯うか、西鄕を說き付けて、承知させてしまつた。西鄕は、西洋の學問はなかつたが、世界の趨勢は、よく解つて居たから、大村が、一と通りの說明をすれば、それで、直に理窟は解る人だ。薩藩出身の、若い連中が、幾ら騷いだ所で、西鄕が、承知してしまへば、他の者が、何う愚圖々々言つた所で、大丈夫である、と、大村は、堅く信じて、其準備に掛かつたのである。

當時の、兵學校長、原田一道が、京都へ先發する事に決して、乃木希典、小川又次、兒玉源太郎以下、百名餘りの生徒を率ゐて、上京する事になつた。明治大帝の御跡を慕ふた、乃木大將や、大阪の師團長として、日露戰爭に、勇名を轟かした、小川や、又、兒玉のやうな人が、其生徒の中に、あつたのだから、實に面白い。

大村は、少し遲れて、明治二年の八月十日に、京都に着した。

木屋町二條下る處に、藩の控屋敷があるので、それを宿舍に宛てあつた。

翌日から、地所の檢分に掛かつたのだが、大村の奔走は、實に驚くべき程で一緖に附いて、行つた者さへ、終ひには閉口した位であつた。

伏見を首めとして、宇治、八幡、山崎方面を、蒸すが如き、八月の災天に、鞋掛けで、檢分して歩いたのだから、隨分、骨も折れたらう。檢分を終つて、京都へ、再び歸つて來たのが、九月二日であつた。

それから、三日間を休養するにして、大概な來客は謝絕して、腹心の者を對手に、調査をつゞけてた。原田は、大村の手傳をして、兵學寮設置の土地も、大凡は極つて、直に着手するまでに、運んで來た。

原田が、歸つた跡へ、藩の大隊司令、靜間彥太郎と、兵部省作事取締の吉富音次郎が、加賀出身で、英學教授方をして居た、安達幸之助を、伴れて來たので、それ等の人を、話對手にして、計畫の事なぞを、話合つて居るうちに、

酒肴が運ばれた。

大村は、地圖を披げて、一ぱい飲んでは考へ、考へては、筆を取つて、書入れる、といふやうな工合で、來合はせたものは勿論次の部屋に、見て居た從者も、その精力の強いのには、唯驚くばかりであつた。

所へ、執次の者が、急ぎ足に、やつて來て、

『此御方樣が、御訪ねに、なりました』

名刺を見たが、少しも覺えの無い人であるから、暫く考へて居たが、

『今日は、用事が立て込んで居るから、御目に掛る事は出來ぬ。明日にも、御出で下さい、と言ふて、歸つて貰へ』

『ハイ』

と答へて、執次は、立つて行つた。大村は、次の部屋を顧みて、

『オイ』

と呼んだので、從者が、手を突いて、

『御用で、ござりますか』

『お前達も、疲れたらうから、一ぱい飲んで、寢んだら宜からう』

『有難う存じます』

『其座敷では、氣が詰つていけないから、別の座敷へ行つて、飲みなさい』

『ハツ、それでは、御遠慮なしに頂戴いたします』

『ウム、緩り寢みなさい』

そこで、從者は、離れた座敷へ行つて、酒を飲み始めた。

暮六つに近く、夜色が、迫つて來たから、家來の山田善次郎は、燈火の仕度にかゝつた。

『頼む』

『どーれ』

『大村先生に、御意を得たい』

『先生は、お二階に居られますが、貴下の御姓名は、何と仰せられますか』

『拙者は、斯ういふもので御座る』

名刺を出したから、これを受取つて、山田は、執次に立たう、として、背を見せた時、サツと、拔打に浴せられて、一と堪りもなく、山田は、そこへ倒れた。

けたゝましい足音をさせて、二階へかけ上る、浪士體のものが、三四人つゞいた。

大村は、けたゝましい物音に、頭を上げると、途端に、踏込んで來た、二三名の浪士が、刀を下げて居た。眞先に居たのは、豫て見覺えのある、神代直人であつた。

『ヤツ、神代か』

と、いふ聲も待たずに、

『ヤツ』

と、一歩踏込んで、斬付けた。大村は、坐つた儘に飛退いたが、神代の斬込む、切尖激しく、額から小鬢へ掛けて、ザツクリと、割込まれた。

『失敗た』

と叫びながら、小膝を、立て直して、床の間の刀を、取らうとした所を、飛込んで來た、神代が、横に拂つた一文字、再び飛退いたが、間に合はなかつた。膝口へ、深く斬込まれて、流石の大村も、尻餅を搗いた。所へ、神代が、三度目に斬付けたが、此時は、既に大村の手に、小刀があつたので、拔き合はす間はなかつたが、鞘の儘で、ガツテリと

受止めたので、幸に、神代の斬込んだ、三度目の刀は、避ける事が出來た。

靜間と安達は、此騒ぎに驚いて、すぐ逃げ足になつた。裏手は、鴨川に沿ふた、細い路がある。欄干を飛越えて、その道へ飛下りると、此處にも、浪士體のものが、二三人かくれて居て、すぐ斬りつけた。二人は、防ぐ間もなく、それへ倒れて死んだ。

大村を見捨て逃げた、卑怯は、この見苦しい最期となつた。吉富は、流石に感心な男で、刺客の一人、和田進を、斬つて居る。併し、自分も、重傷を負ふて倒れた。和田は、三河の浪士である。

斯んな事が始まつた、とは知らず、別の座敷で、飲んで居た、從者の連中は、座敷の方で、ドタバタ騒いで居るから、何か始まつた事か、と思ふて居る、と、其處へ、風呂番の下僕が、飛んで來て、

『た、た、大變で、ございます』

『何だ』

『だ、だ、旦那樣がき、き、斬られました』

『ヤツ、それは一大事ぢや』

と、後は聽かずに、一同は飛出した。折しも、向ふの廊下から、中庭に飛出して、垣根を飛越える武士が、二三人あるから、

『それ、逃がすな』

と、一人の者は、之を追ふて行く。

大村は、斬られて倒れる時、襖が外れて、體が、廊下へ出たのを幸ひ、裏梯子を下りて、湯殿へはいつた。風呂桶の中へ忍んで、僅に最後の襲撃を、遁れた。後の者は、座敷へ戻つて來て、御殿から、大村を、助け出して、介抱に掛かつた。

『如何でござりますか、御怪我は、何うでござりますか』

『ウム、しまふた』

『御傷は』

『斬れたよ』

と、一と言、いふた儘、大村は、自分で、繃帶をして居る。其處は、元が醫者であつたから、外の者とは違ふ。其中に、怪者の後を、追ふて行つた者も、歸つて來たが、何れも取逃した事を繰返すばかりで、何の甲斐もなかつた。

『先生、如何でござりますか、御痛みになりますか』

と、聽いても、大村は默つて、考へて居る。

『唯今、醫者を迎ひにやりましたから、もう追付け、參りませう』

『ウム』

と言ふて、矢張り、默つて居る。

『怪物の面體は、御見覺えがござりますか』

『よく知つて居る』

『何と仰しやいます。怪者を、御覽になりましたか』

『ウム』

『何者でござりましたか』

『マアー、そんな事は、何うでも宜い』

『併し、此儘にして置く事もなりませぬから、怪者の面體を、御承知だとありますならば、直に取押へなければなりません』

『イヤ、押へる譯にも、なるまいよ』
『そりや、何故でござりますか』
『其仔細は、何れ語る事にしよう』
と答へて、又もや、思案に耽るのは、何かこれには、深い仔細が、あるらしい。從者も、押して聽く事は止めてしまつた。

所へ、原田一道を首め、其他の者も、駈付けて來る。醫者も、やつて來て、應急の手當もしたが、傷は、存外に重いやうだ。

其頃の京都には、名醫と、稱された人も、澤山に居たが、何れも、舊式の醫者で、斯やうな、重い傷を、受けた揚合には、役に立たない者ばかりだ。殊に、大村は、自身が醫者であつたから、舊式の醫者を信ぜず、その手當を受ける事さへ、好まなかつた。大阪には、西洋醫者の、ボールドといふ、立派な人は居たが、其頃の京都は、異人の這入る事を、許されて居なかつたから、翌日になつて、大村は、戸板に乘せられて、大阪へ送られた。殘暑の酷しい時分であつたから、大阪へ着いた時分には、傷は、化膿して居た。名醫のボールドは、左右の者に、聲を潛めて、
『何うも、致し方が無い。洵に殘念な事を致した』
と、いつた。其一言を、聽いた時、一同の落膽は、一と通りでなかつた。斬られた方の脚を切斷したが、何分にも、手當が遲れて居たので、衰弱が甚だしく、十一月の二十日になつて、大村は、可惜、蓋世の雄才を齎して、此世を去つてしまつた。

大村が、神代の事を、遂に言はなかつた、といふのは、神代は、長州人であつて、攘夷派中、最も過激な奴である。併し、此時に、襲ふて來たのは、何人かの敎唆に依つて、來たに違ひない、とは思ふが、それを言へば、長州人同士の內訌を、薩人の爲に、知らるゝ事になるのであるから、大村は、神代の事は、一言もしなかつたのであつた。

大村は、死んだが、兵學寮と、大阪の兵器製造所は、この後に殘つた。陸軍大學校と、砲兵工廠と、これは、大村の賜といふ可きである。

大村の死に依つて受けた、陸軍の損失は、非常なものであつたらうけれども、一番に、失望した人は誰か、といへば、木戸であつた。それが爲に、折角の征韓も、遂に沙汰止みとなつて、更にそれが、明治六年になつて、再度の紛擾を釀して、是が爲に、內閣に、龜裂が入る、といふまでの騷ぎになつたのも、不思議な因緣と、言ふべきである。刺客の處分について、未だ話しもあるが、それは略した。

會津藩の苦境

一

勝が、非戰論を唱へて、踏張つて見ても、慶喜が、其說を入れなければ、行はれる筈はないのだ。所が、慶喜は、常識に富んで、悧巧な御方であつたから、早くも大局を、見て取つて、勝の說を入れ、上野の大慈院へ、引籠つてしまつた。

三代の家光が、比叡山に擬らへて、東叡山と名付け、寛永寺を建立して、御本坊を、輪王寺と名付けた。宮様を、御一方申請けて、之を法親王と、崇め奉り、代々、それに馴つた。若し、朝廷と、徳川との間に、確執を生じて、苦しい立場に、なつた時、法親王の御袖に縋つて、朝廷の御機嫌を、取り繕はう、といふ、豫めの考へがあつて、設けて置いたもので、此處は、徳川が、最後の逃場であつた。

上野の寺中へ引籠つて、慶喜は、謹愼を表して、法親王の御取成で、朝廷へ嘆願をする、といふ筋の一幕は、全く勝の入智慧であつた。

先づ、斯うして置いて、それから更に、西郷へ、面會を申込んで、其使者を勤めたのが、山岡鐵舟である。流石に山岡は、此使命を完うして、三月十三日を以て、勝と西郷が、江戸の薩邸に於て、會見する約束をして、歸つて來た。旗本の中でも、稍や骨のある、連中は、勝の計らひを以て、甚だ不快の事として、そこで、彰義隊なるものが、新たに組織されて、上野へ、引籠る事になつた。如何に江戸城の受授が濟んでも、旗本が、斯ういふ次第で、上野に籠つて居る以上、未た天下は平定したものとして、見る事は出來ぬ。彰義隊の解散には、種々、手を盡したが、どうしても、いけなかつた。

彼是する中に、會津中將容保が、奥羽諸州の諸侯を促して、飽迄も、薩長二藩と對抗する、準備を整へた。さうなつて見る、と、江戸の市中に、散在して居る、幾千といふ旗本が、今更に、弱い音を、吹いて居る事は、御直參の肩書に對しても、出來ぬのが當然である。何れも奮發して、戰ひが、此方面に於いて、愈々起きたならば、それに應じて、最後の一戰を試みやう、とする、覺悟の者が、ふえて來た迚も、此儘に棄てゝ置いたならば、何んな大事に、なるかも知れない、といふ所から、大村益二郎が、江戸へ急行して、遂に一日の戰ひに於て、彰義隊を擊攘つてしまつた。

各町々に、散存して居た、幕軍は、何處を當に集まる、といふ事も出來ず、志の固い者は、追々と奥州路を指して、落ちて行く。それが皆、會津侯を頼つて、行くものばかりであつた。

そこで、會津侯を、盟主と仰いで、奥羽諸州の大名が、官軍に抵抗する、といふ注進は、櫛の齒を、挽くが如く、一日延びれば、一日だけの害が、大きくなるのであるから、といふので、愈々、奥羽征討の軍を、起す事になり、總指揮官は、板垣退助であつた。

奥羽諸州の戰ひを、精しく話すと、なか〳〵長くなるし、木戸の本傳に、關係の無い事だから、大概にして、置くが、兎に角、會津の落城に就ては、述べて置く必要がある。

奥羽の各藩が聯盟したとは、傳へられたが、眞に最後まで、戰つた者は、會津と長岡の二藩であつた。其他の諸藩は、甚だ見苦しい態度を、執つたものもあつた。殊に、仙臺藩の如きは、あれだけの雄藩でありながら、其去就は、極めて曖昧であつた。

板垣の祖先は、甲州の武田家、二十四將の一人、板垣駿河守信形であつた。此人は、天文十年に、信州上田原の戰ひに於て、討死をしてしまつた。其前晩に、自分の子供を、家來に預けて、後事を託した。其家來が、信形の遺子を連れて、遠州掛川の山内一豐の所へ、頼つて行つた。一豐の家來で、乾備後といふ人が、それを引受けて、育てる事になつたのである。

其子が、成人して後、後繼の無い内に、死んでしまつた。山内家では、板垣家程の名家を、此儘に絶やすのは、如何にも惜しい事である、といふので、一門の中から、山内刑部一照を選んで、板垣家の相續とした。信形の子供は、乾の姓を、名乘つて居たのである。そこで、板垣家は、再興される事になつた。系圖の上からは、板垣の末葉であるが、血統の上から言へば、山内の血族と、言ふても然るべきである。

板垣は、後に政治家になつたが、若し、彼の人が、軍人として、一生を送つたら、無論、元帥になつて居たらうと思ふ。板垣は、總指揮官となつて、各藩の大兵を率ゐて、會津征伐に、出掛けて行つた。策戰は、着々成功して、到る處、疾風、枯葉を捲くが如く、戰ふ毎に、勝利を得て、だん〳〵進んで行つて、愈々、會津城へ、總掛りになつて、攻め付けた。

二

板垣の率ゐた兵が、會津へ攻めかゝる前に、三春藩の事に就て、面白い逸話があるから、それを一寸、述べる事にしやう。

當時、三春藩を首め、極く小さい大名が、何れも去就を、決し兼ねた、といふのは、何しろ、會津を主として、長岡も、それに應じて、官軍に、對抗して居るので、それが爲に、小藩の去就が、甚だ曖昧であつた。官軍に抵抗するのは、辛い事であるが、されぱとて、目と鼻の先にある、大藩に反對して、官軍に附く、といふのも、難儀の次第である。何とかして、都合よく其間を、切り抜けたいと、いふやうな、所謂、首鼠兩端を持して、曖昧の態度を、取つて居るものが、多くなつたのだ。

官軍の方では、錦の御旗を揭げて、進んで行くのであるから、少しでも曖昧な、態度を取る、藩があれば、朝敵として、攻め付ける。場合に依つては、後日に、恐ろしい御沙汰も下る、といふやうな事も、言ふて聽かせるので、大概な藩は降伏して、官軍を迎へるやうな事にはなつたが、中には、今でこそ、官軍が、此勢ひで居るが、今後、果して何ういふ風になるか、といふ事に、疑ひを有つて居て、未だなか〳〵、去就を決しない藩もあつたのだ。

卽ち、三春藩の如きも、其一つであつた。殊に、藩主が幼少で、伯父に當る者が、後見職をして居たのであつた爲に、何うしても、去就を決する事が遲かつたのが、其時に、三春在の豪農で、なか〳〵の舊家であつた所から、代々庄屋を、勤めて居た、河野某の倅、廣中が立つて、藩主の代理に面會して、順逆の道理を說いた。是が後の河野廣中である。

その時に、廣中は、僅に十九歲の一靑年であつたが、到頭、藩の重役を動かして、官軍に歸順する、といふ事に、極めさせてしまつた。所が、玆に一つ困つたのは、今まで、曖昧の態度を、取つて居た事である。官軍の方では、三春藩に對し、何處までも、朝敵としての扱ひをして來る、といふ風說が、立つて居るので、今更に、歸順した所で、後日の御沙汰が恐ろしい、といふやうな、疑惧の念を、懷く者もあつた。それを聞いて、廣中は、

『宜しい。さういふ次第であるならば、拙者が代つて、官軍の大將を、說く事にしやうから、相當の資格を、與へて吳れ』

といふ事を、申出た。そこで、廣中は、三春藩の代表者として、官軍の陣へ、談判に行く事になつた。

板垣は、三春藩が、歸順を申込んで來た、といふので、兎に角、其使者に、面會する事になつた。會ふて見ると、意外の感に打たれたのは、眉目淸秀の一靑年が、藩の代表者として來たのであるから、『斯んな小僧が、何ういふ譯で、

藩の代表をして來たのか。頗る疑はしい』とは思つたが、段々、話し込んで見ると案外にも、靑年の言ふ所が、條理整然として、一點の疑議を、挿む隙がなかつた。

板垣に向つて、廣中が、斯ういふ事を、言ふたのである。

『三春藩が、今日まで、歸順の意を、明かにしなかつたのは、藩主が、未だ幼年であつて、前後の分別がない。それが爲に、後見職になつて居た者が、藩臣の間を、纏める爲に、彼是して居たので、時日が遷延したゞけの事であつて、歸順するといふ事は、初めから極まつて居たのだ。所へ、官軍が、進んで來たのであるから自然、其旨を屆出でるのが、遲くなつたのである故、其儀は、御赦しを願ひたい』

と、いふのであつた。

板垣は、只見る、一箇の若桒としか思へぬ、一靑年が、辯舌も爽かに、何の恐れ氣も無く、官軍の陣門に來つて、此一見だけの說を述べるのは、如何にも感心の次第である、と思つて、縱令、藩の態度に、今迄に伺うあらうとも、此一靑年に免じて、三春藩を救つてやらう、といふ考へになつた。然るに、廣中は、尙進んで。

『就きましては、三春藩に對しまして、後日、朝廷の御叱りが、ありませぬやう。貴下から、然るべく御取成しの儀を願ひたい』

と、言ふので、板垣は、益々感心した。廣中の乞ひを容れて、三春藩を、救ふ可く約した。併し、板垣も、然る者であるから、

『それ程に、お前の方で、朝廷へ對して、歸順の意が、最初から、あつたのであるといふならば赤心を現はす證據として、會津征伐に就て、先手を承はれ、それが出來ぬ以上は、今までの誠意も、認める事が、出來ぬやうにならう』

と言うたら、廣中に、卽座に答へた。

『宜しうござります。其仰せは承知仕つた』

三春藩は、愈々歸順して、官軍の先手となつて、會津城へ、攻め掛かる事になつた。

明治六年、板垣が、政府を退いて、民選議院設立の建白で、騷ぎ出した時分に、廣中は、國許に居て、中央へは、出て來なかつた。それを說付けたのが、筑前の頭山滿であるから、話は益々、面白くなるのだ。當時の頭山は、自由民權の議を、主張した人であつて、全國周遊の時、三春に立寄つて、河野に面會した。其時に、河野と板垣の關係を知つて、頭山が、諄々として、河野を說いて、

『維新の際に、それだけの關係を、有つて居た、板垣は、今や、藩閥政府を倒さう、といふ爲に、民選議院設立の建白をして、自由民權の爲に、遊說して居るのだ。此場合に、お前が、板垣を助けない、といふ法は無いのだから、是非、中央へ出て、板垣と共に、進退を同じうせよ』

といふ、勸告をしたので、河野も、其氣になつて、乘出して來た、それが、國會請願者として、河野が、人に知られた原因である。

三

會津藩が、如何に強くとも、朝敵の汚名を、蒙つた上に、而も、目に餘る官軍が、四方から包圍して來たのでは、何うする事も出來ない。縱令、連戰連勝の勢ひが續くとしても、限りある兵力を以て、長く其勢ひを保つ事は、決して出來ぬ。況して、一勝一敗は、戰ひの常であつて、勝ちつゞけても、長く續き得ぬ、兵力が、或は勝ち、或は敗けたりして居たならば、日に益々、力が衰へて行く、といふのが、自然の理である。

尤も、長岡藩が、非常な働きをして、官軍を、惱まして居たから、越後口から、攻込んで來る、官軍を防ぐ事は、長岡藩の努力に依つて、辛うじて、出來たのである。けれども、河合繼之助が斃れて、長岡藩は、總潰れになつた。賴みに思ふ、長岡藩の連中は、會津へ落ちて來る、といふやうな事になつて、今や會津藩は、天下の大兵を引取けて

籠城するの外はない、といふ、悲境に陷づてしまつた。

河合に就ても、話せば長くなる。今は、それを物語つて居る場合でないから、略して置くが、當時の河合が、目に餘る、大軍を引受けて、越後口に、官軍を防いだ時の武者振は、千古に傳ふべき程、立派なものであつた、越後口から進んだのが、山縣有朋であつた。長岡藩の、頑強な防戰には、殆ど持て餘したといふことである。

河合程に、戰爭の大局に就て、活動はしなかつたが、桑名藩から、落延びて來た、立見尚文が、何時の戰ひにも、官軍を苦しめた、といふ事も、傳へて置く。當時、立見は、二十歳になつた位の、若者であつたが、戰さの巧かつた事は、實に驚くべきほどで、河合と、東西相應じて、官軍を挾撃つて、屢々、山縣を苦しめたのである。

或時の戰ひは、山縣は、十分の勝利を得て、先づ一息と、參謀を率ゐて、草原の上に、休息して居た。其隙を窺ふて、一旦破れた、立見が手勢を率ゐて、俄に逆襲して來た。其勢ひの激しかつた事は、阿修羅王の暴れたるが如くで、流石の山縣勢も、是が爲に、散々の敗北を遂げて、山縣は、生命から〴〵、逃げ去つた。所が、休息して居る時に、瓢簞の酒を注いで、飮んで居た。それを、逃げる時分に、瓢簞だけは放さずに、持つて逃げたが、肝腎の刀を、置いて行つた。といふので、立見が、明治政府に仕へてから、山縣に會ふと、其時の事を物語つては、

『貴下も、あの時の逃足は、實に早かつた。殊に、腰の物を置いて、瓢簞だけ握つて逃げたのは、なか〳〵美事なものでござつたよ、ハツハツハー』

と言ふて、嘲弄する事が、屢々であつた。見が爲に、長州派の軍人に、ひどく睨まれて、立見の出世が遲くなつた。

されば、立見は、明治政府に、なつてからも、軍隊に這入り得ず、裁判所の役人に、なつて居たのだ。戰さをさせたら、日本一と、日清戰爭の時に、外國人から稱讚され、横濱のメール新聞では、世界第一の用兵の大家であるとまで、激賞した位であるが、裁判官になつては、何うにも、しやうがない。僅かな月給で、毎日裁判所へ出ては、コソコソ働いて居た。或時、役所が退けて、宅へ歸らう、とする途中、神田の眼鏡橋まで來る、と、馬に乘つて、やつて

來たのが、紀州出身の津田出と、いふ人であつた。

此人は、紀州西鄕と、言はれた位で、其晩年は、甚だ振はなかつたが、陸軍省が、出來た當時、津田の勢力は、非常なものであつて、流石の大西鄕でさへ、津田の意見を聽いて、軍政の改革をした、といふ位に、陸軍の智嚢と、言はれた人であつた。

津田が馬に乘つて、通り掛かると、町の向ふ側を通るのが、何うも、立見に、よく似て居るから、馬を止めて、チツと、見て居ると、立見は、帽子を、深く被つて、面を背けて、行き過ぎやう、とした。見詰めて居た、津田は、早くも、それと知つて、立見の傍に進んで、

『オイ、立見ぢやないか』

聲を掛けられて、流石の立見も、眞赤な顔をして、

『イヤ、津田か、暫くぢやつた』

『暫くぢやない。君は、何うして居るのだ』

『何うして居るつて、矢張り役人を、やつて居るのぢやよ』

『此頃、聞いたのでは、裁判官をして居る、といふが、何で、そんな詰らぬ事を、やつて居るのだ』

『別に、さういふ事を、したくもないが、政府が、それだけにしか、買つて呉れぬのぢやから、致し方がない。ハツハツハー』

『俺が、心配をするから、一兩日の中に、是非、邸へ來て呉れ』

『ウム、其中に行く事にしやう』

其日は、これで別れたが、それから、津田が、心配を始めて、到頭、陸軍へ、立見を、入れる事にした。裁判官としては、一文の値打も無いが、軍人としては、大層な手腕があつたのだから、見る〳〵中に、大佐にまで進んだが、

それから上には、何うしても、昇れなかつたのだ。そこで、陸軍部内の、口の悪い連中が、一生大佐といふ、名を付けた。立見も、是で一生を終るつもりで、覺悟はして居たが、時なるかな、明治十年の西南役に、出征を命ぜられた。其際に、功名をして、凱旋の後、少將に進んだ。日清戰爭の際には、朔寧枝隊を率ゐて、元山津から大同江まで、非常な、險阻を冒して、馳付けた。其時に、丁度、大島義昌が、混成旅團長として、苦戰に陷り、今や討死をしやう、といふ揚合であつた。長岡外史が、參謀長であつたが、殆ど策の施すべきなく、大島と共に、戰死といふ覺悟をして居た。所へ、立見が、乘込んで來て、此苦戰の中から救ふて、敵軍を追散らしてしまつた。

斯ういふやうな事が、幾度か續いて、中將に進み、其後、日露戰爭の際に、營口の一戰に、あの大逆襲を受けながら、露軍を擊退して、其策戰の巧妙を、世界の武官にまで知られ、凱旋の後は、大將に進んで、今は、故人となつてしまつた。

此立見と、河合の二人が、踏張つて居たので、越後口の官軍は、一歩も進むことが出來なかつた。又、板垣が、會津の城一つを、持餘して、長い間、戰つて居たのは、是が爲でもあつた。

四

會津城は、武家天下の時代には、五名城の一つに數へられて、黑川城の昔から、戰記の上に於ては、名のある城であつた。四方、山に包まれて、奧州の一隅に、偏在して居た爲に、一般の人氣は、質朴で、士風も、極めて堅實であつた。輕佻浮華の調子が無く。從つて、武藝の修練にも深い嗜みがあり、殊に、會津の槍組といふては天下に名のあつたもので、當時の諸藩を通じて、會津の武士といへば、なか〳〵強い者として、評判されて居た位である。

德川宗家とは、姻戚の關係があつた所から、會津侯は佐幕の意見を固執して、薩長二藩とは、奮鬪をつゞけた。其心は、藩士の間にも傳はつて、藩主と、生死を共にするの志は、實に堅いものがあつた。

愈々、德川が、江戸城を明渡して、慶喜は、水戸へ引退つて、謹愼を表する、となつた後までも、何とかして頽勢を挽回じやう、として、苦心の末、奧羽諸藩の聯盟を計つて、仙臺の如き大藩が、腰元危く、官軍に、降伏したにも拘らず、孤城を守つて、天下を對手に、戰ひを續けた。此一事は、理窟を外にして、痛快、壯烈の極みであつた。

啻に、藩主と藩臣の間ばかりでなく、童幼婦女の末に至るまでも、皆其心になつて、よく奮鬪を續けて居たのである。されば、板垣が、いかに戰さ上手であつても、正面からは、攻落し得なかつた。幸ひにして、河野廣中が、先導を勸めて、會津城の搦手から、間道を廻つて、火を放けたから、さしもに強かつた、會津兵も、兜を脫いで、降らねばならぬ破目に、陷つて了つた。

當時、白虎隊と稱して、靑年の一團があつた十三四歲から、二十歲位までの、靑年を以て組織された、兵團であるが、父や兄と、志を同じうして、最後まで奮鬪して、愈々、城を開かなければならぬ、といふ場合になつて、憤慨の極、飯盛山へ登つて、未だ前途のある、靑年が、枕を並べて、自刄して相果てた、といふやうな事は、千古に傳ふべき、壯烈な軍物語であらう、と思ふ。今も猶、劍舞や詩吟に使はれて、會津の白虎隊といへば、誰でも知つて居るのが、即ちそれである。

或は、藩士の妻女が夫の討死した後に、猶ほ生殘つて、恥を晒すやうな事が、あつてはならぬ、といふので、壁間に、辭世の歌を止めて自刄した、とか、母や子供を、自からの手に掛けて、其場を去らず、自殺したといふやうな、健氣な婦人もあつた。斯うした心を、有つて居た者が多かつたから、會津の籠城は、あれまでに續いたのである。順逆の道から論じて、會津藩を、朝敵として扱つたが、今にして之を思へば、會津藩士は、實に武士の中の武士として、稱讚すべきものがあつた。

會津藩が、官軍に抵抗したのは、何處までも、朝廷の御意に背く、といふ考へではなかつた。たとへ、錦の御旗を掲げ、朝廷の名に依りて、攻めて來ても、それは、薩長の二藩が、奸智を以て、朝廷を、欺き奉つて、斯ういふ事に

したのであつて、朝廷の御眞意は、玆に無いのである、といふ事を、飽までも信じて、奮鬪をつゞけたのであるから會津藩が、是までに戰ふた、といふだけの事のみを以て、純粹の朝敵として視るのは、間違つて居る。

會津侯が、城を開いて、官軍に降伏を決した。手代木直右衞門が、その名代として、板垣の許へ、通じて來たので板垣は、手代木に面會して、開城の手續を運ぶ迄になつたが、玆に一つ困つた事は、是程の名城を、受授するのにはそれぞれの式がある。それを、心得て居て、完全に、手續をなし得るものが、果して有るか、どうか。又、會津侯は是までに戰ふて、朝敵の名は・受けて居ても、退いて考へて見れば、德川宗家の爲に、最後の氣を吐いて、自分の名利を、擲つて掛かつた、のであるから、その志に對しては、板垣と雖も、同情して居たのである。從つて、城の受授に就ても、冷酷な取扱は出來ぬ。緩嚴、その宜しきを得て、充分に、禮儀を盡してやり度い、とは思ふが、實は、適當な人が無いのに、苦しんだのである。

時に、薩藩士の中村半次郎が、板垣に會ひたい、といふて來たので、すぐに面會する、と、

『城の受授は己どンが引受ける』

と、いふのであつた。

けれども、中村は、戰陣に臨んでこそ、萬夫不當の勇者であるが、果して、城の受授に就て、適任の人であるか、何うかは、甚だ疑問であつた。流石の板垣も、躊躇して居る、と、中村は、

『是非、自分に、遣らせて呉れ』

と言ふので、據所なく、許す事になつたが、板垣からは、充分の注意を與へて、冷酷の取扱を爲ぬやうにといふ事だけは、言ふて置いた。

然るに、中村と共に、副使のやうな、役目を以て行つたのが、豐後の竹田出身で、山縣小太郎と、いふ人であつた。是が後に、廣瀨中佐を、あれだけに、育て上げた人物であつて、學問に深く、武家の故實にも、通じた人であつたか

ら、中村の及ばざる所は、山縣が補ひ、文書の上の事は、山縣が、すべて引受たから、城の明渡は、少しの滯りもなく濟んだ。

中村の態度は、實に堂々たるものであつたが、同時に、寬嚴、宜しきを得て、弛める所は弛め、締める所は締めて、立派に式を終つた。會津侯は、菊一文字の短刀を贈つて、中村の情ある取扱ひに報いた、といふ、美談もあるが、中村は、後の桐野利秋である。兎に角、會津侯は、深く謹愼して、朝廷の御沙汰を、待つ事になつたが、此始末から、考へて見れば、何うしても、會津藩は取潰されて、藩主は、嚴罰に處せられる、といふのが、順序になつて居た。玆に於て、藩臣の中でも、段々心配する者があつて、せめては、會津の家だけを遺したい、といふのが、藩士を擧げての希望であつた。其中の一人、秋月悌次郎が、東京へ乘込み、要路の大官に會ふて、藩主の爲に嘆願をしやう、といふので・唯一人、密に會津を遁れて、東京へ出て來た。

五

德川の親藩として、其存亡を、共にす可き、深い關係のあつたものは、啻に、會津藩ばかりではなかつた。將軍の繼嗣が絕えれば、直に入つて、其繼嗣となるべき資格を有つて居た。御三家、御三卿なるものが、第一に腰を突いてしまつて、宗家に背いたのだから、酷いものだ。理窟の上からは、大義名分の爲に、止む事を得ない、とも言へやうが、併し、情の上に於いて、宗家を見棄てしまつたのは、決して感心の出來る事ではない。さうした、不人情な、親藩あるのに、會津藩が、獨り毅然として、飽までも、薩長二藩の壓迫に反抗して、戰ひを續けたのは、會津一流の片意地からだ、と言へば、それまでの事であるが、武士氣質の上から見れば、當然、履むべき道を、履んで來たものとも、言へるのである。

乍併、天下の事は、成敗を以て、定まるのである。勝利の地位を占めた、薩長二藩は、朝廷を擁して、天下の大

權を、握つて居るのだ。之に反抗して、長い戰ひを續けた、會津藩は、朝敵の名を以て、取潰されるに、極つて居る。

會津侯が、大決心を以て、奥羽諸侯の聯盟を計り、さうして、矢彈も盡きれば、糧食も絕えると、いふまでに、戰ひをなした以上、其位の覺悟は、固より有つて居たに、違ひない。戰ひに敗けたから、といつて、泣言は、いふまいが、それは、藩主としての、會津侯の心であつて、藩臣の身としては、徒に腕を組んで、主家の滅亡を、見て居る事は出來ぬ。玆に於いて、主家を救ふべく、密に國許を忍び出で、それ〴〵の筋を辿つて、哀訴の手續をする者も、少くはなかつた。

秋月は、廣澤富次郎、手代木直右衞門の二人とも相談して、單身、東京へ、乘出して來たのだが、誰を使つて、何ういふ風にして、主家の存續を圖らう、といふやうな事は、成算が立つて居なかつた。

德川将軍家の膝下として、二百五十年以上も、太平を保つた、江戸の城は、今や、朝廷が、自から治す所となつて、何時の間にやら、帝都は、此處に移されて、東京と改稱されて居たのだ。ホンの、瞬をする、瞬間の差ではあつたが、秋月も、東京へ、乘込んで來て、見る物、聞く物、何一つとして、感慨の種ならざるはなく、思へば思ふ程、殘念な次第である、とは思ふが、今は、如何とも致し方なく、時世と、あきらめる外なかつた。

先祖以來の、宗家を振棄て、朝廷へ歸順といふ、耳ざはりのよい、名目の下に、自家の存立を圖つた、三家三卿を見れば、唯、家名が殘つた、といふだけの事で、新しい政府に對しては、何等の權能も、有つて居ないのだ。切めて、これに縋つて、主家の再興を謀らうか、とも思つたが、是は、手を盡して、見るまでもなく、流石に、智慧の秋月と、言はれた程の、悌次郎の胸には、駄目だといふ事が、すぐ判つた。段々、人の噂に聞き、又、自分の見た所から、分別して見ても、舊緣のある、諸侯の手に縋つて、何うするといふ事は、寧ろ考へぬ方がよい、と氣がついた。さうして見れば、薩長二藩の人に縋つて、哀訴するの外は、無い事になる。けれども、會津藩の、今までの立場から、考へて見て、それはしたくない。元來が、薩長二藩に對する、反抗から起した、軍だ。それが爲に、天下を騷がしてあれ

までの戰ひはしたのだが、一敗、地に塗みれて今は、悲慘な態に、陷つて居る。其藩臣ともあらう者が、如何に主家を、大切に思へばとて、不倶戴天の仇敵にも等しき、二藩の人の手に依つて、主家を救はう、といふ考へには、何うしてもなれなかつた。といふて今の天下の有様から言へば、何うしても、其外の手段は無いのであるから、秋月程の人も、殆ど途方に暮れて、薄暗い宿屋の、窓の下に、焦慮、煩悶して、日を送るのであつた。

長い間、降り續いた雨が、今日は、偶々晴れて、煌々するやうな、强い日の光が、窓から、射込んで來る。柱に凭れて獨り拱手として居た、秋月は、思はず、頭を上げて、窓の方を、ヂツと、見て居る。所へ、這入つて來たのが、宿の主人だ、逗留が長くなつたので、主人とも懇意になつて、時折は、碁などを圍んで、樂む事もあつた。

『エー、御退屈樣でござりませう、今日は思ひの外の上天氣で、丸で拾物をしたやうでございます』

『オー、御主人か、如何にも今日は、好い天氣ぢやな』

『今日當りは、市中の御見物を、遊ばしては如何でございますか』

『左樣さ、餘り引籠つて居るのも宜くないから、今日は散歩にでも、出掛けて見ようか、と、實は思つて居た所ぢや』

『エー、御都合に依つては、私が、御案内を致しても、宜しうございます』

『そりや、御親切の事で、獨歩きよりは、却て對手のあつた方が、宜い。別に御差支が無ければ、御案内を願はうか』

『ヘイ、宜しうございますとも、何うせ、私が、宅に居つた所で、用をする譯ではなし、一切、家内と番頭に、委せてあるのでございますから、却て私の居りませぬ方が、家の者は、喜んで居る位でございます。詰り申せば、邪魔者でございますからな、ハツハツハ――』

流石に、商賣柄とて、如才がない。一つには、秋月の人品が、如何にも立派であるから、由緒ある人と見て、何れかの藩中に、重い役を、勤めた御方であらう、と、深く心に信じて、幾分は、崇敬の念を、有つて居たに、違ひない。

六

軈て、秋月は、身支度を整へて、

『サアー、御一緒に參らうか』

『ヘイ、それでは一寸、手前も、支度を致して參りますから……』

『ウム、拙者だけの、支度が出來ても、案内者の支度が出來ぬでは、困るのう』

『直でございますから、一寸、御待ち下さいまし』

主人は立つて、降りて行く。間もなく、下女が、やつて來て、

『御客樣、旦那が、御待ち申して居りますから、御出で下さいませ』

『オー、左樣か』

是から、秋月は、降りて來る、と、上り框に、腰を掛けて、主人は、待つて居るのだ。

秋月が、泊つて居た、宿屋は、神田の淡路町で、餘り上等の家ではなかつた。固より世を忍ぶ身の會津藩士、秋月悌次郎と、知れては困る事情もある。無論、變名で、泊つて居たには違ひないが、何事も、それに準じて、質素を旨として居たのであるから、宿の主人には、さうした大切な、用事の爲に、來て居る、立派な人だ、といふ事は判らないが、世の變遷に連れて、斯ういふ落目になつた、武士の果だ、とは、想像して居たのである。

『旦那、何處へ、參りませうか』

『左樣さ、何處に、致さうかな』

『全體、旦那は、御言葉から考へても、奧州の方とは心得ますが、江戸の事は、御存じなのでせうな』

『左樣、少しは心得ても居る』

『餘り御尋ね申すも、失禮と存じて、控へて居りましたが、矢張り、旦那は、德川樣の御盛な時分には、槍を持たせて、エー避れツてな事を、仰しやつて歩いた、御身分で、ございませうな』

『イヤ、それ程の身分でもないが、矢張り刀を差して、歩いたのぢや』

『さうでございませうとも、一寸見ましても、直ぐ判りますからな、其時分に、江戸の方へ、勤めて御出でになつた事も、あるのでございませう』

『半年や一年は、其時の都合で、居た事もあるが、大概は、邸内で、日を暮し、餘り外へ出なかつたので、市街の樣子は、一向暗いのぢや』

『左樣でございますか、それならば、上野から向島の方へ拔ける事として、其間には、淺草の觀音樣もございますから、御參詣をなすつたら、如何でございます』

『ウム、それが宜からう。さういふ風に、案内を賴む』

そこで、宿の主人が、頻に町々の事に就て講釋をしながら、段々、やつて來た。はや、上野の廣小路へ來る、と、正面に見えるのが、山王臺である。もう一歩で、三橋へ掛からう、といふ所であつた。

舊式の江戸見物でも、新式の東京見物でも、大概、地方から來る人は、上野と淺草へ行くことに、誰が極めたともなく、さうなつて居る。花時分ならば、向島といふ事もあるが、其他の季節では、向島まで足を延す者は殆ど無い。未だ其頃には、上野の山内が、今のやうに、公園地風にはなつて、居なかつたが、其代りには、大樹が鬱蒼として、晝尙ほ暗く、何となしに幽邃な、眺めはあつたのだ。幾ら官軍の勝利となつて、帝都が江戸に遷り、名こそ東京と改まつても、三百年の間に、注込まれた、德川樣が有難い、といふ頭は、なかなかに變らない。東照宮が、上野にある、といふので、一層、江戸つ子の足は、其方に向くのだから、自然と、地方から來る者も、いざ見物となれば、上野へ行つて、それから、淺草の觀世音へ、參詣に行く、といふのが、先づ一般の慣ひに、なつて居たのだ。

秋月は、江戸詰の時分に、屢々、上野へも來たし、淺草の方へも、廻つた事はあるが、斯ういふ風に、時勢が一變してから、上野へ來るのは、初めてゞあるから、一旦、國を失ふて、他國へ走つた人が、又、故國へ、歸つて來て、昔の風物に接して、何とも言へぬ、感慨に打たれた、といふのと、同じやうな感じを以て、山王臺の方を、ヂツと、見上げて居る。德川全勢の時に、輪奐の美を極めた、吉祥閣は、哀れ、彰義隊の一戰に、煙となつてしまつた。纔に殘る、黑門の太い柱には、彈丸の擊込まれた孔が、無數に穿いて居る。

『旦那も、御承知でございませうが、是が三橋でございます。彰義隊の戰さの時には、私も、見に參りましたが、大層な事でございましたよ』

『フヽム、お前は、態々、あの戰さを、見に來たのか』

『ヘイ、そりやア、何と言つたつて、德川樣の御旗本が、もう今日限りといふ、戰さをするんでございますもの、江戸つ子の、身に取つちやア、何んなに、胸を悸かせたか、知れやしません』

『して見ると、お前も、德川贔屓か』

『エイ、別に德川贔屓と、いふ譯でもありませぬが、それでも、官軍なんぞが、肩へ錦の布を、付けて、威張つて來た時には、癪に觸つて、遠くの方から、草鞋を打付けてやりましたよ』

『お前は、なか／＼元氣な事を言ふ。今のやうな世になつて、そんな事を言ふて居るのが知れる、と、飛んだ目に遭ふから、決して戲談にも、さういふ事は、言はぬが宜いぞ』

急に氣が付いたやうに、宿の主人は、口を押へて、周圍を見廻した。幸に通る人も無いので、

『本當に、さうでございました。此處へ來る、と、口惜しくなるもんですから、思はず官軍の事を、惡く言ふやうに、なつちまうんで、ベラベラと、やつちまひました。併し、旦那、彰義隊は、强いもんでしたな。あれだけの官軍を、前に控へて、斯んな小ぽけな、山と云へば山ですか、實ア、地面の瘤みたやうなもんでさア、この狹い所に立籠つ

て、一日の間、官軍を困らせたんですから、今から思つても、强いものですなア』

『お前のやうに、言ふて吳れる者がある、と、德川の爲に死んだ、忠義な武士の魂も、浮ばれるといふものぢや』

所へ、何處で飮んだか、圖部六に醉ぱらつた、官軍の兵士が七八人、濁聲揚げて、流行歌を唄ひながら、やつて來るので、秋月は、密と、路を避けて、其後から附いて、上野の山內へ、這入つて來た。

七

此間の戰ひに、踏み荒されたまゝの山內が、大分取片付けられて、綺麗にはなつて居るやうなものゝ、何處となく、血腥い風が吹いて、悲慘の趣がある。纔に兵火を免れた、寺院も、門や塀には、銃丸の擊込まれた迹が、殘つて居るので、當時の戰爭が、如何に激しかつたか、といふ樣を物語つて居るやうにも、思へる。幕府の最後に、氣を吐いた。彰義隊の、强者の靈魂を、慰むる者もある、と見えて、昔の山王臺の後に、型ばかりの墓がある。線香の煙が、咽ぶやうに、立上つて居るのは、流石に、暴威を振つて居る、薩長二藩から出た、役人の力でも、制する事が出來ぬ、と見える。

秋月は、暫くの間、其前に佇んで、合掌した儘、口の中で、何かムグ／＼、言ふて居る。脇で見て居た、宿の主人は、不思議に思ひながら、秋月の顏を、覗き込むやうにして見る、と、頰の邊りに、淚が傳つて居るから、偖は、此人は、泊つた時から、大概さういふ身分の人だらう、と思つた通り、矢張り、德川樣の家來に、違ひない。言葉の訛りが、奧の人のやうだから、事に依つたら、會津藩邊りの人ではないか、と思ひながらも、尙ほ其樣子を、見て居ると、軈て、秋月は、二度、三度、頭を下げて、體の向を變へたので、宿の主人と、顏を見合せた。

『オー、お前、未だ其處に、立つて居つたのか』

『ヘイ、旦那が、動かないのですから、私も、動く事が出來ませんから、矢張り、拜んで居りました』

『お前も、拜んで吳れたか』

『へイ』

『何うか、此先とも、家業の合間には來て、拜んで下さい』

『宜しうございますとも、そりやア、旦那が、さう仰しやらないでも、終始參つては、拜んで居るのでございますから……それにしても、旦那は、彰義隊の御方に、何か御身寄の者でもあるんでございますか』

『別に身寄と、いふほどの者は無いが、同じ流れを汲んだ、德川の家來ぢやからね』

主人は、手を拍つて、

『さうでございますか。私も、大概そんな事だらう、と思ひました。何でも、貴下樣は、德川樣の御家來で偉い御方だな、と、私も思つて居りました。矢張り、さうでございましたか。よく、それでも、私に打明けて、德川樣の御身寄だ、といふ事を、仰しやつて下さいました。有難うございます』

唯聞けば、何の事もないが、德川の流れを汲んだ、武夫だ、といふ事だけで、宿の主人には、何れ程、有難く聞えたのか、判らない。秋月は、之を思ふに付けても、德川が、二百五十年の太平を保つて、江戶の町人に與へた、御恩澤は、斯んな下々の者にまでも、浸込んで居るが、今は滅亡にも等しい、御宗家の德を慕ふて、德川の家來だ、と一と言、名乘つたばかりで、斯んなに嬉しがられる。町人の心には、存外に嬉しい所がある。それに付けても、先祖以來、德川の食祿を食んで居た者や、御親藩の中に、宗家の滅亡を、他處に、一身の安全を、圖つた者のあるのは、苦苦しい事である、と、復び無量の感慨に打たれて、秋月は、思はず、足を止めて、立つて居ると、

『ネー、旦那、斯うして立つて居ても、仕樣がありませんから、彼處の腰掛で、一服やることにしやうぢやございませんか』

『ウム、それが宜からう』

葭簾張の掛茶屋があるから、それへ這入つて、暫く休息する事になつた。

秋月が、此處へ休む前から、四五人連の町人が、休んで居た。銘々に、大きな瓢簞を、下げて來たのは、花見時と違つて、時候外れの感はあるが、餘程、酒好きな連中が、申合はせてのブラ〳〵歩き、東照宮參拜の歸りに、息やすめの酒宴を、やつて居るらしい。

『ネー、源兵衞さん』

『何だね』

『何と言つたつて、權現樣は、有難いね』

『そりやア、さうだとも、今更、お前さんが斷らなくたつて、昔から有難いものに、極つて居まさア』

『オヤ〳〵、妙に喧嘩腰で、御出でなすつたね』

『別に、喧嘩腰つて譯ぢやないけれど、今更のやうに、權現樣を有難がるから、少し癪に觸らアね、ハツハツハー』

『成程、此奴ア、さう言はれても、仕方が無いね。權現樣の有難いのは、昔から極つて居るんだ。アツハツハー』

其中の一人が、口を容れて、

『源兵衞さんや、又吉さんは、權現樣の有難いよりは、此瓢簞の方が、有難さうだぜ』

兩人は、一時に手を拍つて、

『成程、此奴ア一番當てられたか。アツハツハー』

八

今も今とて、亡き彰義隊の、強者の後を弔ふて、散々、泣いて來た、秋月は、此腰掛に、休んで居る、と、又、德川贔屓の、江戶ツ子に、泣かされるのであつた。

『時に、又吉さん、私達にやア、御上の事ア解らないが、何うです、會津樣は、何うなるだらう』

『さうだね。何うなるか判らないが、何でも、人の噂ぢや、會津樣は、取潰しになる、といふ事だ』

『へ、ー、そんな譯ですかね。そりやアさうかも、知れないね。あれだけの戰さをしたんだから…、官軍が、幾ら強い、と言つたつて、會津樣を、持餘したんだからね。其憎しみでも、取潰し位の事にやアなるだらうよ』

瓢簞の冷酒を、互に酌をしながら、飮合ふて居る。散歩に疲れた、空腹の加減でもあらうが、もう大分、醉が廻つて居るだけに、周圍憚らずの高調子になつて、居るのだ。源兵衞と、呼ばれて居る人は、一番に年を取つて居るので、其話振にも、分別臭い所がある。

『マア、斯んな事を、大きな聲で、話す事も出來ねいが、私なんぞの考へぢや、會津樣が、あれだけに戰つたにもしろ、そりやア、心から朝廷樣に双向つた、といふのぢやなし、薩摩や長州の人達が、餘り德川樣を、酷く押へ付けるから、それがどうも、癪に觸つてならねい、といふので、始めたやうに思はれる。さうして見りやア、何も、此先、會津樣ばかりを憎んで、人身御供に、するにも及ぶまい。さういふ風に、德川樣に、忠義な人は、打つて變つて、朝廷の御家來になりやア、矢張り朝廷に、忠義をするに極まつて居るんだから、こりやア一番、朝廷の方でも奮發して、會津樣を、助けるのが一番だ。それにしても、會津樣の御家來が、何ういふ譯で、朝廷へ願つて出ないのか。それとも、願つて居るのか、我々にや判らないが、何も、戰さに敗けたから、といつて、そんなに小さくなつて、御沙汰を、待つて居るにやア、及ばねい。會津樣が、御自分から、そんな事を願つたら、意氣地もない、と笑はれやうが、其家來が、願つて出りやア、主人の爲だから差支なからう、と思ふが、我々が、有難いと思つて居る、德川樣の、御先途を見屆けるまで、戰さをして吳れたんだから、會津樣は、矢張り有難い、と思つて居るんだ』

酒の機嫌も、幾らか手傳つて居るだらうが、元來が、お喋りの人だ、と見えて、源兵衞さんは、盛に氣焰を吐出した。

『オイ〳〵、戲談ぢやねいぜ。そんな事を、公然に話をして、若し役人にでも聞かれたら、それこそ騷動だ。お前さんが、幾ら心配したつて、會津樣が、助かるものではない。詰らねいこつちやねいか』

『オイ、又吉さん、戲談いつちやいけねいぜ。何も、俺が、會津樣を助けやう、といふのではないが、愚痴のやうだが、其御家來のして居る事が、齒痒くて堪らないから、ツイ斯ういふ事を、言ふやうになるのだ。少しも遠慮には及ばねえのだから、朝廷へ、願つて出たら宜からう、といふのだ。假令、官軍の方の人に聞かれても、惡いことでもなからう、と思ふんだ。あれだけに、意地張つて戰つたら、もうそれで、溜飮も下つたらうから、會津樣の御家來だつて、何も薩摩や長州の人を、忌嫌つて居るにも及ぶまい。御主人を、助けてから後で、舌を出したつて濟むんだから、木戸さんだ、とか、西鄕さんだ、とかいふ、偉い人に、あの時は、斯ういふ譯でございましたから、何とか分別をして下さい、と、賴みに行つたつて、別段、それが男の顏に拘る、といふ譯でもなからう。そんな事を思ふと、何とかいひたくなるのだ』

何でもない事を、言ふて居るのだが、今、目の當り、會津侯の身の上に就いて、町人風情の、下々の者までが、斯んなに心配して吳れるのか、と、これを思ふて見る、と、秋月は、泌々と嬉しくなつたが、それに付けても、今日まで、自分が、人の選嫌ひをして、躊躇して居たのが、恥しいやうにも思はれた。成程、今も町人が、言ふた通り、主人の家を救ふのは、家來の役であるから、詰りは、主人の面目にさへ觸らなければ、自分が、何ういふ卑しい事をしたつて、忠義の爲にすることだから、差支へはない譯だ。薩摩と長州の人が、天下の大權を、握つて居るのだから、其人達の袖に縋らなければ、御家の危急を救ふ事は、出來ないのだ。それを、何の當もなく、徒に思案に暮れてばかり、居た所で、致し方が無い。聞く所に依れば、西鄕は、今、國へ歸つて居る、といふ事であるから、こりやア寧、長州の木戸に縋つて、御家の復興を、圖る外はあるまい、と、心竊に決して、宿の主人を促して、茶店を出ると、時刻が移つて居て、夕陽は、本鄕臺に、落ちやうとする時であつた。

九

秋月と木戸は、全く知らぬ間柄ではない。一度は、互に敵視して、智慧袋を絞つて、喧嘩した事もあるのだ。文久三年の、京都の政變が、即ちそれであつた。

其時は、廣澤富五郎と、秋月が、力を合せて、到頭、薩藩を說き付けて、遂に毛利を、京都から追出して、木戸の如きも、一時は、一身の置場にも、困る位の悲境に、陷つたのである。それは、秋月と廣澤のやつた事であつて、恐らく木戸の一生を通じて、あの時位、口惜しい事はなかつたらう。それ程にまで、木戸を苦しめた、秋月が、今は、涙を呑み、膝を屈して、木戸に縋らなければ、主人の家を、復興する事は出來ない、といふのであるから、その昔苦んだ、木戸よりは、今の秋月の苦しみが、一層の苦しみであらう。互に敵視して、あれまでの戰ひはしたやうなものの、文久の昔、一度は聯合した、緣故から言へば、薩摩の方に縋つて、救ふて貰ふのが、順序のやうではあるが、西鄕の居らぬ以上は、木戸に、縋るの外は、ないのだ。極端まで爭ふて、壽命の縮まる程に、苦しみを與へた、木戸に縋つて、今の境遇を話す方が、却て活路を求めるには、近いかも知れぬ、と考へた事は、度々あつたけれども、流石に、それと決心し得なかつたのである。所が、上野へ、遊びに行つて、腰掛茶屋の酒宴に、氣焰を吐いて居た、江戸の町人が、言ふた一言は、秋月の胸に、深い感慨を與へて、遂に秋月は、木戸に縋つて、主家の危急を救ふ、といふ言に、堅い決心をしたのだ。

折柄、木戸は、箱根の湯治場に、行つて居ると、聞いたので、寧、斯ういふ話をするのには、旅先の方が、却て都合の好い事が多い、とも考へて、秋月は、箱根まで、木戸を、訪ねて行く事になつた。

まさかに、會津藩士秋月悌次郎と名乘つて、訪ねる事もならぬし、それに、自分等は、主人と共に、今現に、謹愼中であるべき身分であるから、公然と、新政府の役人に會ふ、といふやうな事は、出來ないのだ。若し、名前を名乘つて、訪ねて行つても、門前拂ひを、されるやうな事があつては、却て後日の禍となり、取返しの付かぬ事になつては、一段の迷惑ともなるから、深く考へて、工夫をした末、まだ其頃は、舊幕時代の風俗が、其儘に殘つて居て、政府の役人でも、髷を結ふて居る者が、多かつた位であるから、近年になつてこそ、殆んど見えなくなつた、虛無僧に、なつて行くのが、道中筋は、安全であると、考へた。

それと打明けて、くはしい事は、いへぬが、旅宿の主人は、一風變つて、江戸つ子の氣象を、有つて居るのを、幸に、口實を設けて、虛無僧姿を、すつかり算段して貰つて、秋月は、全く虛無僧になり濟まして、箱根へ、やつて來たのだ。

昭和の今日では、一般の人が、ヤレ避暑だとか、ソレ、避寒だ、とか、樣々の名を付けては、湯治場歩きを、爲るやうになつたが、昔の人は、湯治場歩きなぞを、無造作に、やつたものではない。尤も、今の湯治場は、遊び場所として、客を迎へるやうに、百般の設備が、出來て居るけれども、昔の湯治場は、本當に、病氣の療養に、行く者ばかりで、偶には、遊山半分に、出掛ける者もあつたらうが、そんなのは、湯治場で、餘り大切には、されなかつた。何うせ、溫泉の涌出る所なぞは、都會の眞中には、無いのであるから、人情や風俗も、極めて質朴で、縱令、金札を切つて、豪奢を極める、客があつても、永久に、續く客ではない。と見て居るから、餘り大事には、爲なかつたものだ。却て、金の使ひ振りが、質素で、餘計な事はしないが、長く泊つて居て吳れる、眞の湯治客を、大事にしたものである。

されば、昔の湯治客は、病氣を治す爲に行つたのであるが、今の湯治客は、病氣を造る爲に行くのだ。出掛ける時には、ピン〳〵達者で、行つた者が、歸る時は、顏の色も蒼く、頰骨も現れて、フラ〳〵腰で歸る、といふやうな、馬鹿な事は、今の湯治場では、珍らしくない事だ。日本全國を通じて、湯治場の數も多くあるが、先づ箱根が、湯治場としては、第一となつて居る。

秋月は、漸く箱根へ着いて、直に木戸を訪ねやう、とは思つたが、若し斷られる、と、後が面倒であるから、日頃嗜む、尺八を吹いて、宿屋の軒先に立つては、窃に樣子を、窺つて居たのだ。待てば海路の日和といふて、幸ひにも、尺八の祕曲を聽きたい、といふので、聘ばれた座敷が、弓矢八幡の引合せか、圖らずも、それが、木戸であつたから、秋月の喜びは、一通りでなかつた。

天蓋は、宗門の制規として、冠つた儘、席について居る。木戸から、望みで、これから吹きはじめた。

一曲二曲と、段々、吹奏んで行く。虚無僧の樣子を、熟々、見て居た、木戸は、何となく氣を引締られて、心も滅入るばかりであつた。尤も、同じ樂器でも、尺八は、琵琶と同じやうに、人の氣を引立てるやうな、派手なものではなく、惡く言へば、亡國の調がある。讚めて言へで、悲愴の曲とでも、言ふのだらう。殊に、之を吹いて居る者が、亡國の臣で、聽いて居る者が、時代の潮流を乘越えて、一時は、權勢並ぶ者なき、身分になつて、今現に、日本で三人と、稱へられて居る程ではあるが、却て、それが爲に、內外の心配も多く、殊には、賴みに思ふ、大村が、今日か明日かの大患で、すつかり氣落ちをしてしまふた、木戸が、聽手になつて居るのだから、何うしても、尺八の音に、悲哀の調が、深くなるのも無理は無い。

『暫く御待ちなさい』

木戸が、斯ういふたので、虚無僧は、尺八の音を止めた。

一〇

何の爲かは知らぬが、木戸に、止められたので、虚無僧は、尺八を、右の手に持直して、ヂツと、木戸の態度を見ながら、

『此曲は、御氣に入りませぬか』

『イヤ、左樣の次第ではない。餘り氣が滅入つて來たので、暫く息ませて貰はう、と思ふてぢや』

虚無僧は、兩手を突いて、

『御病中の御慰みにもならず、却て御氣詰りとありましては、恐れ入りますから、此儘止めて下りませうか』

『それには及ばぬ。尺八の曲は、姑く措いて、何か珍らしい話でもあるならば、聽かせて貰ひたい、と思ふが、お手前等は、さういふ姿で、日本全國を、廻歷せられるのであるから、定めて面白い話の種も多くあらう。それを聽かせて貰ひたいのぢや』

『別に、是と言ふて、御話し申上げるやうな事も、ありませぬが、折角の御尋ねでありまするから、申述べまする。實は先般、奧羽諸州を、遍歷いたした時分に、計らずも、會津の城下に參りました』

『ウム、會津の城下へ……』

と思はず、膝を進めた。虚無僧も、衣紋を繕うて、

『イヤ、大きな戰さの跡を見る程、悲慘なものはありませぬ。殊に、一藩の力を擧げて、此處を、先途と戰ふたのが、敗戰に相成つて、藩主は、寺院に謹愼の身の上、藩士は、東西に離散し、今や、衣食にも苦む程の狀態で、見る物、聞く物、斷腸の種ならざるはなく、我等は、俗人に遠ざかつて、虚無僧寺に、人と成つた身なれども、目の當りに、其狀態を見ましては、人事ならぬ、自分の身の上に起つた、禍の如くにも思はれて、坐に哀愁の淚に、暮れて、參りました。それに引換へ、薩長二藩の御人は、順風に帆を上げて、今の勢ひ、凡そ天下の事、一として成らざるはなく、勝敗は、武門の常とは申しながら、斯うも違ふものか、と、東西を比較して、見れば見る程、會津侯が、今日の境遇は、何とも同情の念に堪へませぬ』

と、段々、說立てゝ來る、虚無僧の言葉は沈んで、眼には、熱い淚を、堪へて居る。其態度が、何となく普通ならぬに、木戸は、早くも氣が付いた。

『フ、ム、會津の城下に滯在して、それ程に、會津侯が、今の境遇を、氣の毒と御覽になつたか』

『ハイ、これは、私一人では、ありますまい。縱令一度は、敵となつて戰ふても、苟も武士の情のある御方ならば一度、會津の地に、足を踏込んで、あの悲慘な狀態を、見た以上、尙ほ其上に、嚴罰を加へて、根も葉も枯らす、といふやうな、無慘な事は、出來ますまい』

『そりやア、貴下の仰せの通り、或は其哀れな狀もあらうが、併し、順逆の道を誤つて、王師に抗した以上は、其末路を見るのも、天の制裁で、止む事を得まい』

『何と仰せられますか、天の制裁と、ハ、ー、斯やうなことを、天の制裁と申しまするか』

『されば、是が天の制裁でなうて、何と致す』

『仰せではございまするが、會津侯は、未だ曾て天に反いては居りませぬ』

『朝廷へ反いたのは、天に反いたのぢやないか』

『私は、左樣には考へませぬ。會津侯の反いたのは、朝廷に對してゞは、ございませぬ』

『然らば、何に反いたのか』

『薩長の二藩に、抵抗したのでございます』

『何と言はつしやる。薩長の二藩に……ソ、そりやア、何ういふ次第で』

『今更申すも、愚痴のやうではござれど、薩長二藩が、時の勢ひに任せて、朝威を笠に、德川幕府を倒さう、と計つた。其致方が、餘りに無慘である、といふ事に激して、聊か德川の末路に、氣を吐かうとした。それが、騎虎の勢ひで、あれまでの戰ひに、なつたのでござりまする。會津侯の御本心から、朝廷に反き奉つたのではない、といふ事は、薩長二藩の雜輩は知らず、苟も上に立つ人ならば、解つて居るべき筈で、ございまする。殊に、文久元治の昔から今日まで、會津藩が辿つて來た道に、二つはありませぬ。順か逆かは知らねども、武士が、本來の情誼一

片から、德川の御味方をした、といふ。それを天が憎しむ、といふ事もござりますまい、現に今、朝廷の御覺え目出度く、天下の事に、與つて居る、長州藩の人々でも、一度は、朝敵の名に依つて、都を構はれた、御方さへござらう。それとても、時勢の一變に依つては、又、順風に、帆を揚げて、今の位地にも、立つ事が出來たのぢや。順逆、何れにもせよ、それは唯、巧に時勢の潮を、泳ぎ越すか、溺れるかの違ひで、別れるのでありませう。何う考へても、會津侯は、不憫でなりませぬ』

ヂツと、腕を組んで、聽いて居た木戸が、

『お手前は、會津侯に、因緣のある御方ぢやな』

『イエ、何ういたしまして』

『イヤ、確かに、それと睨んだ、目は違はぬ。隱すとすれど現はるゝ、御國訛こそ、會津人の證據ぢや。それに何處となく、言語にも、態度にも、覺えがある。差支なくば、氏名を御明し下され』

と、いはれて、秋月は、天蓋を脫いた。

『ハツ、恐れ入りました。御烱眼の通り、拙者は、會津藩の雜輩にて、秋月悌次郎と申しまする者――』

『エツ、何と言はつしやる。お手前が、秋月殿でござつたか』

『ハア』

『イヤ、絕えて久しい面會とて、年月は、多く經つて居らねど、其後の變遷が激しいのと、膝を交へて、長く懇談しなかつた爲に、確と覺えて居らなかつたが、一兩度は、公式の席に於て、御目にも掛かつた事がある。秋月氏、久しうござつたな』

と言ひながら、木戸は、寢床から立上がつて、秋月の手を執つて、上座へ直さうとした。

一一

餘りのことに、秋月は驚いて、

『イエ、それでは、恐れ入りまする』

『マア、それに、御控へなさい。今は今、昔は昔、會津藩の重役として、當時、貴下の爲には、隨分、苦しめられた桂小五郎、今日でこそ、木戸孝允と名乘つて、朝廷の御前は、勤めて居るが、成程、唯今の御說の通り、一度は、朝敵の名に依つて、主人敬親侯は、國許に蟄居を命ぜられ、拙者は、京都を追はれて、其儘立退くも殘念と、三條の橋の下に、阿呆陀羅歌ふて、合力を求めた事もござる。成敗、地を變へるとは、卽ちそれぢや。今日の御手前の、御身の上こそ、昔の拙者の身に引比べて、何とも御氣の毒に存ずる。此席へ參られた時から、由緒ある武夫の、成れの果と、豫め察しては居たが、秋月氏とは、氣が付かなかつた。會津侯の境遇に、同情しての御說、其話し振りが、會津藩に、由緣の御方と、見たればこそ、御尋ねもしたのぢや。よく名乘つて下された。サア打寛いで、緩り話さう』

貴様は、會津の家來か、穢はしいと言つて、追拂はれた所が、喧嘩にもならないのだ。それを、木戸は、昔の身に引比べて、大切に扱ふて吳れる、其心の底までは判らぬが、兎に角、秋月としては、非常に嬉しく感じたが、果して、藩主の身分に就て、嘆願の件を、木戸は、容れて吳れるか、何うか、それを思へば、今の嬉しさに引換へて、又、秋月は、氣が沈んで來るのであつた。

『思へば、もう六七年前の夢でござるが、文久の政變に、京都を追はれて、それより二年餘りは、流離困難、幾多の苦心をした甲斐があつて、幸に、今日の時勢を、造り出したのぢやが、それに反して、お手前が、昨今の境遇は、人事ならず、御察し申す。それに付けても、あれまでに、會津侯が、官軍に刄向ふて、最後まで、德川の爲に盡された。それは、順逆の道を誤つた。とは申せ、謂はゞ武士の意地から、起つた張合で、よくもあれまでに盡されたもの、と、蔭ながら敬服は、致して居るが、併し、今日の時勢と相成つては、表立つて、御褒め申す事もならず切て戰ひを開く以前に、歸順して下されたならば、今の窮命は、すまいものを、と、實は蔭ながら、思ふて居るのでござる』

『それまでに、御同情下さる、尊公の御志、嬉しく存じまする。就きましては、其情ある御言葉に縋つて、御願ひ申す一儀は、餘の儀では、ござらぬ』

と、秋月が、哀訴の次第を、言出さう、とすると、木戸は、それを押へて、

『イヤ、伺はずとも、大概、それと、推察して居る。まさかに、哀訴されたれば、とて、會津侯の罪は、免す譯にはなるまい』

『エツ・然らば、御救ひ下さる譯には、參りますまいか』

『マア、御待ちなさい。救ふと、救はぬとは、朝廷の御思召、一つぢや。縱令、哀訴嘆願の事があつたればとて、それが爲に、朝敵の罪を免す、といふ事にもなるまいが、マア、お急きにならず、と、拙者に、御任せなされ』

言葉の外に溢れる、木戸の同情は、流石に、秋月も悟つたから、

『それまでに、仰せ下さる思召に甘えて、何事も申しませぬ。此上ともに、主家の一條に就ては、御配慮の程、偏に願ひ上げまする』

木戸は、唯頷いて、何の答へも、爲なかつたが、其顏色で、秋月には、充分の安心が、行つたらしい。

『それにしても、御手前が、虛無僧姿は、何とも以て、合點が參らぬ。何ういふ事情から、左樣な姿にはなられたか、御差支なくば承りたい』

『御不審は御尤もに存じまする。實は、主家の爲に、尊公の袖に縋つて、御願ひしたい考へでござつたが、何分にも

明白に名乗る事の出來ぬ、今日の身の上では、斯く姿を變へる外は、ござらぬので、フト思ひ付いて、虚無僧姿になり、拙なる尺八の一曲が、仲介して、此好機會を造つたのでござる』

『ウムさういふ、次第でござつたか、返す返すも、會津侯は、良い御家來を持たれて、御仕合せぢや。それに付けても、智慧の秋月とまで、謠はれた御手前が、今日の身の成行は、御察し申す』

『御言葉で、恐れ入ります』

木戸は、後を振向いて、

『松ツ』

『ハイ』

『豫て、お前にも話した、文久三年の夏の騒ぎぢや。あの時に、俺が、あれまでの苦みを見た、それは、此御方の、智慧の蛛網に引掛つて、到頭、拔差ならぬ躬の窮迫から、お前にも、甚太い厄介は掛けたが、今から思へば、夢のやうぢやのう』

『それでは、あの時に、御話のござりました、秋月樣と仰しやるのは、此御方でござりますか』

『さうぢやよ』

秋月は、不審の思ひ入で、

『して、奥樣は、京都の御生れでござりますか』

木戸は、輕く頷づいて、

『如何にも、三本木に、卑しい稼業をして居つた。幾松は、之でござるよ』

『偖は、三本木の名妓として、全盛を極めた、幾松殿でござつたか。一兩度は、酒宴の席で、御目に掛かつたが、頓と、御見忘れをして、甚だ失禮をしました』

松子は、顔を眞赤にして、

『御恥しうござります』

『何の恥づる事が、ござりませう。浮川竹の卑しい稼業は、爲て居ながらも、あれまでに、木戸氏に、操を立てゝの御働き、新選組の者どもゝ、當時の貴女には、舌を卷いて、驚いて居りました』

『何う致しまして、女だてらに、御恥しうござりました』

是から、酒肴の用意が出來て、三人は、快う盃を取交した。

秋月は、安心の胸を撫下して、故郷の會津へ、晝夜兼行で、引返したのである。

一二

秋月が、歸つた後で、木戸は、熟々考へた。維新の大局に、唯一歩を誤つたばかりで、德川全盛の時代に於ける、東北第一の親藩たる、會津侯ですら、今日の境遇に陷るのだ。それに付けても、文久の昔を思ひ出せば、あれまでに追詰められた、毛利藩が、よくも其窮境を脱することが、出來たものだ。今や、薩藩と相携へて、新政府の實權は、全く二藩の手に、あるのぢやが、併し、それにしても、未だ全く安心といふ、場合には、ならないのだ。時勢の推移と、朝廷の御威光を、笠に冠つて、一芝居打つた。それが、美事に當つて、今日の舞臺には、なつたのであるが、其壓迫を受けて、泣く〳〵從いて來た、諸藩の間には、尙ほ、舊幕の時代を、夢見て居る者もある。是から先、尙ほ進んで、廢藩の事も、行はねばならぬ。王政復古の實を擧げるには、樣々のこともして、掛からなければならぬのであるが、其度毎に、天下は動搖して、どれ程の苦みを見るか、判らないのだ。就いては、維新の際に、唯一歩を、踏迷ふた爲に、會津侯と、同樣な運命に、陷づて居る者もある。それ等の人を追窮して、嚴重に處分して行く、といふ事になれば、自然と、人心が、新政府を離れやう。斯かる場合には、何うしても、德を施して置くが、肝要だ。されば

とて、十分の名義が立たないのに、會津侯を許す、といふ事になれば、素直に附いて來た、諸藩の間に、不平も起らう。それ等の事情も、斟酌して掛からなければならぬのであるから、同情はして居るやうなものゝ、此處分は、非常に困難の事である、と、木戸の苦勞は、又一つ殖えたのである。

四五日經つてから、氣分も好くなつて來たし、病氣も、輕くなつたやうに思はれるから、もう大槪にして、東京へ歸らう、と、考へた。

『松ツ』

『ハイ』

『俺の體も、此位になれば大丈夫だから、東京へ歸らう、と思ふが、お前は、もう少し保養をして行くが可い。何うぢや』

『イエ、郎君が、御歸り遊ばすなら、私も、御一緒に參ります』

『俺に、遠慮は要らぬのぢやから、お前も、多少の疲れはあらうから、保養して行つたら、何うぢや』

『何う致しまして、郎君を、御歸し申して、私が、暢氣に保養などは、爲て居られませぬ。それにしても、郎君は、さう輕卒になすつても、もう宜しいので、ございますか』

『ウム、自分の心持で、もう大丈夫と、思つて居るのぢやから、宜からう』

『萬一、東京へ、御歸り遊ばしてから、復逆返へすやうな事が、ございますと困りますから、郎君こそ、當分の間、御保養遊ばしては、如何でございますか』

『そりやア、もう少し居たい、といふ氣もあるが、お前が、知つて居る通り、西郷さんは、國へ歸つて居るし、萬事は、大久保さん一人で、切つて廻して居るのぢや。政務の上に、心配は無いけれど、詰らない事にも、目眦を上げて騷ぐ、若い國の連中が、俺の居らない爲に、薩摩の人と爭ひでも起すと、面倒ぢやから、寧、歸つて見やう、といふ氣になつたのぢや』

『昔からの、御苦勞に引續いて、未だ今日のやうな、「世の中になつても、御苦勞が絶えない、とは、何といふ事で、ございませう。それでは、御體が、堪りませぬね』

『イヤ、男といふものは、心配する事が多くて、始終、働いて居れば、却て丈夫になるものぢや。病氣は、詰り心の弛みから、出るのぢやからな、ハツハツハツ』

『それ程に、仰せ遊ばすなら、御歸りの支度に、掛かりませうか』

『ウム、さうして貰はう』

折柄、廊下へ、バタ〳〵といふ、足音が聞える。木戸夫婦が、振返つた途端に、障子が、サツと開いた。

『一寸、申上げます』

『ウム、用事か』

『ハイ、唯今、御訪ねになつた方が、ございまして、是非、御目に掛りたいから、さう申して呉れ、と仰しやつて、御出でゝございます』

『フヽム、して訪ねて來た人と、いふのは、名前は、何といふのか』

『廣澤樣と、仰しやいました』

木戸は、暫く考へて居たが、

『廣澤、ハテナ、兵介が、豈夫に來る譯もなからうが……ウム、兎に角、此方へ通して呉れ』

『ハイ、畏まりました』

下女は、足音高く、向ふへ行く。後影を見送つて、木戸は、獨語のやうに、

『可怪な事ぢやな、まさか通知もなく、廣澤が、來る譯も無からう。それともに、何か面倒な事でも出來たか』

松子は、手廻りの荷物の、支度をして居ながら、

『本當に、御心配の事ばかりで、困りましたねエ』

『何、まだ心配か、何か、會つて見なければ判らぬ。存外、面白い事で、來たかも知れぬよ』

所へ、案内をされて來た、人を見ると、旅僧の姿で、而も二人連だ、一人は、見覺えのあるやうだが、確と記憶は無い。坊さんだけに、木戸は、一段の疑ひを以て、迎へた。

『サアー、之へ何うぞ、御通り下さい』

二人は、纔に閾を跨いで、室の入口に、ピタリと坐つた。

『久しう、御目に掛かりませぬ。相變らず御機嫌で、何よりの儀と、存じまする』

『エツ、甚だ御無禮ぢやが、御顏に見覺えはあるが、確と何方か相判らぬ。して、貴僧は』

「御見忘れなさるも御尤、手前は、舊會津の藩士、廣澤富五郎でござる』

『ヤツ、貴殿が、廣澤氏であつたか、サアー、先づ之へ』

と、木戸が、自ら座蒲團を取つて、上座へ直さうとする。廣澤は、頻に辭退して、

『イエ、それでは、却て恐入る。之にて御免蒙ります。昔と違ふて、今日では、日蔭の身でありますれば、結句、此方が勝手でござります。就きましては、御紹介申しまするが、之に同道いたしました者は、矢張り同藩士の小出哲之助と申しまする者、何分、御見知り置かれて、今後とも、宜しく御願ひ致しまする』

『ハ、ー、初めて御意得申す。拙者は、木戸孝允でござる。未だ桂小五郎の昔、廣澤氏には、色々と、御引立てに、預つたものぢや』

『何う致して、御引立て申したなんぞとは、飛んだ事で、却て、あの砌には、時の勢ひとは申しながら、御無禮のみ働きまして、定めて御恨み下された事と、存じまする』

『何の、あれしきの事に就て、明治の今日まで、恨みを遺す程に、小さな心でも、ござらぬ。マアー、それ等の事は、後の話といたして、之へ御進み下され』

餘りに進められるので、二人も、稍々席を進んで、

『實は、折入つて、御願ひの申上げたく、厚顏しくはござれど、態々、御訪ねいたしました』

『して、何ういふ御用か、一應伺ひませう』

一三

木戸の、胸の中では、此兩人が、斯うした姿で、態々、自分を、訪ねて來たのは、無論、藩主の罪を謝して、朝廷へ、御取成を頼む爲に、來たのである、といふ事は、判つて居たが、先づ何ういふ事を言ふか、一と通り、それを聽いてみたい、と思つて、秋月に、面會した事なぞは、噯にも出さないで、廣澤の發言を、待つて居るのだ。

『今日に相成つて、斯やうの儀を、申出づるのは、如何にも御恥しき事ながら、主家の存廢に拘る、一大事で御座れば、手を組んで、傍觀もなり難く、樣々に協議を盡して、拙者と小出の兩名が、斯かる姿で、御訪ね致した次第でござるが、實は、藩主容保儀、長く王師に反抗して、あれまでの戰ひを、致したる以上は、武士の面目として、此世に長らへる、所存の無きは、勿論なれど、詰りを申せば、我々、左右に居りまする者が、時勢を觀るの明なく、唯、德川宗家と、斷ち難き、因緣を思ひ、只管、幕府の再興を夢みて、あれまでの戰ひは、致しましたやうなもの、今になつて思へば、主人容保が、苦しき意中を推し測つて、何分にも其儘に、致し置き難く、我々共の生命に代へて、主家の存續が、出來まする事ならば、何時にても、切腹いたして、朝廷への申譯は、致す積りでござるが、何とか、尊公の御取成しを以て、主家の存續致すやうな、御取計ひの儀は、願はれまいか』

と、誠を表に現はして、哀訴されて見る、と、無下に、それを斷る、といふやうな、心にはなれない。のみならず、

前以て、秋月から、十分に話込まれてあるのだから、尙更に、廣澤の苦しい立場も、考へて見て、何とかしてやらう、といふ考へは、既に付いて居たのだ、が、自分の一存を以て、請合ふ事は、固より出來ぬ筈であるから、

『イヤ、段々の御話は、よく相解つた。會津侯の御意中も、深く御察し申すが、今後の御處置に就ては、固より朝廷の思召し、一つにある事で、我等が、立入つて、彼是申すべき事もならぬ次第ではあるが、西鄕や大久保の考へも、ござらうから、兎に角、拙者より、兩人へは、然るべく取次いで、成るべく、穩便の御沙汰があるやう、御取計ひ申さう』

文久の政變に際しては、自分と秋月の兩人で、此人を、ヒドク苦しめたのであるが、更にそんな事を、思ふて居るやうな、樣子もなく、虛心坦懷、昔の恨みを忘れて、快く賴みを、受引いて吳れたのは、流石に、當時の三傑として、今、飛ぶ鳥を落すやうな、勢ひを有つて居る、木戶だけの事はある、と、坐に廣澤も感心して、暫くは言葉もなく、木戶の樣子を、見て居た、小出も、膝を進めて、是から段々と、賴み込んだから、木戶は頷いて、

『もう、其事に就いては深く伺はずとも、我輩の心には、聊か期する事もあるから、處心配なく、御引取り下さい。併し、久振りの再會ぢやに依つて、今、酒肴の用意も、させてあれば、緩り話して、御別れ申すことに致さう』

重ね〴〵、優しい扱ひに、兩人は、淚の出る程、嬉しかつた。

彼是する中に、酒肴は運ばれる、妻の松子が、盃盤の周旋をして吳れるのだから、痒い所に、手の屆くやうな、扱ひ振は、流石に、幾松の昔が偲ばれて、廣澤等も、其時分の話をし掛ける。松子も、當時の事を物語つて、頻に興に入つて居る。木戶は、盃を取つて、廣澤に献した。

『時に、廣澤氏』

『ハツ』

『秋月氏は、今如何にして居られるか、其後の消息は相判らぬが、矢張り、國許に御居でゞござるか』

廣澤は、俄に心配さうな、顏色をして、

『其儀に就ては、小出と兩人、頻に心を苦しめて居るのでござるが、我等同樣に、朝廷へ嘆願の途を開かう、とて、既に國許を去つてから、一月餘り、其後の消息が、更に無き故、我等も、斯やうに打揃ふて、上京いたした次第でござるが、其後の秋月は、何と致したか、一向に便りも無く、まさかに、變心をするやうな人ではなし、されぱとて、梨の礫の音沙汰無き所から、考へて見る、と如何にしたか、其邊の事も心配でなりませぬ』

『ハ、ア、而て見ると、秋月殿も、矢張り御相談の上で、上京せられたのか』

『無論、左樣でござります』

『さうでござつたか、とは、聞いて居つたが、如何かと思ふて、ツイ御尋ねしたのぢやが、秋月殿は、無事息災で、御暮しになつて居るから、御安心なされ』

『エツ、秋月は、無事息災で居りまする、と、さては、尊公、何方かで、秋月に、御會ひになりましたか』

『如何にも會ひました。而も、此座敷に於いて、兩三日前に、面會いたした』

意外の答へに、兩人は、顏を見合せて、膝を進めた。木戶は靜かに、

『實は、充分の御懇談をいたして、御別れしたのだが、御手前等と、何ういふ關係に、なつて居るか、其邊の事が、相判らぬに依つて、甚だ御無禮ながら、聊か試みたのぢやが、其御返事に依つて、安心致した故、秋月の御出でた事も、打明けた次第ぢや』

そこで、兩人も、大に安心して、十二分の馳走になり、後日の事までも賴んで、會津へ、歸る事になつた。

それから、幾日かの後に、木戶は、東京へ歸つて來て、段々、大久保にも會ふて、事情を話し、それ〴〵の路を渡つて、朝廷の御情に依り、何かと宥恕の途が、開けるやうにしてやつた。先づ取敢へず、三千石を與へて、朝廷の御沙汰の下るまで、當分は、謹愼して居れ、といふ事に計らうたのは、多くの家來が、尙、會津侯に、附いて居るのだ

から、其食扶持として、三千石を與へる事にしたのだ。木戸以外の人も、大きい心を以て、會津侯を、救ふ考へには、なつたのであるけれども、兎に角、斯うした事情から、木戸が、會津侯を、專ら救ふ事に盡力したのである。文久の昔を言へば、會津侯の骨を、ソツプに煮出して、飲んでも慊らぬ程に、ヒドク窘められたのではあるが、其恨みを忘れて、木戸が、會津を救ふことにしたのは、洵に美談として、後世に傳ふべき事だ。是が原因となつて、會津侯は、今尙ほ華族の班に列して、立派に其跡は、遺る事になつた。

長州藩の脫兵騷動

一

明治元年の九月二十六日に、第一回の論功行賞があつて、其際に、木戸は、從三位に叙せられ、賞典祿は、千石以上を、賜る事になつた。昔を洗へば、毛利藩の醫者の倅で、更に桂といふ侍の家へ、養子に行つた身が、如何に、風雲に際會して、立派な功を、立てたにもせよ。一躍して、從三位の肩書を得て、殆ど毛利侯と、肩と並べる程の、位地に昇つたといふのは、無上の出世と、言はねばならぬ。而も、天皇陛下の御前にあつて、天下の大政に參與するといふ今にして思へば、當時の木戸は、何れ程、得意であつたらうか。

然るに、木戸は御賞與の御沙汰に對して、再三辭退した、といふ事實がある。けれども、朝廷は、其辭退を許さず、木戸は、止むなく御受けをして其職に止まつた。

何時の時代でも、大きな事變後の、論功行賞に就ては、何うしても、幾分かの不平は免れない。隅から隅まで、論功行賞が、公平に行はれる、といふやうな事は、望んで得べからざる事である。日淸日露の戰ひの時分にも、矢張りそれに就ての不平は、あつたのだ。唯、表面に現れないで、上手に押へてしまつたから、そんな事は、無いやうに見えるが、其實を言へば、隨分、激しい不平はあつたのだ。何れ程、注意しても、多くの人の働きを、細かく知る事は

出來ないものである。

又其間には私心を以て、人の功罪を曲げて、報告する者もあるから、自然、論功行賞が、公平に行はれる筈のない事は、苟も當時の事情を、調べて見た者ならば、直に判る筈だ。

それであるから、維新の當時にしても第二回、第三回の追賞が、行はれた位であるが、尙ほ、それでも、不平は絕えなかつた。西鄕は、早くから、之を見拔いて、朝廷が、容易に御許しが、無かつたにも拘らず、强て職を辭して、鹿兒島へ、一度引籠つたので、辛うじて、其失態を、世間へ知らせずに濟ました。けれども、木戶には、其心はあつたが、西鄕程に重くは考へて居なかつたので、長州藩の內訌は、段々高まつて來て、遂には大爆發を爲るまで、手を着けずに置いたのは、木戶の一大失策であつた、と思ふ。

尤も、西鄕は辭しても、大久保は、殘つて居るから、薩藩の方には、强味はあつたのだが、長州藩の方では、木戶が退くと、其後を引受けて、薩藩に、對立して行く者が無かつた、といふ事も、木戶をして、大決心を以て、職を退き、國へ歸る事を許さなかつた、といふ。玆に特別の事情も、あつたのだが、兎に角、長州藩に、論功行賞の不平から、私鬪が起きた、といふのは、維新の功業が、長州藩に、あれだけあつたにも拘らず、此一事だけは、確に失策であつた、といふの外は無い。

殊に、隊士の間に於て、信用の厚かつた、山縣有朋は、旣に洋行の途に、着いて居つたし、山田顯義は、東京へ出た切り、國へ歸らぬ、といふやうな譯であつたから、自然、國許の方には、不平連中を取締る、といふやうな者も無く、敢て放任して置いた、といふ次第でも、なからうが、取締を怠つた、といふ事は、言へるのだ。

玆に、富永有隣と、いふ者があつた。極めて智慧が深く、常に奇策を弄して、屢々、人を驚かす事があつて、藩の重役にも、其爲人を見込まれて、幾度か、重く用ひられた事もあるが、餘りに覇氣に富んで、野心が多かつた爲に、遂には遠ざけられて、不平の中に、日を送る事になつた。

學問も、充分にあるし、智慧は深い、といふのであるから、初は重寶がられて、人にも喜ばれたが、少し長く交際つて居る中には、厭きられてしまふ。才に委せて、事を遣り捲くる、といふ所から、幾分か、人を輕んじて、高慢な所がある。其上に、品行が修まらないで、屢々、醜聞を、人に傳へられて、果ては、親類預けになつたり、或は、野山の獄に投ぜられて、謹愼させられた事もある。

其時分に、吉田松陰が、江戶から送還されて、野山の獄に入れられた。不圖も、有隣の居る室の、直ぐ隣に、入れられたのである、が有隣の才智を、活かして使へば、物の役に立つべき者だ、といふ事を見込んで、松陰が、隣室に居るのを幸ひ、屢々、書面を送つては、有隣を戒めた事がある。初めの中は、有隣も、深く心には、留めなかつたが、松陰が、赤誠を以て、戒めて吳れる、其親切に動かされて、遂には性質が一變して、松陰に依つて、事を成すの考へが、起つて來た。

其中に、松陰は、牢から出されて、親類へ預けられた。松陰の、身體の自由が、利くやうになつた所から、有隣をあの儘に、獄中に置くのは惜しい、といふ考へがあつたので、重役の間を奔走して、到頭、有隣を、救ひ出して、松下塾に置く事にした。

それからの有隣は、全く生れ更つたやうな人になつて、同人の間にも、推重されるやうになつた。所が、松陰は、安政六年の五月になつて、井伊大老の爲に、江戶表へ引揚げられて、遂に刑殺されてしまつた。

それから後、有隣は、再び舊の不身持に復つて、晝夜、酒色に親しみ、放縱な生活を、續けるやうになつた。

二

學問もあれば、武藝も出來る。武士一人としては實に立派なものではあるが、素行が修まらぬ爲に、有隣の信用は薄くなるばかりであつた。

けれども、本人は、存外に傲岸不屈の所があつて、縱令、多少は、さういふ傾きのある、といふ事は、知つて居ても、今更に、素行を改めて、人の信用を回復しやうとは、考へず、又、自分が、素行の一點から、多くの人に、忌まれて居る、といふ事なぞは、勿論、考へても居なかつた。

元來が、何事に付けても、人一倍の使途には、なるのであるから、維新の際にも出役して、相當の功勞は、立てゝ居る。所が、先輩の間に於ては、甚だ不信用であつたから、有隣の功勞は、認めて居ても、更に重く用ひて、他日の用に當てやう、とするものはなかつた。從つて、論功行賞の際にも、有隣は、遂に省かれて、殆ど路上の人を見るが如き、嚴しく排斥してしまつたので、有隣の不平は、日一日と、昇まつて行くばかりであつた。

自分の不行品から、斯ういふ風に、一藩の人の、氣受けが惡くなつた、といふ事は、少しも省みず、同僚は、自分の、器量を忌み、先輩は、自分が、頭を持上げるのを、邪魔にして、無理に押へ付けてしまうものである、といふやうな、勝手な解釋をして、

『よし、さういふ仕向けを爲るならば、自分の方にも、自ら考へがある。何かの機會に於いて彼等を、苦しめてやらう』

と、いふやうな考へになつて、密に其機會を、窺つて居た。

新政府が、出來た初は、殆ど火事が鎭つた後のやうで、其混雜は、一と通りでなかつた。一般の人に對する、論功行賞の如きも、甚だ不公平で、隅から隅まで、行屆いて、誰一人として、不平の者が無い、といけやうな、仕向は出來ないのであるから、各所に、不平が、起きて來た。それは、長州藩ばかりではないが、殊に、長州に於て不平連は多かつた。

西鄕は、一旦辭職して、薩摩へ歸つてから後、更に朝廷の御召出しに依つて、再び朝臣となつた。其時、國許から率ゐて來た、兵士が、後に宮闕を守護する、御親兵になつた。土州と長州の二藩からも、同じやうに、御親兵を選拔

する事になつた。是が、近衞兵の基礎に、なるのであるが、兎に角、さういふ譯で、三藩から、相當の人數を引出して、組織する事になつたが、其際にも、長州藩士は、自分こそ、御親兵の列に加はるものと、思つて居た者が、存外に省かれたので、其不平が、强くなつて來た。尤も、御親共といふても、人數に限りがあるのだから、藩士の總てを連れて行く、といふ事を出來ないのだから、取殘された者が、不平を言ふのは無理のやうではあるが、實は、先輩が、豫め其不平を察して、調和の策を、取つて置かなかつた、といふ、手落もあるのだ。

此機運を見て、有隣は、窃かに喜んだ。愈々、我時來れり、といふやうな考へで、窃かに同志の糾合に掛かつた。時に、有隣と、同じやうな境遇になつて、不平を懷いて居る者は、澤山にあつたが、其中に於ても、大樂源太郎が、有隣と、意氣が投じて、屢々、往來するやうになつた。

今日も、有隣の宅へ、大樂が、やつて來て、頻に密議を、凝して居るのだ。

『時に、富永、唯徒らに不平ばかり、唱へて居ても、詮の無い事であるから、何とかして、我等の乘ずべき、機會を作らねば、面白くないと思ふが、足下は、何う考へるか』

『そりやア、無論、それに違ひない。全體、藩の先輩面をして、木戸を首め、一時の僥倖を私した、奴等が、時を得顏に天下を横行して居るのを、見るに付けても、胸の痛くなる程、不平は重るのぢや。彼等が、維新の大業を、己等の手並でやり、遂げたやうに、考へて居るのが、間違ふて居るのぢや。自分が、危い時は、彼方へ逃け、此方へ隱れして、愈々、時運が、廻り來た、と見て、何處からか、現れて來て、其儘、他人の舂いた餅を、盜つて食ふた、といふ。其狡い遣方に對しては、充分に遣付けてやらぬ、と、我等と、同じやうな不平を、懷いて居る、一般の藩士の將來にも、害をなすだらうと思ふから、此際、一と奮發して、風雲を捲起してやるが、よいのぢや。それに、此不平は、我藩ばかりでなく、何れの藩に行つてもあるから、我等の遣方さへよければ、各藩の不平黨は、一時に勃然として、起つて來るに、違ひない。さうなれば、望みの通り、天下大亂になる。それから先は、我等の腕次第

で、僅かの功勞に、安逸を、貪つて居る、木戸や廣澤の一派が、尻尾を捲いて、逃廻るのを見るのも、一興ぢやらうよ。ハツハツハー』

昂然として、言放つた。有隣の一言には、何處となく、生氣がある。縦令、言ふて居る事は亂暴であつても、聞いて居る、大樂としては、此位に愉快な事はない。そこで、大樂も膝を乘出して、

『それに就て、斯ういふ輩を、考へて居る。今國に、取殘されて居る、藩兵に、不平の奴が多いのだから、隊長から隊長へ、連絡を取つて、其指揮の下に、藩兵を、悉く脱走させる、といふ事が、最も妙策だ、と思ふが、足下は、何う考へるか』

『ウム、それぢや。それより外に、方法は無い。併し、それが、巧く行かうか』

『そりやア、巧く行くも、行かぬもない。豫て、此心があるから、拙者は、それ〲隊長の中でも、不平の强さうな奴を押へて、旣に説付けてあるから、愈々、足下が、宜いと思ふならば、一夜、何處かの酒樓で、足下と、其隊長と會見して、拙者が、立會になつて相談したら、それて、直に決する事だらう、と思ふ』

有隣は、膝を打つて、

『さうなれば、此上もない。是非、纏まりを付けて貰ひたい。拙者には、又其以外に、力を貸す者も、あるのぢやから、其取計らひだけは、仕て貰ひたい』

『宜しい。それでは、直に掛る事にしやう』

其晩の相談は、それで終つて、是から大樂は、不平を唱へて居る、名隊の連中に、段々、連絡を付ける事にした。元來が、其考へがあつて、平生から、世話をして居た、といふやうな點もあつて、忽ちに不平連の、聯絡は付いてしまつた。是が有名な、長州藩の脱兵騷ぎ、といふ事になるのだ。

三

大樂は、梅田雲濱の門人で、文筆の才は、非常にあつた。殊に、辯舌に巧で、論議縦横、勢ひに乘つて、辯じ立てると、何んな者でも、心を動かす程に、人を説くに、巧であつた。併し、惜しい事には、幾分か輕躁の點があつて、落付いて事を爲る人とは、いへなかつた。雲濱の門人としては、あまりに輕躁で、且つ浮薄にすぎる點が、多かつた。要するに、雲濱の學問は、うけついたが、人格には、少しも觸れなかつたらしい。

雲濱は、若州小濱の浪人で、曾ては、江州大津の、上原甚太郎の門に入つて、陽明學を學んだ。上原は、當時の陽明學者としては、なか〲評判の人であつた。性質は、嚴格にすぎて、氣難しい所はあつたが、併し、人に接しては暖味のある、大人の風もあつた。多くの門人の中で、一番の氣に入りが、梅田源次郎である。

梅田が、嚴格な態度で、却々、人に許さなかつた、といふ點は、確に上原先生に、私淑する所があつて、性質の一部が、似通ふたものだらう、と思ふ。雲濱は、非常に美男子で、何うかすると、人の噂にも上る位に、容貌が好かつた所から、同窓生の間で、頻に疑ふて、雲濱の秘密を探らう、とした。けれども、遂に異性に、關係して居た、といふやうな事は、無かつた程に、嚴格な性質であつた。學問も、門人の中では、一番に出來たし、先生の氣にも、入つて居たのだ。

然るに、誰言ふとなく、梅田が、或家の娘と、通じて居る、といふやうな噂が、ぱツと立つた。初の中は、梅田も、知らなかつたのだが、段々、人の噂するやうになつてから、漸く自分も氣付いて、甚だ怪しからぬ事だ、と思ふけれども、人が勝手に噂するのは、何うも致方が無い。自分が探りを、入れて見る、と、其問題になつた、娘の家も判つたから、或日、學業の餘暇に、散歩に出掛けて、其家の前を、行きつ、戻りつして、居る、と、軈て、窓の障子が、

さツと開いた。振仰いて見れば、妙齢の美人が、顔に紅葉の色を散して、恥し氣に、源次郎の姿を、眺めて居る。ハハー是だな、と思ひながら、行過ぎやうとした。後の方で、チリーンと音がしたので、梅田が、振返つて見ると、其娘が、簪を、窓から落したのだ。思ふに、拾つて呉れ、といふ謎であらう。偖は、さういふ所から、因緣を付けて、掛り合ふのだな、と、疾くも、それと悟つて、梅田は、非常に憤慨した『さても怪しからぬ、妖女である。身は深窓の下に、人となつた良家の少女でありながら、是までに、厚顏しい振舞をするのは、平生の品行も思はれて、汚らはしい女である。よし、それならば、其やうに此方でも、斷りの仕樣がある』と、ツカ〳〵と、窓の下へ、進んで來た。袴の紐を解いて、手早に、脫いてしまつた。娘の方では、變な事をする人だ、と思ふて、見て居る中に、クルリと、裾を捲つて踞む、と、洵に汚い話だが、黃金色の左捩りを一山、異臭、鼻を打つて、迚も見て居られるものでない。娘は、ピタリと、障子を閉めて、姿を隱した。源次郎は、ニヤ〳〵笑つて、其儘、塾へ、歸つて來た。

何んなに、惚れた女でも、斯んな馬鹿な事をされたら、大抵、愛想を盡して、しまふだらう。梅田が、女に想はれたのを斷るに、口を利かずと、尻で用を達した、といふのは、如何にも、奇拔な遣方ではないか。それから後は、其女の事に就て、惡い噂は、バツタリ止んでしまつた。

梅田は、物堅い性質であつたから、上原先生も、深く見込んで、將來、此塾を讓るべきは、梅田の外には無い、といふ事は、動もすれば、親友の間に、口走る位であつた。

人間は、病の器といふが、全く其通りである。今日は、達者で居ても、明日の事は、計り得ない。上原は風邪の心地と、床に臥したのが因で、日一日と、病勢は、惡くなつて來た。多くの門人は、よく看護にも努めたが、もう回復の途は無い、と、醫者も、匙を投げてしまつた。別けて、梅田は、寢食を廢して、看護の勞に、當つて居た。或る時、枕許へ、梅田を呼んで、

『俺の生命も、旦夕に迫つて來た。就ては、お前に賴みがあるが、聽いて呉れぬか』

『先生、氣の弱い事を、仰しやつてはいけませぬ。醫者も、御重體とは申して居りますが、全然、見込みがないとは、未だ申して居らぬので、ございますから、昔の諺にも、病は氣から出る、といふて居る位で、平生の御氣象にも似合はず、そんな氣の弱い事を、仰しやつてはいけませぬ。御氣を丈夫にして、一日も早く、御回復を祈ります』

『イヤ、迚もいかぬ。多くの門人を集めて、古人の道を傳へる事を、職分として居る者が、自分の生命が、旦夕に迫つて居る事を、知らぬ筈はない。もう、俺は、駄目なのであるから、そこで、お前に賴むのぢや』

斯う言はれて見る、と、梅田は、一言も無い。實は、先生の生命は、もう兩三日の中に、迫つて居るのだ、といふ事を、醫者から、聞いて居るので、胸が一ぱいになつて、何と答への仕樣もなかつた。

上原は、早く妻を失ふて、たつた一人の娘がある。其娘が、可哀といふ爲に、後妻を迎へずに、獨身で居たのだ。父の病氣に、顏の窶れる程心配して、枕許を離れなかつた、娘の信子も、聽いて居るのだ。上原は、絲のやうに、細くなつた腕を出して、娘の手を、確かり握つた。

『諸、源次郎、お前に賴み、といふのは、外の事でもないが、此塾を讓らう、とするのは、お前の外に無いのぢやから、是非、引受けて貰ひたい。それについては、娘の信ぢやが、お前の一生の妻として、娶つて呉れるやうに、俺から、賴み入る』

明白に、斯う言はれては、源次郎よりか、娘の信子の方が、何の位、體裁が惡いか、判らない。心配の中にも恥しい、といふ氣はある。眞赤な顏をして、下を向いてしまつた。源次郎も、此道に掛けては、極めて初心なのだから、同じやうに、下を向いて居る。

四

暫く經つて、源次郎は、頭を上げた。

『先生の仰せでは、ござりますが、なか〳〵以ちまして、私、風情が、此塾の後を繼ぐ、といふ事には、なりませぬ』

『そりや、何ういふ譯ぢや』

『別に、何ういふ譯といふて、仔細はありませぬが、私如き、未熟な者が、先生の御後を、引受けた所で、門人が、承知するものでは、ございませぬ。却て先生の御名を、辱めるやうな事があつては、一大事でございますから、御辭退申しまする』

『イヤ、其遠慮には及ばぬ。弟子を見ること、師に如かず、といふ格言もあつて、俺の眼から見れば、お前の外に、此塾を讓るべき者は無いのぢや。見非、引受けて吳れ、若し、お前が、承知して吳れぬ、と、可惜・今日まで築き上げた、塾を潰すやうな事にも、なるのぢやから、厭ひもあらうが、承知して貰ひたい』

暫く考へて居た、源次郎は、

『それまでに、仰せられる事ならば、止むを得ませぬから、御引受いたしますが、返す返すも、未熟な學問を以ちまして、先生の御後を繼ぐ、といふ事は、難しいのでございますが、それまでに仰せられる、御心に從ふて、引受けは致しませう』

『ウム、それを聽いて、俺も安心ぢや。就ては、娘の方は、何うして吳れるか。それも、聽いて置きたい』

『最前から、段々と、有難い思召で、ございますが、私は、少しく心に期する所が、ござりまして、尙ほ一兩年は、妻を迎へぬといふ、覺悟に、なつて居るのでございますから、其事だけは、平に御免を蒙りたう存じます』

『フ、ム、さういふ心願が、あつての事ならば、止む事を得ないが、今が今、直に同棲しろ、といふ譯ではない。一年でも、二年でも、お前が、待てといふまでは、娘にも待たせるから、承知したといふ一言だけは、聽かせて貰ひたいのぢや』

『先生が、左樣に仰しやつても、御本人が、御承知下さらねば、此事は行はれないのでございますから……』

『ウム、それも、さうぢや。少し待つて居て吳れ』

と、言ひながら、娘の方へ向直つて、

『これ、何うぢや。今、聞いて居るやうな次第ぢやが、お前は、何う考へるか』

總て、斯うした事は、世間一體に、女親の役目に、なつて居て、それも、對手になるべき男が、居ない所で、密と聽くのだから、娘の方でも、直に返辭はするが、如何に病氣で、旦夕に迫る生命である故、此場で極めるのが、肝要だとはいふやうなものゝ、自分の眼の前に、婿さんと、なるべき人が、坐つて居る。そこで、一年なり、二年なり、待つた後に、同棲するといふのを、お前は、何うかといふて迫られても、直に返辭が出來る程に、輕躁な娘なら、迚も、其長い月日を、待つて居る譯もなく、それの待てるやうな、堅い娘なら、卽座に、返辭の出來る筈は無い。信子は、顏ばかり赤くして、下を向いて、更に答へがない。上原は、幾らか焦込んで、

『何故、返辭をせぬ。お前の答へ一つで、此塾が、立つか立たぬかの、瀨戶際ぢや。何分とも、返辭をしたら宜からう』

再三迫られて、信子は、

『ハイ』

と答へた。

『ハイと言ふのは、承知した、といふ譯か』

『ハイ』

『よし、それで、話は解つた』

梅田の方へ、又向直つて、

『お前も、聽いて居る通りで、娘は、承知したのぢやから、何うか、末長く添ひ遂げて吳れるやうに、賴み入る』

『それまでの仰せで、御孃さんが、御承知とあるならば、私に於ても、違背はござりませぬ』

『オー、それを聽いて、俺も安心ぢや。今直に眼を眠つても、思ひ殘す事は無い』

喜びの中にも、眼には、涙を湛へて居る。

それから、上原の枕許で、ホンの盃事の眞似をして、其日は、過ぎてしまつた。翌日の明方に、先生は、遂に眼を眠つた。前以て、門人を呼んで、其事は、申し聞かせてある。其日から、門人一同は、梅田を以て、若先生として、從ふやうになつた。梅田の平生が、行ひ正しく、學問の出來も、正に良かつたので、迚も、自分達は及ばない、といふ事を、認めて居たから、存外に、後の纏まりは宜かつた。されば、上原の葬儀が、終つた後に、梅田は、塾の主人となつて、引受けた後も、段々、塾は榮えて來た程である。

所が、それは唯一時の事であつた。實を言へば、門人の中にも、二三の善からぬ奴があつて、頻に梅田の惡口を言ふては、外の溫和しい、門生を唆すのであつた。初の中こそ、そんな事は、受付けずに居た者も、色々な方法で、煽られて來ると、惡い方には、導かれ易く、一人減り、二人減りして、段々、門人は減る。遂には塾の維持も、出來ない程に、少數の門人に、なつてしまつたから、元來が、正直で、疳積の强い、梅田としては、もう堪へられなかつた。上原先生は、多年の功で、門人の扱ひ方が、巧かつたけれども、梅田の方は、何分にも書生上りで、一足飛の塾長である、何うしても、ヤンワリと、人に當る事が出來ない。元來が、嚴格な性質とて、隨分、門人に向つては、敎授の場合にも、荒々しい叱言を、言ふことがある。そんな事も、不人氣の一つとなつて、何時か、上原塾は、閉鎖の外ない、非運に陷つてしまつた。

折柄、京都の友人で、二三の者が、訪ねて來て、頻に京都へ移つて來いといふて、勸めるのであつた。

『お前が來る、といふならば、我々が周旋して、例の望楠軒へ、入れるやうにするから、是非、さうしたら何うだ』

と言はれて、梅田の意は動いた。大津では、維持が付かなくなつた、折柄であるから、喜んで、其の勸めに從ふ事になつた。幾日かの後に、妻の信子を連れて、京都へ出ると、望楠軒に移つた。

望楠軒は、小濱藩の學塾でなつた。梅田が、小濱の出身であり、亡父は、藩士の一人であつた、といふ關係から、斯うした事にはなつたが、それも束の間で、梅田は、藩政改革の意見書を、酒井侯へ、上つた一條から、望楠軒を、逐はれてしまつた。

五

京都へ出てから、梅田は、追々と、交際の範圍が、廣くなつて來た。賴三樹三郎、藤森弘庵等を首め、諸藩の有志や、公家の諸大夫とも、交際するやうになつて、漸く諸人からも、重く視られて來た。元來が、朱子學を修めて、更に陽明學へ、移つて來たが、其上に、和學の造詣も深く、上原の塾生であつた時から、勤王の志は厚かつた。

京都へ移つてからは、勤王派の志士と、交りが多くなつて來たから、益々、勤王の志は、固くなつた。從つて、幕府に對する、憎惡の念が、深くなつて來て、盛に討幕論を、唱へるやうになつた。殊に、開國保約の一條から、朝廷と幕府の間に、火を擦るやうな、交渉が起つた。それ等の關係から、勤王派の唱へる、討幕の說が、强くなつて來る。梅田の如きは、最も激しい議論を、唱へる一人であつて、幕府の方からも、今の言葉で謂ふ、注意人物の一人に、なつて居たのである。

其平生が、最も眞面目な人であつたから、從つて、華奢風流の遊びなどは、絕えて爲なかつた人だ。

『苟も、天下の志士たる者が、遊里に出沒して、卑むべき遊女に、接近するとは怪しからぬ』

といつて、同志の浪人を、戒める事なぞがあつて、それが爲に、同志の中では、梅田を、敬遠するものもあつた。長州の久阪玄瑞は、年齢も若く、廿歳を超えたばかりで、殊に、才氣の走る男だけに、遊びの方にも、なか〳〵發

展して居た。聲の美いのを自慢にして、俗謡などを唄つて、三味線を彈いたり、太鼓を叩いたり、遊藝にも、器用であつた。それを見て、梅田が、

『貴樣のやうな奴は、口に、天下國家の事を語つても、行ひは、幇間に等しいのであるから、到底、志士の交りをなすべき奴でない』

と、言ふて、非常に辱めた。

久阪は憤激して、梅田を斬る、と言ふて、立ちかゝつたのを、外の者が止めて、漸く治つた事がある。其後、段々、交際つて來る、と、久阪は、年齡こそ若く、道樂こそしても、吉田松陰の高弟で、將來に、有望の志士である、といふ事が判つた。梅田は、自分の輕率にして、妄に人を侮つたのを恥ぢて、久阪を訪ね、前日の過言を謝した、といふ事がある。一寸した逸話にも、斯うした事があつて、梅田は、何處までも、眞面目な志士であつた。

學者として、一つの塾を預り、多くの門人を集めて、書物の講義をすれば、謝禮を受けるから、生活には苦まぬが、何の資産も無く、門人も去つて、一個の浪人となれば、先づ覆ふて來るものは、生活難である。況して、明けても、暮ても、天下國家の事を、口にして居る、所謂、志士の境遇に立てば、其日の事に苦むのは、言ふまでもない。一方に、交際が廣くなつて、梅田の名が顯れると、同時に、家の生計は、慘になつて來る。甚だしい時は、三度の食事にさへ、差支へる事がある。けれども、梅田は、更に頓着もなく、相變らず、勤王攘夷で、奔走して居た。

其時分に、門人となつたのが、大樂源太郎であつた。才氣が溢れて、記憶が良い。將來に見込のある、門人と見たので、梅田も、目を掛けて、大樂には、よく教へた。梅田の前でこそ、上手に立廻つて居るが、大樂の性質では、迚も、梅田の衣鉢を繼ぐといふやうな、譯にはならぬ。流石の梅田も、大樂には、惚れ込んで居たのであるから、心の中までは、見拔く事が出來ず、頻に力を入れて居た。

其うちに、安政五年の、大疑獄が起つて、井伊大老が、老中の間部下總守を、京都へ上らせて、手入をする事にな

つた。第一に梅田が捕縛をされて、江戸表へ、監送された。評定所の調べも、幾度か受けたが、梅田は、極端な勤王討幕論を、有つて居たのであるから、評定所の訊問が、癪に觸つて、係りの役人の前で、大氣焔を吐いて、幕府を罵つた。それが爲に、當時、繫獄された者の中で、一番に憎まれたのは、梅田であつた。自殺の恐れがある、といふのを、口實として、手足の爪を引拔き、上下の齒を、拔いて了つた、拷問苛責に遭ふたのは、梅田が、一番に酷かつた、といふ事である。

それか、あらぬか、遂に評定所の訊問中に、病を得て、小笠原の屋敷へ預けられ、衰弱の爲に死んだ。梅田は、何處までも、薄命な人であつた。

劍舞の詩に『妻臥病床兒泣飢』といふのがある。それは、妻の信子が、幼兒を抱いて、病に苦しんで居る時、紀州沖に、異人の船が見えた、といふので、駈付ける時に、壁上に題した、詩である。熱烈、火の如き、志士として、而も、陽明學の造詣が深かつた、といふので、梅田の名前は、志士の間には、知られて居た。殊に、長州へは、吉田松陰との關係から、二度も、やつて來て居るので、有外に、長州人の耳には、梅田の名は、這入つて居る。大樂が、梅田の門人であると、いふ事から、藩の先輩が、大樂を、極めて侮り輕んじて、動もすれば、排斥する風があつた。けれども、藩士の間には、存外に、信用する者もあつて、中には、書物の講義を聽いたり時勢の議論を聽いて、深く大樂を信じ、藩の先輩が、大樂を嫌ふのは、全く其才能を嫉んで、邪魔者扱ひにするのである、といふやうな、解釋をして居た者も、澤山にあつた。

六

唐人の詩に『一將功成萬骨枯』といふのがある。是は、何れの場合にも、其通りであつて、下積になつて居るものは、働く時は、命賭だが、御褒美といふ時になると、輕く取扱はれるものに、極つて居る。明治初年の、論功行賞

の如きも、實際に於て、充分の働きはして居た者でも、平生の身分が輕く、舞臺の表面に、立つて居なかつた者は、何んな奇功を奏した所で、蔭の人として扱はれ、賞與に外れる、といふやうな傾きは、多くあつた。

賞典祿にしても、既に名前が、高くなつて居る者は、初から澤山貰つて居るが、さうでない者は、十把一束に、處分されて居る。從つて、分配高も少く、其行賞が、下公平に流れた、といふのも、啻に不平を懷く者が、言ふばかりではなかつた。

當時、萩の藩廳に在つて、藩政に與つて居たのが、杉孫七郎である。藩に勢力があつて、天下の事にも與つた、といふやうな、偉い者は、東京へ、出て居て、國許には、重い者は居なかつた。何事も、起らぬ時は、杉一人の力で、何うか、斯うか、藩の治まりは、決いて行くが、イザ事が起きた、といふ時になると、杉の獨力では、鎭撫し得る、とは、いへぬ。殊に、論功行賞に、不平を懷く者は、慾が手傳つての不平であるから、鼻息も凄まじく、理窟や情實で抑へつける事は出來ぬから、杉も、持餘してしまつた。

先輩の排斥こそ、受けて居るが、富永と大樂の兩人は、存外に、不平連から、重く視られて居つたから、其言ふ所も、よく行はれた。大平無事の時に、机に向つて、事務を執らせたら、或は覺束ないかも知れぬが、斯ういふ風に、人心が、動いて居る所へ、飛込んで來て、煽動をさせたら、殆ど名人とも言ふべき、奇才を、有つて居た。此兩人が、盛に煽り付けるのであるから、不平連の鼻息は、荒くなるばかりであつた。

杉も、之に就ては、少からず心を痛めて、頻に鎭撫して廻つたが、なか〳〵折合が付かない。そこで、據所なく上京して、木戸を首め、其他の有力者に、歸國を促して、此鎭撫をさせよう、といふ氣にはなつたが、偖て、自分が、此場合には、藩廳を棄てゝ、縱令、暫時の間でも、居らなくなる、と、一層、騷擾を甚しくさせる事に、なるかも知れぬ、と、それやこれやを考へて、自分の行く事は止めたが、併し、それにしても、誰か遣る必要はあるので、野村靖と、三好重臣の兩人を呼んで、上京させる事にした。

兩人も、豫て心配して居たのであるから、杉の依賴を聽いて、承知したのであるが、東京へ着いて、第一に、木戸を、訪ねて見る、と旅行中で、不在であるといふから、據所なく、廣澤兵介や、伊藤俊輔、或は井上聞多を訪ねて、段々、相談に及んだ。所が、兩人から、藩の事情を聞取つて、心配はして居るやうであるが、然らば、誰が歸國して、鎭撫の任に當るか、といふ段になると、一向に、話の運びが付かない。それのみならず、藩の先輩が、昨今の行ひを見ると、實に豪奢な、生活を極めて、一夜に、百金を惜しまぬ、遊びも續ける、といふやうな、實に羨ましい程の、全盛を極めて居る。國許に居た時は、不平連の鎭撫に、努めて居た、兩人も、暫く滯京して、此狀態を見ると、國許の者が、不平を懷くのも、無理はない、と思つた。

維新の風雲に際會して、巧に難關を切拔け、幕府を倒して、今日の政府を造つた。其働きは、偉かつたにもせよ、自分等は、斯うした行ひを、仕て居ながら、國許の者には、申譯だけの追賞をして、それで、濟まして居る、といふのは、良くない事だ。それが爲に、國許には、騷擾が起らう、として、其鎭撫に、苦しんで居る事は、屢々、申出て居るのであるから、それを知らぬ筈は無からう。然るに、木戸が、此際に旅行して、何時歸るか判らぬ、といふが如きは、甚だ以て、怪しからぬ事である、といふやうな事も、考へるやうになつた。

不平を鎭撫する爲に、先輩の誰かに、國許へ、歸つて貰はう、と、其使者の兩人が、不平を懷くやうに、なつて來た。從つて、政府の役人に、なつて居る、先輩や同志を訪ねても、不平連を庇護して、政府の役人に、なつて居る者の行ひが善くない、といふて、攻擊を爲るやうになつた。是では、鎭撫の依賴に來たのでなく、不平連の意見を、取次ぎに來たやうなものだ。

伊藤や廣澤が、頻に心配して、木戸の出先へ、人を走らせて、歸つて呉れ、といふて、促しては居るが、木戸は、急に歸りさうもない。そこで、兩人が、相談の上で、兎に角、野村と三好を慰めて、早く國許へ歸して、充分に鎭撫をさせて置いて、その後から、木戸をやらう、といふ事になつた。

長州藩から出て、第一に、參議の職に就いたのが、廣澤兵介である。廣澤は、非常に偉い人で、長く生きて居たら、木戸以上に、名聲を博したらう、と思ふ位に、立派な人物であつた。惜しいかな、暗殺の難に遭ふて、早く死んでしまうたが、それに就ても、誰が殺したか判らない、で有耶無耶の中に、事件は、葬られてしまつた。

明治政府に立つて、僅の年月であるが、廣澤の事は、後年になつて、其爲人を、褒める者が、多くなつた位だから、なか〳〵の遣手であつたには、違ひない。それに比べると、伊藤の如きは、未だ三流以下の人として、餘り重きをなして居なかつた。伊藤が、那アした、氣象の人で、誰に向つても、圭角の無い、上手に立廻つて居た所から、廣澤の、他の長州人とは、よく衝突したが、伊藤とは、存外に美しく交際つて居た。伊藤が、訪ねて來て、廣澤を說いた。野村と三好の兩人を慰めて、早く國へ歸さなければならぬ、といふ事を、頻に唱へるから、

『宜しい。承知いたした。さういふ次第ならば、是から兩人で、何方かへ、彼等を呼んで、諭す事にしよう』

『何うか、さういふ事に、願ひたい』

『承知した』

是から、兩人は揃つて、料理店に來て、兩人を迎へにやつた。

七

暫くすると、野村と三好は、揃つて來た。伊藤は、兩人を見ると、

『ヤアー、大層早かつたね』

『迎ひを受けたから、直ぐにやつて來た』

『今日は、廣澤が、是非、お前達に、懇談をしたい、といふので、俺も、話して置きたい事があるので、旁、一ぱい飲みながら、久し振りで、打寛いで話さう、といふ積りで、聘んだのぢや』

兩人は頷きながら、席に着いて、ヂッと、廣澤の方を見た。

そのうちに、料理が運ばれる。美しい藝者も、出て來る、といふやうな譯で、忽ちに席は賑つた。今の烏森の待合で、有名な濱乃家の女將が、未だ其頃には、お濱と、いふ、有名の藝者であつた。又、陸奥宗光の夫人が、柏家の小兼といふて、賣出しの時分だ。或は、江藤新平の愛妾、お駒や、板垣退助の惚込んだ、小淸なぞが、全盛で居た時分だから、同じ藝者にしても、其頃の藝者は、有志家扱ひに、慣れて居て、大概の者は、一廉あつて男らしい、氣象を有つた、藝者が、多かつたものだ。

近年をなつて、新橋も、不見轉の本場と極つて、オキヤアセの名古屋種が、跋扈を極める、といふやうになつて、引迚も、御話にはならぬが、未だ其頃の新橋は、深川の羽織衆から、轉じて來たのが多く、地味な、結城の着物に、引掛帶で、意氣な吾妻下駄を、素足で、穿いて歩く、といつた、俠な風俗が、藝者の見得に、なつて居た時代だ。都々逸の三味線さへ、調子が合はない、といふやうな者は、藥にしたくもなかつた。世に時めいた、顯官や、土地に評判の、富豪よりも、年中、短い袢天一枚で、スウ〳〵言つて居た、粋な鳶の阿兄なぞを、情夫にして、人知れぬ苦勞に、頰の瘦せを、見せて居た、といふ。其意氣は、何時か消えて、今では、一から十まで、金次第になつて、張も意氣地も、絕えて見る事が、出來ぬ。殘念な次第ではあるが、時勢の壓力から、さうなつて來たので、致方が無い。

盃の數は廻つて、座敷は、何となく浮いて來た。けれども、野村と三好の兩人は、嚴しい顏をして居て、なか〳〵打解けた樣子は無い。

『貴下、一つ頂戴しませうかね』

年上の藝者が、野村の前へ坐つて、盃を貰はうとするのだ。

『ウム、一つ遣はさう』

野村は、グツと、盃を献して、

『イヤ、酌は、拙者がしてやる』

『何うも濟みませんね。旦那の御酌では、本當に醉ふでせうよ、ホ、、、、』

『巧い事を、言ひ居る。國からポット出の侍は、其口先に掛かつて、ツイ迂濶々々と、尻が落付いて、國の事なぞは、忘れてしまふのぢや。ハツハツハツ』

三好も、合槌を打つて、

『同じ國の者でも、東京に來て居るのと、國に居るのとでは、雲泥の相違だ。斯ういふのを對手に、毎日、飲んで居たら、そりやア、面白くて堪るまいよ』

兩人は、惡い氣があつて、言ふのでもなからうが、聽かせられて居る、伊藤や廣澤には、何だか當擦りを、言はれるやうな、氣も爲る、廣澤は、左まで氣にも、仕ないやうだが、伊藤は、頻に氣を揉んで居る。

『オイ、野村、貴樣も、東京の方へ、出て來ることにしたら、何うぢや』

『ウム、出て來たくもあるが、今の國元の狀態では、一寸、出難いからなア。何うだ、貴樣達ア、少し入代つて、國詰になつたら、何なものだらう』

何と思つたか、廣澤は、藝者に向つて、

『お前達は、少し遠慮して吳れ』

『ハイ、御用がありましたら、御手を鳴らして下さいませ』

『よし〳〵、話が濟んだから手を鳴らすから、直ぐ來て吳れ』

之を機會に、藝者や女中は、立つて行く。後は、四人の差向ひだ。

廣澤は、膝を正して、兩人に向つた。

『此間から、段々、聽かされた、國元の騷擾は、我々とても、心配せぬ譯ではないが、何分にも、大政府の基礎も、未だ固くないし、役人の數は多いが、仕事の段取も、思ふやうに付いて居らぬ。早く申せば、未だ火の消え切らぬ火事場で、働いて居るやうなものぢやから、何事も、思ふに任せぬ。從つて、國元の事を、忘れて居る、といふ次第ではないか、何となく、疎にもなつて居るのぢや。其邊は、貴樣等も、察して吳れなけりや、困る。就ては、大樂や、富永の奴等が、何ういふ事をして居るか、其精しい事も、實は、聽いて見たいのぢや』

三好は、膝を進めて、

『大樂と富永の兩人があの調子で、說き廻るのぢやから、堪らない。さうでなくとも、不平滿々で居る者が、巧い煽動されるのぢやから、追々、仲間も殖える、道理ぢや。杉や我々が、如何に煩悶しても、容易に治まりの付くものではない。木戸か、御手前が、歸つて吳れねば、治まりは付くまい、と思ふ』

『ウーム、さうか。俺は、今、何うしても、手を拔く事が、出來ぬのぢや。といふものは、大きな聲では言へないが、薩藩の野心家が、存外に、深い企畫を、爲て居るやうでもあるし、容易に、留守には出來ぬのぢや』

『フ、ム、此方には、さういふ事情もあらうが、併し、國元も、大切ぢやからな』

『そりやア、さうぢやとも、兎に角、木戸が、一日も早く、此方へ歸るやうにして、それから、相談の上で、國元へ差向けるから、骨折でもあらうが、一先づ立歸つて、木戸の行くまでの間、何とかして鎭撫方を、引受けて貰ひたい』

『さういふ次第であるならば、引受けぬ譯もないが、併し、考へて見れば、國元に居る奴は、貧乏籤を、引いたやうなものぢやからなア、ハツハツハツ』

『イヤ、さう厭味を言はれては、話が出來ぬ。マア、兎に角、國元へ引取つて、鎭撫方を、やつて吳れ』

『よし、さう話が分つたら、我々は、身を粉にしても、働いて見よう。けれども、御手前等も、少しは國元に居る者の身を察して、斯うした不平が、起きぬやうにして吳れぬ、と、德川は、漸く倒しても、まだ薩藩もあれば、土州

滯もある。其他、佐賀からも、なか〳〵の者が、出て居るのぢやから、國元の動搖なぞを見せて、內兜を見透されては、充分に、權勢を張る事も出來まいから、考へて貰ひたい』

『宜しい、よく解つた』

そこで、藝者を聘んで、復た酒宴に移つた。殆ど夜通しの騷ぎをして、野村も、三好も、漸く機嫌が直つて、翌日は、國元へ歸る事になつた。

八

木戸は、漸く旅から、歸つて來て、今、旅裝を解いたばかりである。

『ハツ、申上げます』

『何ぢや』

『廣澤參儀が、御出になりました』

『オー、廣澤が、さうか、御通し申せ』

今、歸つて來たばかりの所へ、早速、廣澤の來訪は、自分の歸るを、待受けて居たものに、違ひない。大方は、此頃の書面で、承知して居るが、國元の一條だらう。流石に、木戸も、夫と悟つて、廣澤の來るのを、待受けた。

『ヤアー、大分長かつたのう』

『ウム、存外に、手間取つてな。サア、それへ……』

廣澤は、設けの席へ着いた。

『書面を、見て吳れたらうか』

『ウム、皆見た』

『國元が、あアいふ狀態に、なつて居るのぢや』

『困つた事に、なつたのう』

『此間も、三好と野村の兩人が、やつて來て、話より何より、厭味が先ぢや。之には、俺も、困つたよ』

『さうぢやらう。俺も、それを聽くのが厭さに、實は、愚圖々々して居たのぢやが、漸く歸つて來たのぢや』

『兩人に、聞いて見る、と、我々が、想像して居るよりも、面倒になつて居るやうぢやから、一日も早く、何とかして、鎭撫の方法を、講じなければなるまい。表面の騷ぎになつては、第一、薩藩の者共に對しても、面目ないからな』

『そりやア、さうぢやとも、併し、富永や大樂が、例の惡戲から、由ない事を仕出來して、唯、我々を、困らせて喜ぶ、といふのぢやから、手の着けやうも無いて』

『大分、火の手が、激しいやうぢやから、貴下、一度、歸つて吳れぬか』

卒然として、木戸の、歸國を促した、廣澤の一言には、流石に、木戸も、答へは無く、腕を組んで、暫く考へて居た。

『何うぢやらう。貴下が、歸れぬとなれば、何とか都合して、俺が歸らう、と思ふが、此鎭撫は、俺が歸るよりは、貴下の歸つた方が、效能があらう、と思ふ。貴下の考へは、何うぢや』

『左樣さ。そりやア、何方が歸つても、同じ事だらうが、大樂は、姑く措いて、富永の奴は、我輩の行つた方が、都合が宜からう。何とか都合して、歸る事にしよう』

『是非、さうして貰ひたい』

其日の相談は、それで濟んで、廣澤は、直ぐに歸つた。

木戸は、朝廷へも、歸京の屆けをして、旅行をするにも、病氣の爲に、湯治に行く、といふ事が、理由になつて居

るのだから、全快屆を出して、兩三日は、政府の勤めを、續けて居た。それから、段々と、國許の事情を、他からも聞いた。殊に、伊藤は、木戸の乾兒であるから、それからも聽いて、詳しく事情は判つたが、自分が歸らなければ、此治まりはつくまい、といふ考へになつたので、朝廷へは、歸省の願ひを、出す事にした。

未だ新政府を設立して、草創の事であるから、内外多端で、容易に、歸國は許されなかつた。段々、騷擾が大きくなつて、今にも爆發しさうだ、といふ、公報さへ來るやうに、なつて來たから、そこで、朝廷からも、特に御許しがあつて、木戸は、歸省の準備に、掛かつた。所へ、田中不二麿から、書面が來たから、披いて見る、と、

『此度、歸國せられるに就ては、其前に、御話して置きたい事があるから、御都合で、今晩にも、今戸の有明樓邊りで、一酌やりながら御話したい、と思ふが、如何であらうか』

と、認めてあつた。恰度、木戸も、別に約束が無く、田中には、賴んで置きたい事もあるから、承知の旨を、答へてやつた。

田中も、一度は、大臣にまでなつて、相當に世間からも、尊敬せられた人物である。尾州藩では、身分の高くない武士の伜であるが、累進して、内閣の一人になつた。

著者が、明治十八年に、名古屋の獄に、這入つた時の事であるが、合監した一人に、紙屑屋の問屋があつた。其時の話に、斯ういふ事を、聞いて居る。

『名古屋からは、田中不二麿さんといふ、偉い人が出て居る。而も、此人は、表向は、武士の子供といふ、事になつて居るが、實は、さうぢやない。俺と同じ、紙屑屋の伜で、四十二の二歳子は、家に禍をする、といふので、可愛い子供ぢやが、打棄てる事になつた。けれども、唯棄てるのも可哀想だ、といふので、段々探つて、或る武家が、子供の無いので、神信心をして居る、といふのを聞出して、其家の前へ捨てた。子供が欲しい、と思つて、神信心を仕て居る位の武家であるから、門前に、子供の泣聲が聞えたので、出て見ると、可愛らしい子供が、笊に入れてある、着て居る、着物も、相當のものであるから、是は、何か仔細のあるものに、違ひない、と思ひ乍らも、拾ひ取つて、それから、自分の子として、育てる事にした。それが、田中といふ人で、拾ひ取つた子供は、實子として藩廳の方へ、屆け濟みになつて、育てゝ見ると、物覺えも宜ければ、悧巧でもある。親も、實子同樣に、可愛がつて、到頭、家の相續までさせるやうにした。それが、今の不二麿さんだが、本當の武家の種でないだけに、尚ほ偉いぢやないか。而も、それが、紙屑屋の子供と、いふのだから、本當に、是が屑の中からの、掘出し者だ、と言つても差支なからう』

果して是が、眞の說であるか、何うかは知らぬが、滿更、噓でもないやうに、聽いて居た。餘り深入をして聽かなかつたから、其實の親といふ、紙屑屋の親の名も知らなければ、町も知らないが、一說として、傳へて置くのも宜からう、と思ふし、又、斯ういふ話は、よくある事だから、或は是が、眞實であるかも知れない、と思ふ。何れにしても、不二麿は、名古屋種としては、無上の出世をした、一人であるには、違ひない。

九

同じ、長州藩の中でも、色々に、派が分れて居て、其軋轢は、なか〳〵に酷かつた。殊に、維新草創の際に、腕前を現はして、立身出世をした、連中であるから、それ〴〵に、特色を有つて居る、從つて、讓合つて居る、といふやうな事も、出來なかつたのである。それにしても、木戸は、長州出身の政治家としては、第一人者であつて、薩藩の西郷大久保に對して、太刀打の出來る者は、此他には無かつたのだ。縱令、木戸以上に、實力のある者が、居たにもせよ、まだ、それだけの身分に、なつて居なかつたのだから、位地の上に於て、西郷、木戸、大久保には、對立して行く事は、出來ないのだ。何うしても、此點からいふと、木戸が、長州藩の代表者として、然るべき位地に、なつて居たのである。

倂しながら、廣澤の材幹は、非常に優れて居て、或は長生をして、政治に與つて居たならば、木戸を凌いで、廣澤が、將來の長州藩を、代表する人物に、なつたかも知れない。それ位に、遣手であつたゞけに、圭角も多く、野心も太かつたから、何うかすると、木戸を凌いで、事を爲る、といふ風があつた。そこで、木戸の一派は、廣澤を、喜ばぬやうになつて、何となく、兩者の間が、圓滿でなかつた、といふのも、事實である。

長州藩の中で、友達同志が、暗鬪して居る。又、其側面には、他藩の人でありながら、或は木戸に、味方する者もあれば、廣澤を、贔屓にする者もあつて、それが自然と、同じやうに暗鬪して居るのだから、面白い。田中は、深く木戸を信じて、終始、木戸の爲に、盡した人であるから、今度、木戸が、國元の騷擾に付いて、之を鎭撫の爲に歸國する、といふ事を聞いた。而もそれが廣澤の、勸告から決した、といふので、一段と、危險を感じたのである。木戸の發心から、歸國する事になつた、としても、田中は、甚だ喜ばなかつたのだ。然るに、廣澤が勸告して、木戸の意が動いた。といふので、一層、其歸國を、嬉しく思はなかつた爲に、一應、木戸に會ふて、話して見やう、といふ考へから、書面を飛ばして、都合を、問合せた所が、承諾の返辭が來たから、自分は、時刻を早めて、先に有明樓へ來て、二際の一室で、待受ける事になつた。

今では、隅田川沿岸の地も、頗る俗化してしまつて、昔の面影は止めないが、竹屋の渡しを、向ふに見て、後に、待乳山の森が、欝然と繁つて、夕陽を庇ふやうに、なつて居る。有明樓の二際の眺めは、又一段と、評判になつて居た。

此家に、有名な娘があつた。それが、お菊さんといふて、後に、助高屋高助の妻に、なるのだが、一枚畫にも出る程の美人で、お菊さんの爲に、有明樓が、賑ふたものであるが、遂に助高屋の妻となつて、其間に生れたのが、今の澤村宗十郎である。今では、震災の爲に、跡形もなくなつて、那の邊は、一帶に、公園地になつてしまつた。著者が育つ時分には、未だ盛んにやつて、居て、今戸といへば有明樓、有明樓といへば今戸といふて、人が聯想する位に、

評判の家であつた、市中に、澤山の料理屋や、貸席はあるけれど、少し込入つた、秘密の話でもしやう、といふものは、大槪、此處まで、やつて來たものだ。隅田川を距て、向島を眺めながら、人待顔に、茶を喫つて居るのは、田中であるが、例のお菊さんが、出て來て、頻に話對手に、なつて居た。所へ、梯子を上がる音と共に、御連樣、といふ聲が聞えたので、お菊は立つて、梯子の上り口へ來る。途端に、上がつて來たのは、木戸である。

『オヤ、御前樣で、ございますか。田中の御前が、嘘ばかり仰しやつて、あなた樣の御出でだ、といふことは、仰しやらないので、ございますよ』

『ウム、さうか、田中は、全體、嘘吐きぢやからなア、倂し、名古屋の人は、口前が巧いから、ウツカリ掛かると、酷い目に遭ふぞ、ハツハツハー』

捨白詞の、戯談を言ひながら、木戸は、席に着いた。

『ヤアー、大層、早かつたのう』

『ウム、最前から、待受けて居つたのぢや』

『急の手紙で、何事かと思つて、やつて來たのぢやが。マア、兎に角、一ぱいやる事にしやうぢやないか』

『宜からう』

『もう、甘い物は、誂へたのか』

『今、八百善へ、何か注文したやうぢや。一切、お菊さん委せに、してあるのぢやよ。ハツハツハー』

木戸は、肘掛に凭り掛りながら、窓越しに、向島の方を見て、

『何時來ても、惡くないのう。黄塵萬丈の江戸の、市町の中にも、斯ういふ所が、あるのぢやから、時折は、魂の洗濯に、斯ういふ所へ來るものも宜いのう』

其中に、酒肴の用意も出來て、豫て、お菊の計らひと見えて、柳橋から、二三の美形も、現れる。互に戯談口を叩

きながら、盃の數は進んだ。

一〇

木戸が、お菊に、耳打を、すると、軈て、藝者の姿は、座敷から、消えてしまつた。

『今日の話は、何ういふ事か、先づ、それを聽いてから、緩つくり飲む、と仕やう』

『それぢや、御話しませう』

『ウム、何ういふ事か』

『愈々、國許へ、行くのですか』

『サア、何うしても、行かなければ納まりが付かぬ、と思ふから、一寸、行つて見やう、と思ふ』

『そりやア、宜くなからう、と思ふ。實は、歸國の事を、不圖、耳に挿んだので、今夕の催しをしたのぢや』

『フーム、國へ歸つては惡い、と言ふのか』

『マア、さうぢやのう』

『そりやア、何故か』

『聞く所に依れば、廣澤が、貴下に勸めた、といふ事ぢやが、そりやア、本當の事かね』

『廣澤ばかりが勸めた、といふ譯でもないが、併し、主として、廣澤から、話は、あつたのぢや。長い間、旅行して居つて、歸つて來る、と、早速の話であつたが、實は、君等に話すのも、面目ない事ながら、國元の內訌といふのは、なか〳〵根強い樣子で、杉の獨力では、鎭撫が出來ぬ、といふのぢや。そこで、我輩が行かなければ、といふやうな、話の段取になつて、到頭、承知したやうな譯ぢやよ』

『そりやア、强ひて貴下が、行かぬでも宜ささうなものぢや』

『イヤ、我輩も、行く事は好まぬのだが、何うしても、我輩でなければいかぬ、といふので、承知したたのぢや』

『其が、少し可怪しい、と思ふ。此場合に、貴下を、是非、やらなければならぬ、といふのは、何ういふ必要があるのか、我々には、計り知る事が、出來ないのぢや。左なきだに、長州藩士の間には、樣々の暗鬪があつて、貴下に對する、嫉妬偏執の念は、各所に起つて居るやうに、聞いて居る。現に、在官者の中にも、多少は、其氣分の現はれて居る事は、我々、局外者には、よく見えるのぢやから、それを知りながら、貴下に、廣澤が、歸國を勸めたといふのは、其間に何か、深い企みが、あるのではなからうか、と思ふ。玆まで露骨に言ふのは、不謹愼のやうではあるが、餘りに不思議に思ふし、心配でもあるしするから、一應は、貴下の耳へも、入れて置かう、と思ふて、言ふのぢやから、惡く聽かれては、困る』

田中も、露骨に過ぎる、とは思つたが、其處に迄、突ツ込んで、話すのでなければ、迚も無駄だらう、といふ考へで、思ひ切つて、露骨に、話し掛けたのだ。木戸は、悧巧な人であるから、田中が、親切の心から、期う言ふのであつて、決して離間や中傷の爲に、言ふのではない位の事に、解つて居るし、自分にも、多少、其懸念はあつたのであるから心の中では、感謝して居るが、まさかに、長州人として、それに同意する事は、出來なかつた。

『我輩の身を思ふて、それまでに、言ふて吳れるのは忝ないが、併し、如何に、暗鬪はして居ても、顏を見合はせて、話して見れば、直ぐ解る事ぢやから、左までの心配はなからう、と思ふ。兎に角、我輩は一旦、國へ行つて來る積りぢやから、後の事は、貴下等に、賴んで置くから、然るべく賴む』

『然らば、何うしても歸國する、といふのですか』

『愈々、それと極めて、御上の御許しさへ、受けてしまふたのぢやから、今更に、變更は出來ぬ』

『併し、今暫く、模樣を見る事にしたら、何うですか』

『サア、それは、宜いかも知れぬが、若し、さういふ事をして、却て疑惑を、惹起すやうな事がある、と、面白くな

い、と思ふから、寧そ、此際に行つてしまふ事にしやう。萬一、我輩が行かぬ、となれば、自然、騷擾が、甚だしくなるに違ひない。さうなつてからでは、尚ほ治め難くからう、と思ふから、今の中に、行つた方が、宜からう』

『それまでの決心なら、止む事を得ないが、騷擾が、大きくなるのを待つてから、兵を向けて、一氣に討つてしまふ方が、過ちは少からう、と思ふが、何うでせうか』

木戸は、暫く考へて居たが、

『そりやア、面白くない。廣澤首め、一同が、我輩を、國へ歸す、といふ事に、疑ひを置いて見れば、多少の疑ひも起るが、併し、猜疑は、總ての事を誤る、といふ諺もある。まさかに、彼等は、さう惡い事を、考へても居るまい。殊に、兵力を以て、國の者は、討ちたくないから、出來る事ならば、我輩の一身が、危い位の事は忍んでも、兵力に依らずして、治めて見たい、と思ふ』

『それでは、もう何も言ひますまい』

『どうか、さうして貰ひたい。併し、貴下の親切は、決して無にはせぬ』

『此の以上、何も言はぬが、併し、注意をするだけは、充分に注意して貰ひたい』

『それは、言ふまでもない』

それで、話は濟んで、是から藝者が、出て來る、お菊は、勿論のこと、盃盤の間に周旋をして、面白さうにして、夜の更けるまで、兩人は飮んだ。

斯ういふ事情で、木戸は、愈々、國許へ歸る事になつたが、玆に、もう一つ面白い事が、搦んで來た、といふのは、其前に、西鄕が辭職して、國へ歸つたに就て、段々、政府の內部では、八釜しい議論が、出て來て、何でも、西鄕を呼び返さなければならぬ、といふやうな說が、多數になつて來て、遂に御上へ申上げる、と、御許しを得たから、岩倉右大臣が、勅命を蒙つて、西鄕迎ひの使節と、いふ事になつて、木戸、大久保の兩人が、同行する事になつた。木戸

は、國元の一條もあるから、表面は、其名義を利用して、途中から、萩へ這入る事になつたのである。

一一

西鄕が、明治二年に辭職して、國へ歸つたのは、第一に、自分は、維新の功業を、成し遂げて、既に論功行賞の際に、無上の御沙汰までも蒙つて、既う此上に、出世の希望は無い。從つて、一旦は高踏勇退して、後進の途を開く、といふ事が、趣意になつて居た。又、第二には、此後に起る、第二の維新に對して、其用意をする必要がある、といけ事を、考へて居たのだ。

第二の維新とは、何であるかといふに、王政復古の昔に復つて、政權は、朝廷の手に歸した、とはいふやうなものの、未だ三百諸侯が、頑張つて居て、中央の政府から、達した政命が、直に行はれる、といふやうな事には、なつて居ないのだ。されば、近く之に就て、一大革新が、行はれるに違ひない。其際には、時の勢ひで、押付けて來た、第一維新の革命に、不平を懷いて居た、連中が、必ず蜂起するに違ひないから、それに對する、備へを置かなければならぬ、といふ事を、深く考へて居たのである。それから、もう一つは、論功行賞に對する、不平と、早く中央へ乘出して。意外の出世をした者に對する、國許の不平連が、猜忌嫉妬の眼を以て、何事も、惡い方から、解釋して居る。是が何時か一度は、爆發するに違ひない。して見れば、之は對しても、豫め備ふる所が、なければならぬ、といふやうな事も、辭職歸國の理由には、なつて居たのである。西鄕の外にも、是だけの考へを、有つて居た人は、あるだらうが、此人のやうに潔く身を退いて、國へ歸る、といふだけの決斷は、出來なかつたのだ。

薩藩の微臣から、身を起して、陸軍大將近衞都督兼參議官正三位といふ、偉い肩書の有る人が、縱令、國家の前途に就て、前に言ふやうな、色々な考へがあつて、辭するにもせよ。斯う潔く辭する、といふ言は、餘程、名利の念に、離れた人でなければ、容易に決行する事は、出事るものでない。

然るに、西郷が、去つた後の政府は、隨分、色々の情弊に纏はれて、大久保や、木戸が、苦しんだ事は、一通りでない。上の方には、三條、岩倉といふ、すぐれた人物もあつて、よく其間の調和は、取つて居たやうなものゝ、何うしても、西郷を引出して、再び之を現職に就かせなければ、すべての纏まりは決かぬ、といふ事を見て、協議の上で、勅命まで蒙つて、岩倉以下の人が、薩摩へ、急行する事になつた。

是は、後の話だけれども、序に言ふて置く。岩倉の一行が、鹿兒島へ着いてから、西郷に、掛合つて見ると、西郷の說は、

『德川幕府を倒して、王政一新にした、根本の御趣意が、追々に、無くなつて來て、矢張り、舊幕時代と同じやうな、政府の弊害に、忍ぶ事が出來ないので、罷めて來たのであるから、今更に、復職する事は出來ぬ』

と、いふのであつたから、岩倉は、之れに答へて、

『如何やうにもして、改革は遂行するから、是非、歸つて吳れ』

と、いふのであつた。それに對して、西郷は、

『よし。それならば、歸る事にもしようが、何ういふ風に、改革するつもりであるか』

といふ、一段になつて、岩倉の一行は、その答に苦んだ。そこで、西郷の意見を、求める事になると、西郷の答は、

『薩長の二藩が、維新の功業を、成し遂げる、原動力には、なつて居たにもせよ。是れあるが爲に、天下の政權を私する、といふ事は、宜しくないから、少くも土肥の二藩位には、其權力を分つて、出來得る限り、廣く人材を、各藩から求める、といふやうな事にして、軈ては、廢藩置縣の事も、行はなければならぬのであるから、今から、其支度に掛かる、といふだけの心組を以て、當るのでなければ、迚も、復職しても、前途の見込がない』

と、いふのであつたから、流石に、岩倉は、大きい所があつたし、附いて居る、大久保も、此意見に對しては、左までの反對は無かつたので、相談は纏まつて、西郷は、遂に復職する事になり、東京へ、歸つて來たのだ。

其途中、長州にも立寄り、木戸の案内で、毛利侯に拜謁して、意見を述べ、又、四國へ渡つて、土州の山內容堂侯にも目見えて、縷々、意見を述べた所から、容堂侯も、西郷が、公平の取計らひには、頗る感心して、土州からは、大參事の板垣退助を、上京させる事に、約束が成立した。

斯うした事が動機となつて、政府の組織を、西郷の歸京と、共に改めて、西郷、木戸、板垣、それに、肥前の鍋島藩を代表して、大隈重信の四人が、參議になつた。

話は、前に戻る。

木戸は、歸國の支度に掛かつた。折柄、西郷迎ひの勅使が立つ、といふ事になつたから、其一行に加はつた。是を、表面の名義にして、實は、途中から別れて、萩へ直行して、脱兵騷ぎを鎭めやう、としたのである。何處までも、表面には、脱兵騷ぎの爲に歸る、といふ事を、見せなかつた所に、木戸の苦心が、現れて居る。

田中が、木戸に向つて、此際の歸國を止めやう、としたのは、長州の脱兵騷ぎが、單に普通の不平だけであるならば、格別の事だが、若し、藩から出て、大政府に仕へて居る、大官に對する不平があつて、それが爲に、勃發した不平だ、とすれば、第一に、憎まれて居るものは、木戸に違ひない。或は、邪推して考へれば、木戸に反對の、長州人が、其間に、小刀細工を行つて、斯うした騷ぎを、計畫して置いて、木戸を歸國させてから、危險の位地に、引張り込むのでは、なからうか、といふ事にも、思はれるのだ。田中は、それを、心配して居たのである。そこで、木戸に向つて、歸國の延期を促した、のであるが、木戸は、左樣な虞が、多少あるものとしても、此場合に、歸國を阻む事は、出來なかつたのである。又、廣澤に向つて、鎭撫を引受けた以上、今更に、田中の忠告に由つて、歸國を思ひ止まる事は出來ないのであつた。

一二

まだ、其頃には、今のやうに、電報の便利が無かつた。國元へ歸るについても、充分の打合はせを、仕て置いてから、といふ譯には、ならないのであつた。其代り、反對の者が、豫め木戸の歸國を、早く報じて置いて、途中で、待伏せをするといふやうな、手筈を、自由にする事も、出來なかつたのだから、祕密に歸國する、といふ段になれば、却て其時代の方が、便利であつた。

大阪までは、岩倉の一行に、伴いて來て、それから、木戸は、一人別れて、汽船に乘り、三田尻へ着いた。此處には、藩の海軍省の如きものが、出來て居て、長州藩の、海軍根據地に、なつて居たのだ、又、城下へ這入るのには、此處から上陸するのが、一番に好都合であつた。

小舟に乘つて、木戸は、頻に船頭を急がせて、海岸へ近付く、と、今、船の着いたばかりで、相當に上陸する人もあるので、海岸通りは、色々の人が、往來して居る。遙に見ると、其中に、一人の武士が居て、折しも、春寒の海風を避けやう、としてか、頭巾を被つて、木戸の小舟が、著くのを窺ふて居るやうである。

『ハ、ー、是は、何が仔細のある、奴だな』

と感じて、窃に刀の目釘を檢めて、萬一の覺悟をして居た。木戸は、齋藤彌九郎の門人で、擊劍に於いては、日本で幾人といふ、指折の使手であつたから、イザとなつて、立合ふ時は、腕前のある者を、三人や四人、向ふに廻して、切捲くる位の事は、何でもなかつた。自から好んで、切合をした事はないが、途中で、喧嘩を賣掛けられて、止むことを得ず、人を斬つた事も、二度や三度はある。されば、腕に覺えのある人だけに、其覺悟で、小舟が横付けになると同時に、ヒラリと、海岸へ、飛上がつた。すると、例の怪しい武士が、ツカ〳〵と、側へ寄つて來たから、木戸は、一と足下つて、身構へをした。

『ヤアー、木戸さんでしたか』

狎々しい一言に、木戸は、尚ほ油斷なく、ヂツと、其男の樣子を見ると、軈て、頭巾を脫つて、

『よう御出でしたな』

見れば、野村和作であつた。

『ヤアー、野村か、何うして、此邊に居つたのか』

『實は、貴下が見える、といふので、此間から、此處へ來て、待合はせて居たのぢや。船の着く度每に、それとなく、見張つて居たのだが、ようこそ、お出でした』

怪しい奴、と見たのは、却て味方の野村であつたから、木戸は、漸く胸を撫下した。

元治元年の、堺町御門の戰ひで、戰死を遂げた、入江九市の實弟が、野村である。當時は、未だ和作と、いふて居たが、其後に、靖と改めて、遂に政府に入つて、最初の驛遞總監になつたのが、此人だ、前の相外、本野一郎の未亡人は、野村の娘である。晚年は甚だ振はなかつたが、一時の野村は長州派の政治家の一人として、相當に、人にも知られて、可なり勢力も、有つて居た。元來が、吉田松陰の門人で、兄弟とも松陰には、可愛がられた。

安政の昔に、間部下總守が、江戶から京都へ、乘込んで來る、といふ事を聞いて、松陰は、何うしても、間部を刺してしまへ、といふ考へを、有つて居た。同時に、藩侯が、上京せられるといふので、今の場合、藩侯の上京は、宜しくあるまい、といふ意見で、藩侯へ、意見書を捧げやう、としたが、使者に行く者が無い。松陰は、牢屋に、這入つて居たのであるから、入江を呼んで、之を命じた。所が、入江は、極めて貧乏な、生計をして居た、輕輩であるから、唯一人の母親を、抱へて居て、之を棄てて去るに忍びなかつた。さればとて、先生に、申付けられた事に、背く事もならず、獨り苦んで居た所へ、弟の和作が、訪ねて來たから、淚ながらに物語る、と、

『宜しい。さういふ譯ならば、拙者が、兄上に代つて、參る事にしやう』

和作は、健氣な覺悟を以て、斯う答へた。入江は喜んで、

『それでは、さういふ事にして呉れ』

と兄弟の相談は定まつて、野村が、松陰に遭ひに來て、此事を語つた。和作は、十九歳の時であつた。松陰は、深く兄弟の志に感じて、詩を作つて、野村の行を壯んにした。

斯うした履歴を、有つて居て、それから後は、東西に奔走して、維新の變亂にも、相當の功を立てたが、中央に出ないで、國元に、引込んで居たのである。三好と共に、東京に出て來て、木戸の歸國とまで、運びを付けたのは、卽ち此男だ。

『マア、兎に角、其邊の船宿で、話す事にしやう』

『それが、宜しうござらう』

と、野村は、先に立つて、案内をする。海岸の方へ向いて、一軒の船宿があるから、其二階を借りて、這入つた。

『廣澤と、堅い約束はして來たが、容易に、御出でにはなれますまい、と思つたが、それにしても、あれまでに、話して、來たのであるから、或は御出でに、なるやうな事もあらうか、と思ふて、實は、心待ちに、待つて居たのでござる』

『ウム、俺も、色々の御用があつて、東京は、離れ難いのであつたが、廣澤から話もあつたし、足下等が、心配して居る事も聞いたから、まさかに、打棄てゝ置く事も出來ず、歸つて來たのぢやが、何うぢや、其後の脫兵騷ぎは』

『イヤ、もう、箸にも棒にも、掛からぬ騷ぎで、殆ど持餘しの體で、ござる』

『ハ、、、それ程の事か』

『例の大樂や富永が、無茶な事ばかり、言ひ居つて、それに、若い者共が、附和雷同して居るのであるから、如何とも、治めやうがない。流石に、杉も、匙を投げて、今は、傍觀の體でござるよ』

『フ、ム、さうか、夫では取敢ず、山口へ行かうか』

野村は慌てゝ、之を押止めた。

『いや、そんな氣樂な、沙汰ぢやない。貴下が、今、山口へ這入れば、直ぐ彼等の爲に、害を加へられる。兎も角、下關へ廻つて、あれから道を變へて、萩の方へ、這入るのが、宜からう』

『さうか。それぢや、さういふ事にしやうか』

相談が極つて、野村を案内に、下關へ、向ふ事になつた。

一二

毛利の城下は、萩であるが、藩政の實權は、文久の頃から、山口へ移つて居た。幕末の頃は、藩士が、天下の事に携はつて、大に活動した、本部とも言ふべき所に、なつて居たのは、下關であつた。地勢の上から言ふても、下關は九州へ渡る者と、九州から出て來る者と、必ず通らねばならぬ土地であるから、此處に、頑張つて居れば、通行の有志を、押へ付けて、何んな事でも出來る。此上もない、都合の好い、地點になつて居た。されば藩士にして、少しく志があつて、重役等と、意見の合はぬ者は、大概、下關へ、落ちて來て、此處で、諸藩の有志が、落込んで來るのを、對手にして、色々な計畫を、立てゝ居たのである。殊に、高杉が、奇兵隊を、組織してからは、一層、下關の名は、諸藩の有志の間に、重きをなしたのである。

藩の有志で、眞に活動した者は、多く松陰の門から、出た者であつた。萩には、明倫館といふ、藩黌もあつて三十六萬石の威勢で、建てた學校であるから、其規模も、大きかつたのだが、實際に於て、偉い者が出たのは、却て松陰の塾からであつた。松陰の塾に、居た者には、輕輩の子弟が、多かつた。昔も、今も、其點に於ては、變りは無い、が、時勢の上に、動搖を來して、變亂が起らう、とする時、其渦中に飛込んで、眞の仕事を爲る者は、身分の輕い者

から、多く出る。却て、相當の、位地を、有つて居る人の、子供なぞには、活動の出來るものは、殆んど無いに、極つて居る。輕輩の子弟が、藩の權勢を恐れず、向ふ見ずに、活動するといふのは、何う間違つた所で、現在の身分より、外に落ちる事もなく、巧く行けば一歩を進めて、何かを掴み得るのであるから、所謂、捨鉢の相撲を取るのと、同じ事で、何うしても、身分の低い者の方に、眞の活動者が現はれるのは止むを得ぬ事態だ。

松陰の門下で、一番に、年齡の若かつたのが、品川彌二郎である。松陰が、深く愛したのも、彌二郎であつた。安政六年に、愈々、松陰が、幕府の命に依つて、江戸表へ、監送される事になつた。松陰の監送は、極祕のうちに取扱はれたが、忽ちにして漏れた。之れを聞くと、門人の憤慨は、一と通りでなかつた。彌二郎は、未だ元服前の、少年であつたが、此事に憤慨の餘り、參政職、周布政之助の邸へ、飛込んで來て、何でも面會したい、といふ。周布の家來は、頻に拒んだけれども、肯かない。遂に押問答の末が、周布は、不在である、といふから、そこで、彌二郎は、

『宜しい。御不在とあらば、止む事を得ないから、御歸りまで待受ける』

と言つて、一旦、邸外へ出たが、軈て、歸つて來ると、大きな德利を、下げて居た。無論、其中には、酒が這入つて居る。軈て玄關の式臺へ、胡坐をかいて、德利の口から、冷酒を飲み始めた。周布の出來も、厄介な餓鬼だ、とは思つたが、對手になるのも、面倒だから、棄てゝ置くと、彌二郎は、飲みつけない酒を、冷で一升餘り、やつたのであるから、頭は、グラ〳〵して來て、眼は、チラ〳〵する。迚も、坐つて居られなくなつた。自分の丈よりも長い、刀を引拔くと、

『御當家御家來に、御斷りを致す、彌二郎は、酩酊を仕つたから、是より醉狂を致します。御免候へ』

と、言ひ終ると、其長い刀で、襖障子の嫌ひなく、片端から切捲くる。何しろ、醉つぱらつて、氣が違つた、といふ、前觸をして置いて、爲るのであるから、何うにも、仕様がなかつた。殊に、子供ではあるし、旁周布の家來は持餘して、此旨を、周布に告げると、周布は、苦笑ひをして、

『何うも、あの惡戲小僧には、困つたものぢやが、さういふ譯なら、會ふてやらう』

と言ふて、面會を許した。

何故、周布が、品川を避けて居たか、といふと、松陰の門人には、一切會はぬ事に、極めて居たからである。松陰が監送される、といふ事を聞いて、其門人に、攻掛けられては堪らぬから、周布も、此際は、成るべく會はぬやうにして、居たのであるけれども、彌二郎の遣方が、餘りに露骨であつたから、却て可愛らしいやうな、感じが起つて、面會する氣になつたのだ。其時に、彌二郎は、涙を流して、

『松陰先生が、江戸へ送られるのを、何うか、貴下の力で、中止するやうにして、貰ひたい』

と言ふて哀訴するのであつた。周布も、同情の念には堪へなかつたが、此時には、もう如何ともする事が、出來なかつたのであるから、色々に慰めて、

『成るべく、其希望に反かぬやうにする』

と、ほどよく言ふて、返してしまつたが、併し、折角の彌二郎が苦心も、水の泡になつて、松陰は、江戸へ送られる、と、傳馬町の牢で、首を斬られてしまつた。

それから後の、彌二郎は、先生の書遺したものを讀んだり、或は、膝下に呼付けられて、始終、訓戒された、先生の意見に基いて、段々、有志の交際をしながら、到頭、一人前の志士となつて、押も押されもされぬ、身分になつたのである。

木戸と野村が、下關へ、やつて來た時には、彌二郎が、昔の奇兵隊の、殘黨を集めて、幅を利かして居た、時であつた。野村は、其事情を、よく知つて居るから、下關へ着くと、木戸を勸めて、先づ、品川を說付けて、諸隊士の間の、聯絡を取らせて、鎭撫の手先に、使ふ事にしたのである。

一四

明治二十五年、選擧干涉の大事件は、彌二郎のやつた事であるが、隨分、慘虐を極めたものであつた。

當時、民黨、吏黨の、兩派に分れて、鎬を削つて居た時であるが、議會が解散になつて、臨時選擧が行はれる、と、彌二郎は、內務大臣として、二十五萬圓の官金を散布して、盛に吏黨の候補者を、擔ぎ上げて、一方には、警察權を濫用して、民黨の候補者を迫害し、其運動員なぞて、或は斬られたり、或は家を燒かれて、悲慘な境遇に、立つた者は、少なくなかつた。

併しながら、天は、斯くの如き、暴虐なる政治家に、與するものでないから選擧の結果は、品川の豫想とは、全く反對に、吏黨として、當選した者は、衆議院の椅子、四分の一を占むるに、過ぎなかつたのである。其時分に、此男の、指揮の下に、吏黨の候補者となつて、善良なる選擧民に、危害を加へた者が、今日になつて、民黨面をして居る奴もあるから、可怪しなものだ。

此一事から見ると、品川は、慘忍な政治家のやうではあるが、併し、それは、時の勢ひで、所謂、行掛りなるものが、其處までに、やらせたのであつて、實際に於ての品川は、存外、情にも厚かつたし、涙もあつたし、人間も正直であつた。それだから、是までに露骨な、選擧干涉も、やれたのであらう。其失敗に懲ず、是は何うしても、政黨の力を以て、立つのでなければ、議會政治の下には、何うする事も出來ない、と考へて、それから組織したのが、例の國民協會である。

何ういふ考へからかは解らないが、西鄉從道が、道件になつたのは、不思議な對照である。火のやうな品川と、水のやうな西鄉が、一つになつて、而も、政黨運動を始めた、といふのだから、可怪しいぢやないか、到頭、是が爲に西鄉は、高輪の家も地所も賣拂つて了つた。それでも、ホンの二十人か三十人の議員しか、引込む事が出來ないで、

國民協會は、無慘な有樣で、後の穢多村へ、引繼ぐ事になつた。この連中が、桂の麾下に馳參じて、新政黨組織の一部分に、なつて居る。これが、再轉三變して、今の民政黨の幹部に、なつて居るのだ。

話は、少し橫に外れたが、品川の話が出たから、序に言ふて置いたのだが、晩年の品川は、斯んな調子で、方向を誤つて、その末路は、甚だ淋しかつたが、よく松陰の遺訓を重んじて、眞面目な働きをした。品川を見れば、さう憎むべき所は、無いのであつた。

野村から、迎ひが來たから、直に訪ねて行く、と、意外にも、其席には、木戶も居つて、非常な、歡待を受けた。

『全體、何ういふ譯で、貴下は、御出でたのか。未だ東京に、居られる事とのみ、心得て居たが、何時、此方へ歸られたか』

木戶は、稍微笑を浮べて、

『イヤ、今日は、君に、降參しに來たのぢや』

『エツ、降參とは』

『兜を脫いで、品川の陣門に降る、一幕ぢや。ハツハツハ』

何の事か、品川には、少しも解らない。

『何ういふ御話ですか』

『外の事ではない。例の脫兵騷ぎぢや』

『ハヽー、それが、何うしましたか』

『まさか、君は、やつては居るまい、と思ふが、あアいふ事をされては、洵に困るのぢやから、我輩も、それが心配で、歸つて來たのぢやよ』

『成程』

『それに就ては、是非・君の力を借りて、其鎭撫を、引受けて貰ひたい、と思ふのぢや。實は、我輩の力にも及ばぬのであるから、否應なしに、今日は承知させようと、いふので、野村も、斯うして一緒に來たのぢやから。此際は我輩を助けて、鎭撫に努めて、貰ひたいのぢや』

『フ、ム、そりやア、全體、何ういふ譯なんですか』

『別に、何ういふ譯と、いふ事もないが、今の場合に、長州藩から、脱兵騷ぎなぞが始まつては、それこそ、千仭の功を一簣に缺く、といふもので、御維新の際に、あれまでの働きをした、長州藩が、同士打の騷ぎで、醜態を曝露する、といふやうな、事は、御互に愼まなければならぬ。それやア、不平を、言ひ出したら、皆、あるのぢや。今騷いで居る人々は、我々に對して、不平を、有つて居るのぢやらうが、我々とても、亦相當に不平はあるのぢや。今日の位地に昇つたから、それで滿足か、といふに、決してさういふものぢやない。或は、何等の位地も得ないで國許に、安靜に暮して居る人で、却て、其境遇は、喜んで居る者もあるだらう、と思ふ。苦情や不平は、言ひ出したら、限りのないものぢやから、氣長に、其欲を滿足させる、考へで居て吳れゝば、我々、が惡くは取計らはぬのであるから此際に於ては、何うしても、暴動なぞを起されては、困るのぢや。それを治めるのに、我輩の手を以てする事は、難かしいのぢやから、君等の力に依つて、之を成し遂げたい、と思ふ。それで今日は、斯うしてやつて來たのぢや』

是から木戸は、頻に品川を、說き始めた。其間には、野村も、口を添へて、或は理を以てし、或は情を以てし、樣々にして說付けた。元來、品川といふ人は、情の人であるから、到頭、動かされてしまつて、木戸の爲に、一臂の力を貸す、といふ事になつた。

品川は、存外、若い連中の間に、勢力があつたので、諸隊士との連絡も、巧く取れたし、又、鎭撫の上に於ても、便宜を得たのであつたが、併し、時の勢ひは、なか〳〵そんな事で、一旦、燃上がらうとした、火の消えるものではないから、矢張り、鐵砲を擊つまでの騷ぎにはなつたが、一時は、是で頗る、便宜を得たのである。

相談は、斯う極つたが、玆に一つの難儀は、充分の活動をするには、金が不足だ。それに就て、木戸は、頗る苦しんで居た。所へ、折好くも、此事を心配して、東京から、井上馨が、乘込んで來た。長崎の方へ、政府の御用で、出張する途中であつたから、井上が、存外に、大金を所持して居たので、是が又、木戸の爲に、一つの幸ひになつた。

一五

井上が、長崎へ行く用事は、政府の內命に依つて・軍器買入の爲であつた。其頃の政府は、漸く陸軍の制度が極つたばかりで、各鎭臺へ對する、軍器の供給が、充分に出來なかつたのであるから、是が爲に、井上は、軍器買入れの役を申付かつて、長崎へ行く途中、國元の事が心配になるから、態々、下關へ、出て來たのだ。所が、野村と木戸が、來て居て、頻に脫兵鎭撫に付て、相談して居る、と、聞き出して、訪ねて來たのである。

木戸は、品川を說付けて、鎭撫の手傳を、爲せる事にしたが、何れにしても、金が先に立つのである。實の所を言へば、木戸は、今までの報告を、過大に失するものとして、歸國するにも、充分の手當をする丈、金を持つて來なかつた。野村や品川に會つて、段々、聽いて見ると、評判よりは、騷ぎの方が、根强くなつて居るので、初めて驚くやうな始末であつたから、兎に角、此場合は、充分の金が無ければ、動きが取れない。其前に、井上が長崎へ行く事は、知つて居たのであるから、從つて、井上の手元には、何れだけの金が、有る位の事は、よく判つて居たのだ。

『ヤア、御心配でした』

と言ひながら、井上が、席に着くのを待兼ねて、木戸は、

『オイ、井上、好い所へ、來て吳れた。實は、困つて居た所ぢやから、君の來たのは、此上もない仕合せぢや』

『ハ、ー、何か、我輩でなければならぬ、用事が出來たのかね』

『別に、君が居らなければならぬ、といふ事ではないが、兎に角、君の手元に、政府の金があるだらうから、それを、少し置いて行つて、貰ひたいのぢや』
『ウム、そりやア、持つて居るが、金を何うしやう、といふのか』
『品川を說付けて、漸く味方にはしたが、併し、騷ぎの範圍が、擴がつて居るから、何うしても、金を持つて居なければ、手を着ける事が、出來ないのぢや』
『そりやア、困つたでせう。宜しい、何程でも置いて行くから、使つたら宜いでせう』
是から段々、井上と相談して、相當に金は受取つたから、木戶も、漸く是で一と安心した。品川や野村の活動も、從つて充分に、出來るやうになつた。

有體に言へば、此時代が、政府の、最も苦心した時で、表面に於てこそ、天下泰平を謳ふて、新政府の基礎は堅いやうな顏をして居ても、其內部へ這入れば、隨分、樣々の分子があつて、何時それが、衝突して、何んな騷ぎになるか、判らないのであつた。後に精しく述べるが、其頃から、征韓論が、頭を持上げて來て、久留米の佐田白茅が、曩に征韓の建白をして居た關係から、再び政府に召されて、外務省の役人となり、同時に、森山茂といふ人も拔擢されて、佐田の相役となつた。此兩人が打揃ふて、朝鮮へ行く事になつて、朝鮮政府と、掛合つて見ると、無法な事ばかり、言ふて居て、到底、話は平和の中に、治まりさうも無いから、據所なく、歸つて來て、此旨を、政府に復命したが、之が爲に、征韓論を唱へる者は、倍々、多くなつて來て、それを幸ひに、征韓論を煽りつけて、何か一と仕事しやうとする連中も、出て來る、政府の方では、色々な、改革やら計畫の爲に、金を要するので、征韓の事は、捗々しく進まない。從つて、それに對する、不平が、大分酷くなる。其上に、帝都を、東京に遷した、といふに就ての不平を、懷く者もあつて、是は、公家の愛宕通旭を、中心として、與黨も多く居た。其他、樣々の事が、原因となつて、到る處に、謀叛の萠が、現れて來た。長州の脫兵騷ぎも、幾分か其方に、關係があつたのだ。それであるから、此騷ぎが大きくなつて、長く續くやうな事になれば、其響は、全國へ及ぶのであるから、木戶等の苦心したのも、決して無理は無いのである。

井上が、長崎へ行くのは、左までに、急ぐ用事でもないから、兎に角、當分は、木戶の手傳をして行く事に、なつたので、此上もない幸であるから、長府、岩國、德山の各支藩へ對して、窃に井上から、手を入れて、側面より、木戶の鎭撫を助ける、といふ手續きが取れた。

一切の手筈が付いて、木戶は、密に萩へ行くのであるが、直に萩へ行くのは危險であるから、努めて、他に知られないやうにして、一先づ、山口へ、やつて來て、藩廳へ這入つた。木戶が來たといふ、事が知れると、騷ぎが大きくなるのを、虞れたからである。丁度、其時に、杉孫七郎が、山口へ、來て居たので、木戶の顏を見ると、今まで困つて居た、杉も、漸く安心の胸を撫下した。
『何うも、今度位、困つた事は無い。何方を見ても、同藩士で、唯一時の考へ違ひから、斯ういふ事になつたのであるから、さう手荒な事も出來ないし、さればとて、棄てゝ置けば、騷ぎが大きくなるし、何うにも、斯うにも、手の着けやうが無くて、此位、困つた事は無い、貴下が見えたのは、此上も無い、好都合であつた』
『我輩も、早く來やうとは、思つたのぢやが、東京の方でも、なか〳〵面倒な事が、續いて居て、容易に出る事が出來なかつたが、漸くにして、やつて來たやうな譯ぢや。何しろ、困つたものぢやな』
『大樂と富永の奴が、あの不思議な、辯才を以て說廻るのぢやから、如何とも、手の着けやうがない』
『そりやア、さうだらうとも、さういふ事に掛けたら、實に巧な奴等だから、定めて困つたらう。併し、品川に申付けて、置いた事があるから、其返辭を待つてから、手を着ける事にしやう』
と、互に鎭撫の方法に就て、相談を始めた。折柄、俄に喊の聲が起つて、銃聲さへ聞えるので、兩人は、思はず立上つて、窓から戶外を見ると、意外千萬にも、澤山の兵士が集まつて、ワイ〳〵いふて居るのだ。

一六

富永と大樂は、各隊の兵士を煽動して、今にも騒動を起させやう、として、晝夜を掛けての奔走であつた。所へ、品川がやつて、來た、といふので、無論、是は自分達の、應援の爲に、來たに違ひない、といふ鑑定から、非常に歡んで、品川を迎へた。

品川は、木戸から頼まれて、實は、鎭撫の目的で、やてつ來たのであるが、富永と大樂が喜んで、自分を迎へて呉れたから、此調子では、巧く話し込む、と、鎭撫の目的を、達する事が出來る、と思つて、心密に喜んで居た。富永は、膝を進めて、

『オイ、品川、お前が、下關の方に、頑張つて居て呉れるから、我々も、安心して居たのぢやが、斯うして、山口まで、乘出して來て呉れた、といふのは、如何にも有難い事ぢや。サア是からは、一緒にやる事に、しやうぢやないか』

大樂も、共に口を添へて、

『我々、兩人の所へ、品川が、加はつて呉れゝば、鬼に金棒ぢや。此上の事は、我々三人の思ひ通りになるのぢやから、都合に依つたら、此勢ひで、東京へ、乘出して行つても、面白からうよ』

非常に乘込んで、話し込むので、流石の品川も、鎭撫に來たのだから、そんな相談には、應ぜられないとも言へず、聊か面喰つて、兩人の顔を見て居る、と、

『時に、品川、下關の方の隊士は、何ういふ風になつて、居るか。此方は、もう今夜にも、事を起すやうに、なつて居るのぢやが、實は、各地から相應じて、同時に、やる方が、都合が宜からう、と思ふから、お前が、來たのは幸ひぢやから、其打合せも、スツカリして置いて、お前と一緒に、兩人の中、誰かゞ行く事にしても、宜いが、下國の都合は、何んな事になつて、居るか』

と、言はれたので、品川も、何とか答へをしなければならなくなつたが、唯一つ、玆に慮るべき事は、今夜にも、事を起して、差支が無い、といふのは、それまでに、準備が整つて居るのか、と思ふと、木戸の身の上も、案ぜられてならない。何とか、口實を設けて、一兩日は、事を起すのを延期させるのが、差當つての必要があらうと、早くも考へて、

『マア、さう急がずとも、宜からう。輕卒に、事を起して、大事を誤まつてはならぬから、もう少し、熟議を遂げて、徐に事を起す事にしたら、何うぢや』

何事に就ても、機敏な大樂は、何うも、品川の調子が怪しい、と睨んだ。

『品川、貴樣、何時もの元氣に似合はず、大層、弱い事を言ふな』

『別に弱くはないさ』

『イヤ弱いと、俺は見た。何故、さういふ弱い音を吐くか。斯ういふ事は、勢ひを以て、進んで行くに限るのぢや。熟議などいふ事をして居たら、それこそ、目的を誤る事に、なるのだ。既に機は熟して居るのだから、我々が、ソレやれと、聲を掛ければ、それで大事になるのぢや。先づ取敢ず、事を起す事にしたら、何うぢや』

もう此處まで、話が進んでは、品川も、頭巾を被つて居る事は出來ぬ。何とか、本音を吐かなければならなくなつた。

『全體、君等が、事を起す、といふのは、何をしようといふのか、それから、聽かなければならぬのであるが、政府に對する不平は、それとして、兎に角、何の爲の不平であるか、といふ事を、明かにして掛からなかつたならば、唯、無謀に事を起した、といふ事になつて、惡い名前ばかり、取る事になるだらう、と思ふが、其邊の考へは、何う付いて居るのか。それを聽きたいのぢや』

『そんな老人じみた事を言ふて、愚圖々々して居ると、何事も、出來ぬやうになる。貴樣の、平生にも似合はぬが、何うして今日は、そのやうな意氣地の無い事を、言ふて居るのか』
『別に、意氣地の無い、といふ事はないのぢや』
『それならば、我々に、同意してしまつたら、宜からう』
『併し、一旦、事を起したら、其成敗で、我々の浮沈が極まるのぢやから、輕卒な事は、何處までも出來ないさ』
富永は、腕を組んで、大樂と、品川の押合を、聽いて居たが、卒然として、
『オイ、品川』
『何ぢや』
『貴樣、木戸に、會つて來たな』
『イヤ、會はぬ』
『會はぬ事はない。必ず會つて來て居る。それで、さういふ弱腰になつたのぢやらう』
圖星を指されて、品川も、聊か驚いたが、素知らぬ顏で、頻に辯解はするが、平生の品川に似合はず、今日は、受太刀になつて、答辯は、左支右梧であつた。
斯ういふ事情であるから、何時まで、押問答をした所で、果しが付かない。そこで、富永と大樂は、相談こそせぬが、此場合に、品川を手放しては、不利であると、考へて、何でも構はぬから、品川を、抑へて置くに限ると、決めた。品川が、歸らうとするのを、無理遣に、押付けてしまつた。それであるから、品川は、兩人に會つた狀況を、木戸へ報告すべく、約束はして來たのだが、外へ出る事が出來ないから、木戸の方へ、今夜の中に、或は事が起きるかも知れない、といふ知らせを、爲る事が出來なかつた。されば、藩廳へ、やつて來て居た、木戸が、四方を取捲かれて、賊の聲や、鐵砲の音を聞いてから、初めて驚いて、身動きも付かないやうな、破目になつたのも、此手違ひか

らであつた。
偖て、藩廳にあつて、四方を圍まれたので、木戸は、玆に至つて、進退窮まつた。尤も、包圍して居る、脫兵連は、木戸が、藩廳に、來て居る事は、未だ知らなかつたのであるから、それだけに、其攻擊方は、幾分か弱かつた。若し、其時に、木戸が、來て居ると、判つて居たならば、それこそ、木戸の身は、何うなつたか知れない。

一七

深い才智のある、木戸が、斯うしたヘマを働いたのは、詰り、敵を侮り輕んじたからである。富永や大樂が、何う逆さになつて、騷いだ所で、大概、知れたものだと高を括つて掛かつたので、斯かる破目に、陷つたのである。各隊の小隊長以上の者が、不平を懷いて居たのは、事實であつた。富永や大樂が、如何に煽動を、巧にした所で、自身に、不平の無い場合に說かれたのでは、それ程に、感激もしないが、各々、相當に、不平を懷いて居る、所へ、大樂や富永の說方が巧かつたから、そこで思ふ壺に嵌つて、此騷動が、起つて來たのだ。
何等の防禦準備も無い、藩廳の中に圍まれた、木戸は、袋の中の鼠である。若し、木戸が、藩廳に來て居る、といふ事が判つたならば、一氣に、攻込んで來て、木戸の生命は、無かつたかも知れないが、まだ其事が知れずに居た、といふのは、木戸の武運が、あつたのだ。併し、何れにもせよ、此難關を切拔けて、善後の策は講じなければならぬのであるから、何とかして、圍みを脫れて、一旦は、何方かへ、引揚げたいものだ、と、頻に苦心して居る所へやつて來たのは、藩廳の雇吏になつて居た、藤井八十枝と、いふ人であつた。
此人は、木戸が、會薩の二藩から、苦められて居た、文久の昔から、懇意になつた人で、元來が、長州藩士ではない。それが、不圖した緣で、木戸と、懇意になつてから、深く其爲人に服して、頻に木戸の爲に、働いた所から、木戸も、藤井に對しては、充分に援助を與へて、何れ、東京へ呼出す事にしても、それまでは暫く藩廳の役人として、

其時の來るのを、待たせて居たのである。

『意外の珍事が出來して、定めて御困りで、ございませうな』

『ウム、藤井か、今宵に迫つて、斯んな騷ぎが、始まらうとは思はなかつたので、頗る閉口ぢや』

『何となさる、御積りですか』

『サアー、今、何うするといふ、考へも從いて居らぬが、兎に角、此處を、一時脱れたい、と思ふが、何とか工夫は、あるまいか』

『ハヽー、一時、藩廳を脱れて、何とかなさらう、といふのですか』

『さうぢや。此處で、圍まれて居ては、何うする事も出來ぬからな、我輩が、一日、圍まれて居れば、それだけ脱兵騷ぎが、激くなるのぢやから、一刻も早く、圍みを脱れて、鎭撫方を計らひたい、と思ふのぢや。お前の分別で、宜い方法は無いかな』

『さうでございますな』

と言ひながら、藤井は、暫く考へて居たが、

『斯ういふ事になさつては、如何でございますか』

『ウム、何うしよう、といふのか』

『私が、是から廳内に病人があつて、藥を取りに行く、といふやうな、風を裝うて、門を出ますから、必ず脱走兵が、之を拒むに、違ひない。そこで、私が、極力爭ひます。詰り、病人の爲に、藥を取りに行く、といふのを、拒むのは怪しからぬ。と言ふて爭ふたらば、段々、騷動が大きくなつて、斯ういふ場合ですから、他の方面に居る者も表門へ集まるやうに、なりませう。其間に、何處からでも、遁れる事になすつたら、如何でございますか』

『そりやア、面白い考へぢやが、併し、萬一、お前の一身に、危い事でも始まる、と、困るからね』

『そりやア、構ひませぬ。私は、一旦、危い目に遭ふて、一身の方向にさへ、迷つた場合に、貴下の御助勢に依つて、生命を助つたのですから、惜しい生命でも、ありませぬし、藥取りに行く者を殺す、といふやうな、無法な事もしますまいから、私が、程よく爭ふて、成べく多く人を、其處へ集める、といふやうな、騷ぎ方をしますから、是非、貴下は、其間に遁れて戴きたい』

『それでは、氣の毒ぢやけれども、さうして貰ひたい』

木戸も、暫く考へて居たが、それより外に、遁れる途が無い。

『承知いたしました』

是から、藤井は、身仕度を整へ、藥罎を持つて、表門から、出掛けて行く。藩廳の役人の中にも、多少は、元氣なものもあつたのだから、藤井が、門前で、爭ひを始めたならば、一同が出掛けて、藤井の加勢をしやう。さうして、爭ふて居る中には、騷動が大きくなつて、夜の事でもあるし、旁、敵も、味方も、滅茶々々になつてしまふから、一時に、門前へ、集まつて來るに、違ひない。其隙を見て、木戸が逃げたならば、或は巧く行くかも知れない、といふやうな譯で、藤井は、表門へ、出て來た。是を見ると、早くも見張をして居た、兵士が一人、ヅカ〳〵と、側へ寄つて、

『オイ、何だ、貴樣は』

『ヘイ、私は、小使でございます。唯今、病人がございますので、藥取に參る所で、ございます』

『持つて居るのは、何だ』

『ヘイ、藥の壜で、ございます』

『何ぢや、藥の壜ぢや。何れ見せろ』

藤井が、持つて居た、壜を奪つて、頻に見て居たが、軈て、傍の石を望んで、パッと打付けたから、壜は粉々に、

なつてしまつた。藤井は、之を見ると、眼の色を變へて

『貴下は、何をなさるんですか』

『何をするかつて、此騷動の最中に、藥なぞを取りに行く、といふのは、飛んでもない奴だ。門を出す事は、罷りならぬ』

『そんな、亂暴な事は無い。縱令、戰爭の中でも、病人があれば、勞つてやる、といふのが、武士の道ではありませぬか。況して、戰さといふのではなく、貴方等は、何かの願ひの筋があつて、斯うして、藩廳を、取圍んで居るのでせう。それが、藥取に行く、といふのを妨げて、而も、藥壜まで壞してしまふ、といふのは、怪しからぬ事だ』

『何だ、貴樣は、小使の癖に、生意氣な事を吐すな』

と言ひながら、藤井の頭を、一つコツンと、やつた。

『是は怪しからん。貴方は、亂暴をするのですか』

と、呶鳴つた。藤井の聲が激しかつたので、豫て打合せをして置いた、廳內の十四五人の者が、各々得物を携へて、バラ／＼と、駈付けて來た。

一八

井上は、下關で、木戶に別れる、と、直に長府へ、乘込んで來た。脫走兵の騷ぎは、山口が、中心點になつて居たのであるから、何うしても長府で、之を牽制する、必要がある。從つて、長府の藩士を說いて、此方面を、巧く押へて置けば、山口の方へも、其響きで、牽制の效が現れるのであるから、井上は、頻に盡力して居る傍、味方の者を使嗾して、城下の四方に張番をさせ、往來の者を、一々誰何して、萬一にも、山口の脫走兵と、連絡を通ずるやうな者があれば、片端から押へて、檢束する手順を、付けて居たのだ。

然るに、或日の夕方に、一臺の早籠が、山口の方から、やつて來たから、豫て井上に、申付けられて居る、張番の者が、直ぐ之を取押へて、有無を言はさず、井上の前へ、同道して來た。そこで、井上は、籠に乘つて居る者を、取調べる事になつた。

『拙者は、井上といふ者であるが、お手前は、何れの藩士で、姓名は、何と仰しやるか』

『おいどんな、薩藩の者で、ごわす』

『ハヽー、薩摩の御方で、ござつたか』

『左樣』

『薩摩の御方が、何ういふ譯で、今頃に乘打をせられるのか。其次第を、承知いたしたい』

『實は、西鄕先生の申付によつて、山口の城下に、先般來、潛んで居たのでござるが、其要件は、豫て噂のあつた、脫兵騷ぎが、何ういふ風になるか。それを、見屆けて參れ、といふ事でごわしたから、唯今まで、潛んで居つたのぢやが、既に昨夜來、澤山の脫走兵が、藩廳を取圍んで、大い騷ぎを、やつて居るから、取敢ず其趣を、西鄕先生の許へ、御知らせ致さう、と思ふて、是から下關へ、向ふのでごわす』

井上は、初めて聞いた、山口の脫走騷ぎ、豫てさういふ事が、あつたらば、直に知らせて來るやうに、それ／＼手順は、付けてあつたのだが、未だ通知の來ない中に、此薩人から、斯ういふ話を聞かう、といふのは、意外の事であつた。併し、前後の態度から、又、其口調から察するのに、語る所に、僞は無いやうにも、思はれた。

そこで、井上が、如何にも、不安の念に堪えないのは、今頃は、木戶が、山口の藩廳に、行つて居る時分であるから、若し、此者の、言ふ通りに、脫兵騷ぎが、始まつて居るならば、木戶は、既に藩廳で取圍まれて、苦しんで居るに、違ひない。さうなつて見ると、一刻も早く、木戶を救ふ、計畫を立てなければならぬ。それにしても、西鄕が、斯ういふ小さな事に迄、深い注意を拂つて、配下の者を、山口へ、入込ませて置いた、といふ、其遣口には、唯感心

するの外はなかつた。

『西郷さんの御注意から、貴下を、山口へ、潜めさせて置いた、といふ事は、今、聽くのが初めてで、更にさういふ事は、承知して居らなかつたから、强ひて此處まで、御連れ申したやうな譯ぢや。御無禮の段は、何うか御免し下さい』

井上が、慇懃に挨拶して、無禮を謝する、と、薩人も、多少は、不滿は懷いて居たらうが、此挨拶では、怒る事もならぬ。

『斯やうな、騷ぎの折柄、早籠で、乘打を致したのでごわすから、多少の疑を受けるのも、無理の無い事でごわす。併し、先を急ぐ者でごわすから、此儘、御許しを願ひたい。如何でごわすか』

『サア、御隨意に、御出立下さい。御歸國の上は、西郷さんにも、よろしく申上げて下さい』

そこで、例の薩人は、籠を急がせて、下關の方面へ、立去つた。

所へ、山口の方から、急使が來て、脫兵騷ぎの模樣を、詳しく報じて來た。それに依つて見ると、井上の想像通り、木戸は、確に山口の藩廳に取圍まれて、困つて居るに、違ひない。流石の井上も、木戸を救ひ出すに就て、苦心して居る、と、下關で別れた、野村が、三好を連れて、やつて來た。

『やアー、好い所へ、來て吳れた。早速 相談があるから、マア、其席へ、着いて吳れ』

兩人は等しく、井上の前に並んで、

『大分、騷ぎが大きくなつた。今、斯ういふ次第で、山口の藩廳が、脫走兵の爲に取圍まれた、といふ事が判つたのぢやが、さうなつて見ると、何とかして、木戸を、救はなければならぬが……』

井上の言葉が、終らざる中に、三好は、膝を進めて、

『もう、此上は、致方が無いから、唯一戰に、脫走兵を打破つて、木戸を救ふの外は、あるまい。若し、拙者に、一大隊の兵を、與へて吳れたならば、美事に、木戸を、救ひ出すが、何うであらうか』

野村も、之には同意であつた。

『ウム、そりやア、宜からう。何うぢや、井上、三好に、一切を委せる事にしたら、何うだらうか』

井上は、手を振つて、

『イヤ、そりやア、いかぬ。それまでにせずとも、木戸を救ふには、道があらう。又、木戸が、藩廳に居る事を知つて、圍ふて居るのか、それとも、知らずに圍ふて居るのか。其邊の事情も、明かでない。若し、外部から兵力を以て、ひどく攻付けると、苦し紛れに、亂暴を働くやうな事にならうから、折角、無事に救ひ出さるべき、木戸を傷けるやうな事にもなるから、出兵する事は、考へものぢや』

『フ、ム、さうして見ると、木戸を救ふには、何うするのか』

『マア、待て、無論、取圍まれて困つて居るだらうが、木戸は、容易に手を束ねて、殺されるやうな無策の男でもないから、何とかして、遁れもするぢやらうし、又、圍まれて居る中に、ムザと、敵手に生命を奪られるやうな、拙な事もすまいから、兎に角、我々が、是から山口へ、向つた上で、一策を講ずる事にしよう』

斯う言はれて見れば、それにも、一分の道理はある。强て、出兵の說を、唱へる事は出來ないので、井上と同行して、山口へ行く事になつた。

一九

秋穗といふ所まで、船で行つて、それから陸行する事に極めて、三人は、長府を出たのだが、折柄の逆風に、何うしても、船を進める事が出來ず、是が爲に、一日遲れて、翌日になると、矢張り同じ逆風に、何うしても、船を進める事が出來ぬ。そこで、野村は、頻に躁り出した。

『オイ、井上、さう落付いて居ちや困る。木戸が、何れ程、才智のある男にもせよ、澤山の脱走兵に、取圍まれて居る以上は、容易に切拔ける事は出來まいから、萬一の事でもあると、取返しが付かぬに依つて、一刻も早く、山口へ、乘付けなければならぬ、といふのに、風が惡いから、船が出ない、といふて、風の治まるのを、待つて居る、といふやうな、迂濶な事は出來ない。是から、陸を行く事にしようぢや、ないか』

三好も、合槌を打つて、

『それは、無論、さうしなければなるまい。若し、愚圖々々して居て、木戸を、殺させるやうな事があつては、一大事ぢや』

玆に於いて、井上も、其氣になつて、愈々、陸行と決した。是から仕度して、出掛けやうとする所へ、一挺の早籠が、やつて來るから、ヂツと、其方を見て居ると、意外にも三人の前で、籠が下りた。垂を開けて、出て來たのは、今の今までも、心配して居た、山口の藩廳へ、取圍まれて居るべき筈の、木戸であつたから、三人は、夢かとばかり驚いた。

『ヤアー、木戸か』

『ウム、何うも、遠くから見たのに、貴樣等のやうぢやつたから、兎に角、籠を止めさせたのぢやが、何處へ行くのか』

三人が、心配して居た程ではなく、本人の木戸は、一向平氣で、更に脱走兵に取圍まれて、苦んで居た、といふやうな樣子もないから、三人は、聊か案外の思ひをした。

『貴下は、山口の藩廳で、取圍まれて居た筈ぢやが、何うして、此處へ來なさつた』

『ウム、其一條か。イヤもう、實に閉口した。何しろ譯も分らずに、騷いで居るのぢやから、重立つた者に會ふて、利害を諭して、解散させるといふやうな、手順も付かず、それに、我輩が、藩廳に來て居る、といふ事を知らずに、

取圍んで居たらしい。彼是、考へて見ると、矢張り此騷ぎは、我輩が、顏を出さずに、置く方が宜からう、と思ふて、何とかして、圍みを遁れやう、と思ふたが、何うにも、方法が付かぬ。所が、折好く、藤井八十枝と、いふ者が居つて、是が、京都以來の關係で、我輩の爲には、何んな苦しみも、忍んで吳れるので、本人の考へから、藩廳内に病人があつて、其藥を取に行く、といふやうな、風を裝ふて、表門へ出ると、一時に脱走兵に圍まれた。そこで、藤井が、極力抵抗して、段々、騷ぎを大きくする。それに、藩吏の中にも、手傳をする者があつて、四方を圍んで居た、脱走兵が殘らず、表門の方へ集つたので、裏門の方に、脱走兵の居らなくなつた。其隙を見て、遁れて來たのぢやが、實に危い事ぢやつた』

三好は、眼を丸くして、

『フ、ム、して見ると、矢張り圍まれて、居たのですな』

『さうぢやよ』

今更に、三人が感心したのは、それ程の苦しみをして居た、人のやうでもなく、強て尋たから、物語るやうなものの、木戸の方では、却て三人が、何で此處に、來て居たかと、いふ事に、不審を懷いて、其事情を質問するほどに、落付いた樣子を見ては、流石に、文久以來、屢々、逆境に處して、難關を切拔けて來た、苦勞の果の、木戸が思はれて、感心するの外はなかつた。玆に於いて、四人は、船宿の二階へ上つて、今後の策を講ずる事になつた。

そこで、段々、相談に移る、と、木戸の意見は、

『脱走兵の騷ぎは、意外に大きく、擴がつて居るやうぢやが、幸ひにして、之を統率して、秩序ある働きをする者が、ないのぢや。富永や大樂は、煽動して騷がせる事には、巧であるけれども、其勢力を纏めて、進んで行くといふやうな順序の立つた、藝當は出來ないのであるから、是から君等が、力を盡して、小郡へ、兵力を集めて、今にも、山口へ、攻めて行くといふやうな、樣子を見せたならば、彼等は、唯一時の勢に乘じて起つた、連中で、更

に將來の考を、有つて居ない者共であるから、必ず小郡へ、一時に集まつて來るに、違ひない。さうなれば、山口の方が、空虚となるのであるから、其隙を以て、我輩は、萩の城下へ乘込み、先づ君侯に拜謁して、今の場合に斯やうな騒ぎを、長く續かせる、といふ事は、天下の爲に、ならぬ事であつて、折角に、我藩の力を以て、德川を倒して、新政府を興し、天下太平の基を開いた、といふ、其功勞も、此一つの騒ぎに依つて、打消されるやうな事になつては、殘念であるから、是非、君侯の御指圖に依つて、藩兵を貸して貰ひたい、といふ事を申上げたならば必ず御承知になるに、違ひない。そこで、君侯、御聲掛かりの上で、鎭撫に行く、といふので、山口へ、乘込んで行つたならば、元來、之を統率する者もなければ、策を立てる者もなく、謂はゞ、烏合の衆が、一時の勢ひで、蜂起したのであるから、忽ちに鎭定するに違ひない、と思ふ。我輩は、斯ういふ風に、考へて居るが、君等の考へは何うであるか』

と、木戸は、順序を立て、鎭撫策を講じたので、三人も、手を拍つて、贊成した。

『そりやア、宜からう。是非、さういふ風の方法を以て、治めて貰ひたい』

『君等に、異存が無ければ、我輩は、是から直に掛からう、と思ふ』

『是非、さうして貰ひたい』

『それでは、役割を極めやうでは、ないか』

『それが、宜からう』

斯ういふ、相談の結果として、井上は、兵站部を引受け、三好は、專ら兵士を指揮する方に廻つて、野村は、四方八方へ奔走して、味方も集めれば、敵も牽制する、といふやうな、役を引受けて、木戸は、即時に、萩へ向つて、出發する用意に掛かつた。

一一〇

木戸が、策を立てた通りに、井上等三人は、それ〴〵手順を定めて、小郡へ、兵力を集める、と、果せるかな。山口の方へ、集まつて居る、連中が、小郡に向つて、押出して來た。そこで、三好は、兵士の指揮をして、頻に扱らつて居る。何れにしても、同じ藩士の間柄であるから、三好も、氣を入れて、戰さをする、といふやうな、考へはないのだ。擊つても、擊たれても、味方同志であつて、斯んな馬鹿らしい、戰ひはないのであるから、唯、自分等の畫策通りに、木戸が、早く萩から、乘出して吳れゝば、それで治まりは付くのであるから、それを待つばかりに、敵を扱らつて居れば、宜いのである。併しながら、斯ういふ戰さは、却て本當の戰さよりも、難かしいもので、三好の苦心は一と通りではなかつた。

偖て、木戸は、萩の城上へ、無事に着く、と、直に登城して、毛利侯に、拜謁した。

『オー、珍らしいのう。相變らず無事で、重疊ぢや』

『ハツ、君侯にも、何の御變りもなく、視着至極に存じまする』

『其方、此度、鹿兒島表へ、岩倉右大臣と共に參つたやうに、聞及んで居たが、如何いたして、歸國は致したのか』

『實は、岩倉公と共に、薩摩へ參るやうに東京は、出發いたしたのでござるが、國許の脱走兵の騒ぎを聞及びまして、其儘にはなり兼て、取敢ず事情、取調べの爲に、歸國いたしました』

『ウム、左樣か』

『就きましては、此際、御願ひのございまして、拜謁願ひ出ましたのでございます』

『フヽム、何ういふ事か』

『先般、山口の藩廳へ、參りました折柄、脱走兵の爲に取圍まれて、頗る迷惑を致しましたが、斯やうな騒ぎが、長

く續きまする事は、我藩が、今日までに立てましたる、功績を空しくする因で、ござりまして、一日も早く、鎭靜に歸せしめなければ、朝廷へ對しても、畏れ多い儀と考へまするが、夫に就て、君侯の御沙汰に依つて、幾何かの兵士を、私に御預け下さる事は、なりますまいか、此儀、偏に願ひ上げまする』

毛利侯も、今までは、脫走兵の事を、多少は聞いて居たが、左右の者が、强て申上げなかつた爲に、是程の騷ぎになつて居る、といふ事は、知らなかつたのだ。殊に、木戸が、山口の藩廳で、それ等の者に、取圍まれて困難した、といふやうな事も、今、本人から聞いて、初て知つたやうな譯であるから、聊か驚きの眼を見張つて、

『ハヽー、左樣の椿事があつたのか、余は、少しも知らなんだ。尤も、大政府の御處之に就て、不滿を懷いて居る者がある、といふ事は、承知を致して居つたが、それまでに、事情が逼迫して居る、といふ事は、今聞くのが初めてぢや、其方も、定めて迷惑を、致したであらう』

『御言葉にて、恐れ入りまする。私の迷惑は、如何樣にも堪へまするが、萬一、其累ひの君侯に及びまするやうな事がありましては、一大事でございますから、何卒、前に申上げました、願ひの儀、御聽屆の程、願上げまする』

『よし、承知いたした。其方が、望み通り、出兵いたして遣はす』

『然らば、早速に、係りの者へ、それ〳〵御沙汰の程、願上げまする』

そこで、世子の長門守から、其旨を、家來へ申付けたから、萩の兵を、繰出す事になつた。木戸に、勿論、其指揮をする、といふのではなく、唯、兵士の力を利用して、山口の藩廳を回復して、併せて、小郡に集まつて居る、脫走兵を鎭撫しよう、といふのが、目的であるから、蔭の人となつて、兵士に附添うて、山口へ、乘込んで來た。

木戸の見込は誤らずして、脫走兵の多くは、唯一時の、勢ひに驅られ、又、富永や大樂の煽動に乘つて、平生の不滿が爆發して、騷ぎ出したのであるから、固より深い根據が、あつての事ではない。殊には、澤山に、集まつて居る者を統率して、一纏めにする、といふやうな者は無いのであるから、騷ぎは大きかつたけれども、長く續くべき譯はない。殊更に、君侯の御沙汰に依つて、大兵が、山口へ迫る、といふ事を聞いて見る、と、小郡の方に、集まつて居る者は、自然に、後の方を、振返るやうな事になつて、思ふやうに、進む事が出來ない。彼是する中に、山口の藩廳は、一旦、乘取つたけれども、取戻されてしまつた。といふ事も、聞えて來る。旁、斯うなつて見れば、據るべき所を失ふたのであるからもう。解散をする外はないのだ。それに此以上、藩兵と、戰ふやうな事になれば、藩主にも、背く事になるのであるから、政府の敵となる事は、左までに恐れないが、藩主に刄向ふといふ事は、未だ舊幕の時代の習慣が、頭に殘つて居て、非常に恐れた時であるから、何時、散ずるともなく、段々脫走兵が、其仲間から脫走するといふやうな、譯で、小郡へ、集まつて居る者はチリ〳〵バラ〳〵に、なつてしまつた。

富永と大樂の二人も、左までに、深い根があつて、爲る事ではなく、謂はゞ、一時の勢ひに乘じて、面白半分に、煽動したやうな傾きもあつて、是までに、人を煽動する事は、上手であつても、偖て、其後を引纏めて、何うする、といふだけの力は無いのであるから、脫走兵が散ずると、共に、自分達は、何處ともなく、踪跡を晦ましてしまつた。

一一

多數の人を煽動して、騷ぎを起させる、といふ事は、誰にでも出來さうであるが、なか〳〵さうはいかない。併し、煽動に巧な人は、何うかすると、あるものだが、偖、其煽動してから後の、人を引纏めて、其騷動をして、意義ある騷動ならしむる、といふ事に、力を有つ人は、さう澤山にはない。昔からの英雄とか、豪傑とか、いふやうな、連中は、即ちそれであつて、唯人を煽てゝ、使ふ、といふ事だけが、上手でも、仕事の纏まりを、付ける事の出來ない者は、中途で、挫折してしまつて、唯、煙花を揚げた後のやうに、一時はパツとして、綺麗で、人の喝采を博するが、間もなく、火が消えてしまへば、何の印象も、人の頭に遺さない、といふやうな事になる。されば、煽動に巧にして尙ほ其上に、多くの人を、統率して行く、といふ事が出來れば、軈て、其人は、歷史の上に、名をなす人になるの

だ。富永とか、大樂と、いふやうな人は、學問もあつたし、辯才もあつて、なか〳〵立派な人物ではあつたが、煽動する事ばかりが上手で、引纏めをする事が、出來なかつたのであるから、到頭、名を成し得なかつたのみならず、其末路は、實に悲慘は極めた。富永は、其後、東京へ出て、例の愛宕通旭や、初岡敬次などに與して、政府の爲に捕はれ、詰らぬ最後を遂げてしまつた。大樂は、關門海峽を越えて、九州へ這入り、久留米の有馬頼咸に依つて、事を成さうとしたのだ。

薩長二藩に對する、不平は、何の藩にも、あつたのであるから、巧に說いて行けば、大概な諸侯は、薩長二藩の排斥には、同意したのである。有馬の如きも、矢張り其一人であつて、中央の計畫には、同意して居たのだ。此人が上京して、澤主水正を說付けた時に、澤も、亦其企てに賛成したが、計らずも、澤の口から、祕密が漏れて、それから、政府の騷ぎになつて、到頭、一同が縛に就く事になつた。それは、後の話であるが、兎に角久留米へ乘込んだ、大樂は、色々な計畫をして、存外、藩士の間にも、同意者が出來たので、是から、九州の各藩へ渉つて、聯絡を付けて、大いに事を起さう、といふ考へを以て、頻に奔走して居た。所が、藩主の中に、大樂の乘込んで來たのを、不快に思つて居る者もあつた上に、中央の計畫が破れて、段々、人が、捉へられる、といふ事も、傳へ聞いて、其累が、若し有馬家へ及んでは、それこそ一大事である、といふので、何うしても、此場合に、大樂を殺して、暗から暗に葬つてしまはなければ、有馬の立場が困る、といふやうな、考へを以て、偏に有馬侯の安泰を圖らう、とした、忠義な武士が、密に計つて、或る夜、大樂を誘き出して、途中でパツサリ殺つてしまつた。

それが、後になつて、大樂の殺されたのは、有馬の藩士が、やつた事だ、と判つて、政府から、嚴しい談判になつた。止む事を得ず、其下手人を押へて、段々、取調べた、押へられた者の中に、松村雄之進が、未だ漸く十六七の少年であつたが、大樂を、斬る時に、連れ立つて行つた、一人であつた爲に、捕縛されて、非常な拷問に遭ふたが、松村はなか〳〵利かぬ氣の男だから、少年ながらも、天晴な振舞をして、當時の調係をして驚かした、といふ事がある。

大きな板に、五寸釘を打付けて、其釘の尖つた上を、歩かせられたのだ。松村の物語に依ると、三足まで歩いたのは覺えて居たが、それから先は、夢中で判らなかつた。といふ事であるが、兎に角、五寸釘の上を、三足まで歩く、といふのは、實に偉い者だ。是が爲に、松村は、足が思ふやうに働かないで、大概の場合には、俥に乘つて歩く、といふやうな、當時の記念の傷が、足に殘つて居る位であつた。それでも、白狀せずに、到頭、命を助かつてしまつたのだから、六十以上の老骨になつても、尚ほ浪人組の旗頭で、幅を利かせて行けたのは、無理もない事だ。

富永と大樂が、脫走兵を煽動して、是だけの騷ぎを仕出來しながら、事が敗れて、切腹もせず、また、藩廳へ、自首もせずに、行方を晦ました、といふので、毛利侯は、非常な立腹で、直に藩兵を以て、跡を追はせやう、として、騷いで居る。それを聞いて、木戸は、御前へ出た。

『恐れながら、申上げます。富永、大樂等の件に就て、非常に御立腹なさうに、ござりまするが、却て、兩人の行方を突止め、藩廳に於いて、自ら成敗を加へる、といふよりは、彼等の運命は、極まる所があるで、ござりますから、打棄て、置いて、自然の成敗に、委せた方が、宜しうござりませう。又、一般の脫走兵に對しましては、御情を以て、撫育せられる方が、後日の御爲にも宜からうか、と考へまするから、此際に於いて、寬大の御處置こそ、偏に願はしく存じまする』

といふ、穩かな意見を聽いて、毛利侯も、其考へになり、脫走兵に對してはそれ〴〵、呼出して、叱言も言ふたが、幾分の御手當も下さる、といふやうな譯であるから、一旦、騷ぎをした者も、大いに後悔して、藩侯の爲には、何んな苦しみも、忍ばなければならぬ、といふやうな、考へになつて、さしも世間に、評判の高かつた、脫走騷ぎも、是で全く、鎭靜する事になつた。